

研究紀要 5

かながわの考古学

2000. 3

財団法人 かながわ考古学財団

研究紀要 5

かながわの考古学

2000. 3

財団法人 かながわ考古学財団

は じ め に

早いもので1990年11月に神奈川県立埋蔵文化財センターから“かながわの考古学第1集を”刊行してから10冊目を数えることになりました。初めのうちは統一テーマのもと、職員がそれに沿った内容で書いていました。4年後の1994年には旧石器時代から近世まで7つの時代別の研究プロジェクトが編成されまして、各時代プロジェクトがテーマを設定し共同研究としてその成果を発表するようになり、内容は一新されました。この間各研究チームは単年度ごと或いは複数年次にわたり時宜にかなったテーマを設定してきました。特にここ数年は膨大な資料の集成や、資料を多面的かつ深く掘り下げた分析が加えられるなど、共同研究のメリットを生かした内容がめだつようになってきました。

また、1997年からは個人研究の発表の場としての役割も果たしてきました。残念ながら本冊では掲載できませんでしたが、次号以降共同研究共々個人研究発表の場も提供していきたいと思っています。

節目の2000年を迎え新しい時代の幕開けです。職員一同気持ちを新たにし、これまで蓄積された膨大な資料に取り組み、かながわの歴史の解明に努めていきたいと思います。

本書が埋蔵文化財の調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導・ご批判を賜りますよう願っております。

2000年3月

財団法人 かながわ考古学財団
理 事 長 熊 田 節 郎

目 次

旧石器時代後半における石器群の諸問題 一新たなる相模野編年構築にむけて—	旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川における縄文時代文化の変遷V 中期中葉期 勝坂武士器時代文化期の様相 その3—文化的様相—	縄文時代研究プロジェクトチーム	19
弥生石器の基礎的研究(3)	弥生時代研究プロジェクトチーム	35
横穴墓の研究(6)—形態・構造面からの検討を中心に—	古墳時代研究プロジェクトチーム	49
神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究—その歩みと今後の視点—	奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	63
神奈川県内の「かわらけ」集成(4)	中世研究プロジェクトチーム	82
神奈川県下における近世井戸址の研究(3)	近世研究プロジェクトチーム	97

凡 例

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った成果である。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。
 - 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム
井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・白石浩之・鈴木次郎・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・御堂島正・吉田政行
 - 縄文時代研究プロジェクトチーム
天野賢一・井澤 純・井辺一徳・小川岳人・恩田 勇・加藤千恵子・長岡文紀・松田光太郎・山本暉久
 - 弥生時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・飯塚美保・池田 治・伊丹 徹・櫻井真貴・新開基史・高村公之・谷口 肇・西川修一・峰 治・村上吉正・渡辺 外
 - 古墳時代研究プロジェクトチーム
上田 薫・植山英史・柏木善治・近野正幸・長谷川厚
 - 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
大上周三・加藤久美・河野喜映・富永樹之・中田 英・依田亮一
 - 中世研究プロジェクトチーム
小田貞広・宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一
 - 近世研究プロジェクトチーム
市川正史・春日 昭・木村吉行・榎渕規彰・柳川清彦
3. 本書の挿図・挿表については各プロジェクトチームで作成し、図・表番号は各論文ごとに付している。また、執筆分担については各々の文末に記した。

旧石器時代後半における石器群の諸問題

—新たなる相模野編年の構築に向けて—

旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム

はじめに

1994年から1999年までの6回にわたってプロジェクトチームで継続的に検討してきた「神奈川県下における旧石器時代遺跡の各文化層から出土した石器群の特徴と問題点」については全時期一応区切りがついたので昨年度で終了した。未解決の問題点を残しながらも、個人研究ではなし得なかった成果があったものと確信している。

本年度は鈴木次郎、矢島國雄両氏の相模野編年と諏訪間順氏の相模野12段階編年の分析を中心に検討する。周知のように、相模野編年を創設した鈴木・矢島編年は1960年代の後半に行われた大和市月見野遺跡群の発掘調査や分布調査を契機として1976年「相模野台地における先土器時代研究の現状」と題して神奈川考古1号に発表された（鈴木・矢島1974）。その成果は各段丘面におけるローム層中の複数の黒色帯や特徴的なスコリアの存在と共にその厚いローム層中から石器群が層位的に出土したことにより、具体的な石器群の編年が明示された。その上で新たに良好な層位的出土例をもつ遺跡をもとに、遺跡間の出土層位を微視的に比較検討し、最小の文化層を単位とした諏訪間順氏の「相模野台地における石器群の変遷—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」と題して神奈川考古24号に発表された（諏訪間1988）。両氏等の先駆的で、緻密な時期区分論は大きな評価が与えられる。しかし時期区分は設定者の視点によって様々な意見があるのは当然のことであり、一つの視点のみが正しいということではない。時期区分は大別すれば細別が、細別すれば大別の論議ができるのは宿命のようなものである。したがって相模野編年を捉える場合には、単なる区分に迎合または批判するのではなく、両編年の時期区分の歴史的背景や時期設定者の視点が重要となる。

かくて鈴木・矢島両氏と諏訪間氏の相模野編年の分析をすることになった。そのうえで新たなる相模野編年を創り上げることができるかどうか摸索することにしたい。

(白石浩之)

1999年 旧石器（先土器・岩宿時代）研究プロジェクトチーム活動報告（11月30日現在）

- 1月14日 今後の研究テーマの決定：『新たな相模野編年に向けて』
- 2月16日 大塚健一：「相模野編年とその問題点」
- 4月16日 畠中俊明・栗原伸好：「矢島・鈴木編年と諏訪間編年の比較・検討-その1-」
- 5月17日 畠中俊明・栗原伸好：「矢島・鈴木編年と諏訪間編年の比較・検討-その2-」
- 5月18日 御堂島 正：「石器の使用痕分析」
- 7月16日 井関文明：「相模野編年上における剥片剥離工程と調整加工の類型化」
- 8月5日 吉岡遺跡群B区（第2次調査）における出土遺物および基本土層の検討
鈴木次郎：「相模野の編年研究の歩み（～1988）」
- 8月16日 吉田政行：「編年区分におけるナイフ形石器の捉え方」
- 11月2日 砂田佳弘：「相模野旧石器時代の相対年代と絶対年代」
- 11月16日 『情報交換』

相模野編年の現状と課題

1. 相模野編年の成立と現状

相模野編年は、相模考古学研究会による遺跡分布調査や月見野遺跡群・上土棚遺跡・小園前畠遺跡・地蔵坂遺跡等の発掘調査の成果をもとに1972年に大枠が示され（小野他1972）、1976・1978年に詳細な内容が提示された（矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978）。そこでは、古富士等の火山活動・相模川の地形形成・気候変動及び海面変化といった相模野周辺の自然環境の変動の中で、石器群の変遷・遺跡群の増減といった人類活動の歩みを捉えるという方向が示された。そして、石器群を捉らえる視点としては、剥片剥離技術や細部加工技術で示される技術基盤と器種（形態）・型式が一体の相関関係を持つという「石器群の構造」を重視し、相模野第Ⅰ～Ⅴ期に時期区分を行った。その内容は、第Ⅰ期が石刃技法とナイフ形石器の出現以前、第Ⅱ～Ⅳ期がナイフ形石器の隆盛

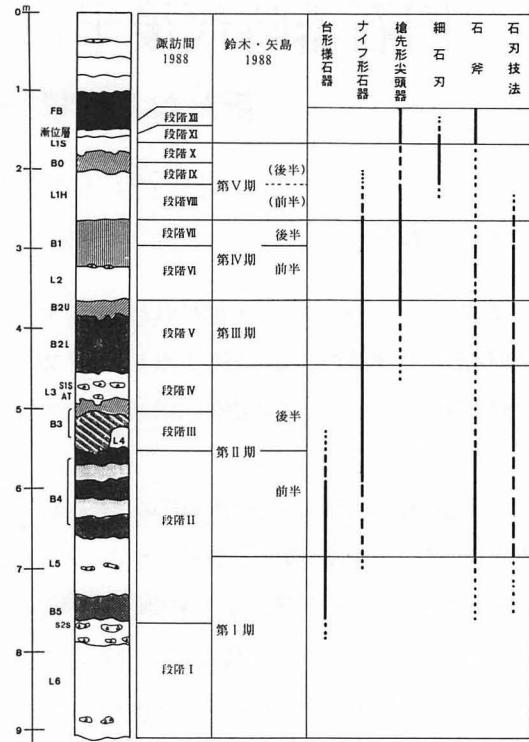
（Ⅱ～Ⅳ期は器種組成やナイフ形石器の特徴と技術基盤の違いにより区分される）、第Ⅴ期がナイフ形石器に代る槍先形尖頭器や細石刃の隆盛により特徴付けられる。その後、1988年には、新たに蓄積された豊富な資料をもとに細部の見直しがなされ、5期区分を維持しつつ細分を行っている（鈴木・矢島1988）。また、諏訪間順は、各石器群を出土層位で整理し、各器種の消長と形態組成の変化及び技術基盤の変化等によって石器群変遷の画期を捉え、段階Ⅰ～段階ⅩIIIの区分を行っている（諏訪間1988）。諏訪間による12の段階区分は、縄文時代草創期前半の石器群まで対象としていることや、細石刃石器群を2段階に区分していることなど、鈴木・矢島の編年と細部では異なるものの両者の区分は概略対応している。

2. 相模野編年の課題

現在、相模野台地の石器群の変遷は、立川ローム下部を除きおおよそ明らかにされている。もちろん細部の推移や石器群変化の背景・評価については、今後解明すべき問題点も多く、槍先形尖頭器の出現とその経緯、第Ⅱ期後半（段階Ⅲ・Ⅳ）と第Ⅳ期前半（段階Ⅵ）の石器群の類似性と相模野第Ⅲ期（段階Ⅴ）の評価、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群の同時期併存の問題、細石刃石器群の終末と神子柴系石器群の関係など枚挙にいとまがない。こうした中で、相模野第Ⅰ・Ⅱ期（段階Ⅰ～Ⅲ）の石器群の内容は、この地域のロームの厚さが災いして立川ローム下部の調査資料が少ないため完全に明らかにされているとはいえない。近年は、綾瀬市吉岡遺跡群など調査事例の増加に伴って当該期の再検討も行われているが（白石1996・矢島他1998）、解決すべき問題点が多く残されている。

最古の石器群

武藏野ロームより下層の石器群は、南関東では東京都の多摩ニュータウンNo.471B遺跡があるだけで、県域では知られておらず、今後、横浜・川崎市域の多摩丘陵、相模野の座間丘陵、県西部の大磯丘陵などの高位段丘の遺跡探索が課題とされる。



第1図 相模野編年と主要器種の推移

立川ロームの最下部では、石器の可能性のある資料は単発的には発見されているものの、まとまった発掘資料としては、吉岡遺跡群D区B5層が最古の石器群である。

石刃技法とナイフ形石器の出現

相模野第I期は、武藏野台地の西之台BX、中山谷X、武藏台Xbといった、石刃技法とナイフ形石器の存在が明確ではなく、チャートを多用した揉錐器・削器・ナイフ状石器等の小型剥片石器と礫器・石斧から構成される石器群の存在を想定しており（鈴木・矢島1988）、諏訪間の段階Iも同様と考えられる（諏訪間1988）。相模野では、今のところ、ナイフ状石器・台形様石器・削器・彫器等からなる吉岡遺跡群D区B5層の石器群がこの時期に該当する。

これに対して、相模野第II期は石刃技法とナイフ形石器の出現をもって画し、その前半期は武藏野台地のX層上部～IX層出土の石器群をもって位置付けた。その内容は、刃部磨製を含む石斧と台形様石器が発達し、ナイフ形石器は石刃素材の基部加工が安定してみられるものの、二側縁加工は非常に不安定である。相模野では、層位的にはL5上部～B4層出土の石器群が対比されるが、石刃は古山遺跡L5層上部等で出土しているものの、ナイフ形石器は今のところB4層上部にみられるだけで、B4層下部～中部の石器群は台形様石器や楔形石器により特徴付けられる。このことは、これらの石器群が器種組成の一部を構成するだけで、この時期の全体像がいまだ明らかにされていないのか、あるいは、こうした相模野の状況がこの時期本来のあり方を示すもので、武藏野や下総台地などのナイフ形石器出土遺跡を再検討すべきなのかが問題となる。ちなみに当該期の資料が豊富な、下総台地では、楔形石器を特徴とする石器群はX層からIX層中・下部までみられる一方で、中山新田I遺跡IX層下部では、台形様石器とともに石刃素材の基部加工や二側縁加工のナイフ形石器もみられる。

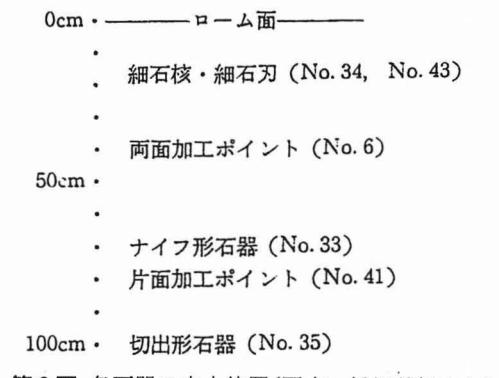
（鈴木次郎）

研究史

神奈川県内における旧石器時代遺跡の研究は、以前から活発に行われてきた。特にローム層の堆積状況が良好な相模野台地上の調査事例は、その好条件から編年研究に積極的に用いられ、その成果は各地の石器群の編年観にも大きな影響を及ぼしてきたといえよう（矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978、諏訪間1988など）。

1965年、岡本勇・松沢亜生は、相模野台地上における旧石器時代遺跡の分布調査の成果を報告し、当時の本台地上に44ヶ所もの当該期遺跡が存在していることを明らかにした（岡本・松沢1965）。各遺跡からは、細石核・ポイント・ナイフ形石器など各時期の石器が採集されており、各石器間の時間的位置関係はローム層の最上面から各遺物が包含されている部分までの深度で提示され、「無土器時代の石器編年を考えるひとつの資料となるであろう」とした（第2図）。これは、各遺跡間における土層の堆積状況の類似性を示すと共に、本台地における編年研究の優位性を示していると言えよう。

1960年代後半になると、上土棚・月見野遺跡群等の調査や相模考古学研究会による分布調査等が、また、武藏野台地では野川遺跡の調査が実施され、石器群の時空間的なまとめ



第2図 各石器の出土位置(岡本・松沢前掲より)

第1表 相模野編年に関する主な発掘調査・文献・シンポジウムの実施時期一覧

主な遺跡の発掘（本格）調査実施時期			主な文献・シンポジウム等の開催時期	
1968.12～1969.02 1968.09～同 10 1969.04～同 05	綾瀬市 大和市	上土棚遺跡（1次） 月見野遺跡群（1次） 〔第I、II、第III A・B、第IV A～D遺跡〕 月見野遺跡群（2次）〔第III C・D〕	1965.1	岡本・松沢「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」 『物質文化』6
1970.02 1971.08 1972.03 1973.03 1973.12 1975.03	大和市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市	相模野第149遺跡 小園前畠遺跡 地蔵坂遺跡（1次） 地蔵坂遺跡（2次） 地蔵坂遺跡（3次） 報恩寺遺跡	1971 1976.05	相模考古学研究会『先土器時代遺跡分布調査報告書相模野篇』
1976.11～1977.01 1977.04～同 05 1977.06～1978.03 1977.07～同 12	相模原市 大和市 大和市 綾瀬市	下九沢山谷遺跡 上和田城山遺跡（1次） 上和田城山遺跡（2次） 寺尾遺跡	1978.11	矢島・鈴木「相模野台地における先土器時代研究の現状」 『神奈川考古』第1号
1978.12～1981.01	大和市	一般国道246号線関係 上草柳〔第1・2地点、 第3地点東・中央・西、 第4地点〕遺跡 下鶴間長堀遺跡	1979.12	鈴木・矢島「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ』(1)
1979.07～同 12	大和市	月見野遺跡群 上野遺跡第1地点（1次）	1979.12	シンポジウム『ナイフ形石器文化終末期の問題』...（神奈川考古同人会）
1980.04～1981.02 1980.10～1981.05 1980.10～1982.04 1981.02～1983.03 1981.07～1982.05 1981.10～1982.10 1981.11～同 12 1982.06～1984.01	綾瀬市 大和市 間 営 市 相模原市 大和市 海老名市 大和市 藤沢市	早川天神森遺跡 月見野遺跡群上野遺跡第1地点（2次） 栗原中丸遺跡 橋本遺跡 月見野遺跡群上野遺跡第1地点（3次） 柏ヶ谷長ツサ遺跡 深見諏訪山遺跡 代官山遺跡	1982.11	シンポジウム『南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題』 (神奈川考古同人会)
1983.04～1984.07 1984.06～1985.07 1985.07～1995.03	大和市 相模原市 清川村	長堀南遺跡 中村遺跡 宮ヶ瀬遺跡群 〔ザザランケ、ナラサス、上原、中原、 北原、南、馬場、大野原遺跡〕	1988.03	鈴木・矢島「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ』(1)〈新版〉
1987.08～同 12 1987.02～同 06	大和市 綾瀬市	長堀北遺跡 上土棚遺跡（2次）	1988.04	諏訪訪問「相模野台地における石器群の変遷について —層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」 『神奈川考古』第24号
1988.05～1990.06	藤沢市	慶應SFC	1988.08 1989.03 1989.09	第1回研究討論会『AT降灰以前の石器文化』(石器文化研究会) 鈴木「第一章 先土器時代—赤土の中に残された人類の文化」 『大和市史1 通史編 原始・古代・中世』 第2回研究討論会『AT降灰以前の石器文化』(石器文化研究会)
1990.04～同 12 1990.10～1994.09 1991.04～1992.03 1992.04～1994.09 1992.06～1995.10	綾瀬市 綾瀬市 大和市 平塚市 伊勢原市	上土棚遺跡（3次） 吉岡遺跡群（1次） 県営高座渋谷団地内遺跡 原口遺跡 三ノ宮・下谷戸遺跡	1991.04 1994.03	シンポジウム『AT降灰以前の石器文化 ～関東地方における変遷と列島内対比～』 (石器文化研究会) 第1回 石器文化研究交流会(石器文化研究会)
1994.04～1998.12	藤沢市	用田バイパス関連遺跡群（1次）	1994.1	第2回 岩宿フォーラム／シンポジウム 鈴木「南関東地方の様相」 『群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集』
1994.11～1995.01	綾瀬市	地蔵坂遺跡	1995.02	静岡県考古学会シンポジウムIX 諏訪訪問「南関東地方AT上位石器群の変遷」「愛鷹・箱根山麓の 旧石器時代編年」
1996.10～1997.07 1997.05～1998.09 1998.04～2000.03	相模原市 大和市 綾瀬市	田名向原No.4遺跡 (仮) 大和配水池内遺跡 吉岡遺跡群（2次）	1996.07	シンポジウム『AT降灰のナイフ形石器文化～関東地方における V～IV下層段階石器群の検討～』(石器文化研究会)

が明らかになってきた。1970代に入り小野正敏・鈴木次郎等は小園前畠遺跡の発掘調査報告書の中で最初の相模野V期編年を提示した（小野・鈴木ほか1972）。これは単に石器組成・石器製作技術等の考古学的視点からのみの分析ではなく、絶対年代・地形・地質・気候変動・火山活動等の視点も踏まえた編年案であった。しかし、この時点ではまだ鈴木等が編年を考える上で最も重視している「石器群の構造」的視点は提示されていない。その後、矢島國雄・鈴木は小園前畠遺跡同様幅広い分析視点から「第四紀総合編年」をめざし、新たな相模野V期編年を提示した（矢島・鈴木1976）。ここでは、「各期の石器群について、石器製作技術（特に剥片剥離技術）と石器組成（特に特定器種・形態の消長）」を主体とし編年を行っているが、その背景にはこの両者に強固な結びつきが存在していることを主張している。それは、①各期の石器群には剥片剥離技術と特定器種・形態に強い関連があること、②量的に少ない直接生産用具および間接生産用具は、独自の

剥片剥離技術を持たず、その時期の特徴的な剥片剥離技術によって獲得された目的剥片や任意の剥片を素材とすること、③調整剥離技術においても直接生産用具に多用されるものが間接生産用具にも用いられる例が多いという3点についてであり、両者のこのような関連性を「石器群の構造」とした。以後資料の増加等に伴いいくつかの補足修正案も提示されてはいるが（鈴木・矢島1978、1988、鈴木1989、1994など）、「石器群の構造」という捉え方は、相模野V期編年の基本的な考え方となっている。

これに対し諏訪間順は、その後の資料の増加により基本的枠組みは変わらないものの、いくつかの相模野V期編年の細分案が提示される中で、「各期の細分された各々の石器群の内容は、相模野台地の移りゆく石器文化の一つの過程（段階）をそれぞれ表すものとして、積極的に評価する必要があるのではないだろうか」という見解から、「重複関係を持つ石器群を一文化層ごとに層位的に並べて整理し、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃、石斧等の出現・発展・終焉と、各器種の形態組成の変化、さらに剥片剥離技術と調整加工技術を中心とした技術基盤の変化等によって画期を見いだし、この画期から次の画期までの共通した特徴を持つ石器群を抽出し段階として設定」している（諏訪間1988）。この結果、諏訪間は鈴木等の相模野第I～V期までを10段階に、縄文草創期を2段階の合計12の段階に区分した。本編年においても、鈴木等と同様各段階の石器群について「新器種の出現、石器組成、技術基盤は全て構造的な強い結び付き」を持っている点を重視しているが、同時に「ある段階では石材までもその構造下に組込んでいる」とし、「石器群の構造」上における石材という視点の重要性についても新たに言及している。

現在、上記のような編年案が広く用いられているが、近年これまでとは様相を異にする石器群も数多く発見されている。相模野V期編年から二十余年・12段階編年から十余年、今一度相模野編年を再考する時期にあるのではないだろうか。岩宿の発掘から半世紀経った今だからこそ、0の視点から・・・（栗原伸好）

器種組成と編年

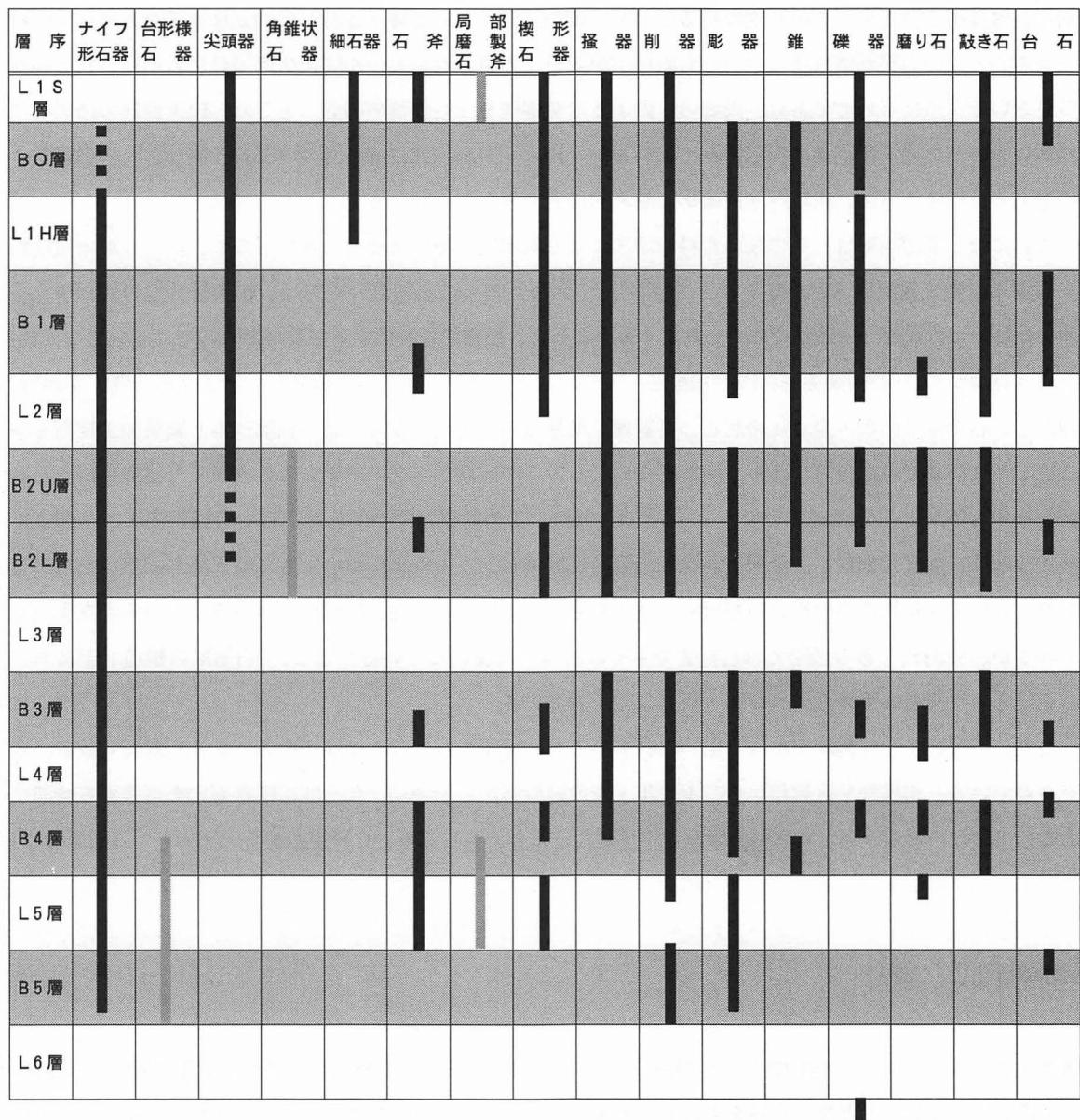
前回までの本プロジェクトにおいては、相模野基本層序（L1S～L6層）毎に県内の遺跡を集成してきた。その際、膨大な数の石器を、石材をも含めて網羅的に洗い出すといった作業を行ってきた。今回は、これまでの集成結果を視覚的に把握できるよう、主な器種についてその出土層位を縦軸として器種組成を模式図化して示した。模式図は、およそ70遺跡230文化層余りのデータから作製した。

さて、この模式図を横方向にみていくと、それぞれの層位における大雑把な器種組成を追うことができる。そこで層位毎にみると、器種のバラエティーが豊富な時期、ある器種が卓越し、偏った組成をみせる時期等の存在が浮かび上がってくる。

ここで最も明確なのは、L3層の様相であろう。主な器種では、ナイフ形石器がわずかにみられるのみで、他の器種は県内では今のところ皆無である。遺跡数もこの時期に一端激減しており、その後B2層にて「爆発的に増える」という表現がまさに当てはまる状況である。

B2層では、角錐状石器や円形搔器といった、非常に特徴的な器種が現れると共に、器種組成もバラエティーに富む。その他、しばしば集石状に出土する磨り石の存在も看過できない。

L3層同様L2層下部でも、遺跡数の減少、器種組成の単純化がみられ、それに続くB1層では、遺跡数が急増し、縦長剥片素材のナイフ形石器を中心に、器種の多様化が認められる。しかしながら、L3層の場



第3図 県内の旧石器時代器種組成模式図

合と異なるのは、少ないながらも尖頭器といった新しい器種の萌芽がL2層以前から認められ、そして近年の発掘調査から、L2層中にその製作工程を看取できるという点である（小池1999）。こうした事例から、「（相模野Ⅲ期とⅣ期）両石器群を切り放して検討するのではなく、この両者の連続性を視野に入れた分析が必要であろう。」といった見解も示されている（栗原1999）。

これらの新たな発見や成果は、尖頭器の出現に関する議論や編年的な解釈に一石を投じるものと考える。尖頭器に限らず他の器種でも、資料の増加に伴い、それまで存在していなかった時期、その出現時期が大幅に修正されることもあり得るだろう。ただ、器種の有無からだけでは、編年を構築することはできない。また、発掘担当者の視点によって、器種の捉え方も様々であり、一概に有る無しといった判断を下すことは危険である。個々の器種について、石器群の中での位置づけを明確にした上で、その時間的・空間的な広がりを捉えていくことが必要であろう。

今回は報告書の記述に従って集成された、主な器種の組成データのみを、模式的に掲載するにとどまった。

編年学的な研究における特徴的な器種については、多くの研究者によって多角的に分析され、数多くの論文が発表されている。今後はそうした先人の研究成果を参考に、各器種への理解をより深め、地域編年の構築に、器種組成の観点からアプローチしていくことも有効な手段と考える。

(畠中俊明)

石材組成と編年

神奈川県はいわゆる在地系石材と呼ばれている凝灰岩系石材や安山岩系石材など豊富な石材の入手が比較的容易に行える環境にある。例えば相模川や酒匂川など、もしくはその河川から派生する中小河川では、現在もなお良質な凝灰岩や、その他砂岩・安山岩などの石材が散在している。また、特に県西部においては黒曜石や黒色ガラス質安山岩などの原産地、箱根を越えた伊豆でも数カ所の黒曜石原産地が存在する。

そして近年出土資料に対する自然科学分析等が盛んに行われ、石材の付加情報として単に種別のみではなく、原産地など、より細かい付加情報を得ることが可能となった。このことにより、特に黒曜石は遺跡内における分布単位であるブロック等の更なる細分を可能にした(望月 1996ほか)。

また石材を意識的に選択していたであろうという指摘は数多くなされており、本研究プロジェクトチーム内でも器種、石器製作技術、遺跡型などにより、石材の選択が行われていたであろうとの予想はなされている。(旧石器・先土器・岩宿時代研究プロジェクトチーム 1994~1999)。今回はこうした石材研究の現状はあるものの、あくまでもこれまで旧石器・先土器・岩宿時代研究プロジェクトチームにより層位ごとに集成してきた石器群のデータ(前出文献)と共に伴いそのなかで指摘してきた石材に関する記述等とともに、石材利用の変遷を追うことで、石材からみた編年構築のための1要素の抽出を試みることとする。

まず、前出のプロジェクトチームによって指摘された石材に関する記述を、以下にまとめてみたい。

- ① 漸移層から上層(縄文時代草創期)では黒曜石は激減する。
- ② 細石刃石器群はその型式により、用いられる黒曜石が異なる(原産地)。
- ③ L1H層中位では黒曜石中心、在地系石材中心、その折衷型など石材組成に多様性をもち、特にこの時期の代表器種である槍先形尖頭器は安山岩製が中心となる。
- ④ L1H層下部では黒曜石が石材組成の大半を占める。
- ⑤ B1層からL1H層にかけて徐々に黒曜石の量が増えてくる。
- ⑥ L2層からB1層にかけてはチャートと凝灰岩が中心の石材組成がみられる。
- ⑦ B2層では凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・ホルンフェルス・黒曜石が主な石材組成であり、特に黒曜石は伊豆・箱根系のものが大半を占める。
- ⑧ B3層上部からL3層にかけては黒曜石は信州産が主体であり、B3層中-上部あたりから、黒曜石の量が爆発的に増大する。
- ⑨ B3下部からL4層位から黒曜石の量が増え始める。
- ⑩・ B5層チャート主体で、霧ヶ峰産黒曜石わずかに見られる。これ以降黒曜石は徐々に増え始める。
- ⑪ L6層では在地系石材のみで、黒曜石は見られない。

以上①から⑪まで大きく11の記述点を取り上げてみたが、細かくみるとさらに多くの点が指摘されている。これらを元に層位を時間軸として石材利用の流れを考えてみると、まず現在判明している県内の旧石器時

代最古の石器群はL6層から出土しているが、この時期には黒曜石は用いられず、在地系の凝灰岩系の石材やチャートなどを主に用いていた。B5層から黒曜石が僅かに見られるようになり、B4層下部では水晶製石器が発見されており、遠隔地石材を用いるようになる。B3層下部位から黒曜石、特に信州産黒曜石の利用が爆発的に増大する。そしてL3層からB2層にかけ黒曜石は信州産から伊豆・箱根系の黒曜石に変わり、石材構成比では黒曜石が石刃技法、二側縁加工のナイフ形石器量産という背景を受けて高い水準を保つ。黒曜石の他に凝灰岩やガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスなど石材種は多様になり、その後、L2層からB1層下部までは黒曜石も少々減少し、凝灰岩やチャート中心の石材組成を示す。B1層からは黒曜石が次第に増加し、B1層中位では前に続き黒曜石中心の石材組成を示す石器群と、黒曜石以外の石材が中心となる石器群、これらの中間型の石器群と石材組成に多様性がみられるようになり、L1H層下部では石材組成の8～9割を黒曜石が占めるようになる。L1H層上部から器種の中心となる細石器石器群では、より古いとされる代官山型が伊豆・箱根系黒曜石、次に出現する野岳・休場型は神津島産の黒曜石が用いられ、なかでもより上層から出土する野岳・休場型は在地系の石材が多く用いられている。さらに後出の船野型では黒曜石はほとんど用いられず、在地系の石材が主に用いられる。この後、縄文時代草創期に入ると、黒曜石は激減する。

以上のように、相違点や特徴などが窺え、大まかに流れを掴むことが出来た。層位を時間軸にすることに多少問題は残るが、この相違点や特徴などを画期と捉えるならば、従来の県内、とりわけ相模野台地の編年とは大幅な変動はないと思え、やはりある特定器種の移り変わり、石器製作技術の変化等に伴い、その器種、技術に合った石材の意識的な選択があったと推定できる。このように、こうした石材の移り変わりも、編年を構築していくうえでは、一つの裏付けを行える要素になりうると考えられる。 (大塚健一)

遺跡の移動過程から見た相模野編年について

旧石器時代は移動をしながら狩猟・採集を基本として生活を行っていたことは事実であろう。しかし移動する過程は様々であったものと思われる。例えば①既存の居住地を遺棄して別の新しい居住地へ移動した場合、②道具としての石器石材の入手経路、例えば遠隔地の石材を入手するような場合、③中・長期的な狩猟活動の場合など、実にさまざまなケースによって移動が行われたことが推定される。

旧石器時代の人々は中小河川域の見晴らしのきく台地の縁辺部によく占地する。そして通常川筋で拠点的な集落をベースとして離合集散が行われたものと考えられる。しかし川筋に分布する遺跡間での接合や個体別資料の比較検討がほとんど行われていないので、本当に川筋で展開したのかどうかは今のところ真実は明らかではない。河川と河川の間にはさまれた区域の移動も可能性の視野に入れて考えられ、テリトリー内では柔軟な行動をとったのではないかと推察するのである。

1. 石器石材・素材の搬入と搬出による動き

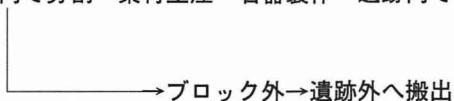
旧石器時代の集落は主にAT降灰以前の環状集落とAT以後の弧状ないし「い」の字状集落を形成している。これらの集落は集落形成の途上というよりは集落形成後の最終的な形態を示している。それでは環状集落が当初から作り出したものだろうか、この点は一概に規定できない。縄文中期の環状集落をみても、勝坂式と加曾利E式では前者が外環状、後者が内環状といったように、時期により環状の位置が異なっている。それでいて環状という円構成を崩していない。このことから環状集落の場合にも円構成を基本としたプロッ

ク配置は当初から彼らの頭の設計図の中に描かれていたのであろう（白石1992）。それでは全く当初から全てのブロックが構築されていたのかということになると、そうではない。石器石材・素材、つまり石器石材・石器素材・石製品の搬入・搬出また礫の搬入等によって、円構成を保ちながらもブロックがそのたびに変容していくのであろう。このようなあり方は大小の移動過程に伴う結果であろう。AT降灰後の弧状集落ないし「い」の字状集落の形成も同様であったものと思われる。

(1) 石器製材の搬入と搬出

石材は遠隔地と在地のものがある。遠隔地の石材は直接採取と交換による方法がある。在地の石材は一ヵ所の量的な問題があるが、点在しているので、常に一定量の石器石材が保証される。至近な例として吉岡遺跡群B4層中部のガラス質流紋岩は相模野台地では認められないので搬入品であろう。この場合石核自体が小さいので、原石ないし粗割石核を分割して利用したのであろう。

①遠隔地石材の搬入→遺跡内で分割→素材生産→石器製作→遺跡内での使用・遺跡外に搬出



また在地から採取された吉岡遺跡群B5層では全体の石材の90パーセントをチャートが占める。これらの石材は②在地石材の搬入→遺跡で分割→素材生産→石器製作→遺跡内での使用→廃棄といった一般的な図式を辿る。

(2) 石器の素材の搬入・搬出

始良Tn火山灰降灰後の石槍とりわけ樋状剥離尖頭器は例えば樋状剥離尖頭器の原形→樋状剥離尖頭器の製作→樋状剥離尖頭器の搬出といったように、場を変えながら移動している（白石1997）。このように製作址から直接消費地に持ち込むものではなく、中継地を経て消費地に搬出している。このようなモノの動きは同一集団が回帰的に行っているのか、別集団が分与したものかさらなる検討が必要とされる。

(3) 磯群の持ち込み

礫群は在地の河原から採集したものが目立つ。吉岡遺跡群C区B2層の礫の場合は24,379.3gで、凝灰岩が最も多く、中粒凝灰岩、砂岩、斑櫛岩などとなる。総体的に近場の水系の河床礫を利用したのであろう。一方頁岩など遠隔地の石材搬入は量的に少ない。礫群の運搬は極めて労働量は大きく、集落の形成にも礫採取できるような近場に形成した可能性もある。

2. 遺跡の移動過程からみた相模野編年

上述の点を踏まえて①石器石材、②素材、③石製品、④礫をみてみると第4図のようになる。

	① 石器石材	② 素材	③ 石製品	④ 礫	集落形態	鈴木・矢島編年	諏訪間編年	移動過程
相模野B5	□	×	×	×	環状？	相模野Ⅰ期	段階Ⅱ	1
相模野B4	□	×	▽	×	環状	相模野Ⅱ期	段階Ⅱ・Ⅲ	
相模野B3	□	△	○	▽	？	相模野Ⅱ期	段階Ⅲ・Ⅳ	2
相模野B2	◇	▽	▽	○	弧状	相模野Ⅲ期	段階V	3
相模野B1	□	○	○	○	弧状	相模野Ⅳ期	段階VI・VII	4
相模野L1H	◇	○	▽	△	弧状	相模野Ⅴ期	段階VIII・IX	5
相模野B0	□	○	○	?	弧状	相模野Ⅴ期	段階X	5
相模野L1S	◇	○	○	▽	？	相模野Ⅴ期	段階X I	6

(1) ◇多様 □主たる石材と少数の石材
(2)～(4) ◆多様 ◇多い ○やや多い ○やや多い △やや少ない ▽少ない ×認められない ?不明

第4図 相模野層位と石器石材等からみた移動過程の状況

◇や○印は移動が多いものと仮定。移動過程から見て (1) B5層～B4層、(2)B3層、(3)B2層、(4)B1層、(5)L1H～B0層、(6)L1S層に暫定的に区分する。

※安蒜政雄、野口淳により [原料の搬入] → [作業工程] → [遺跡の石器群] の中で移動論を捉えている（安蒜1992、野口1995）が、別の視点から概観した。
 (白石浩之)

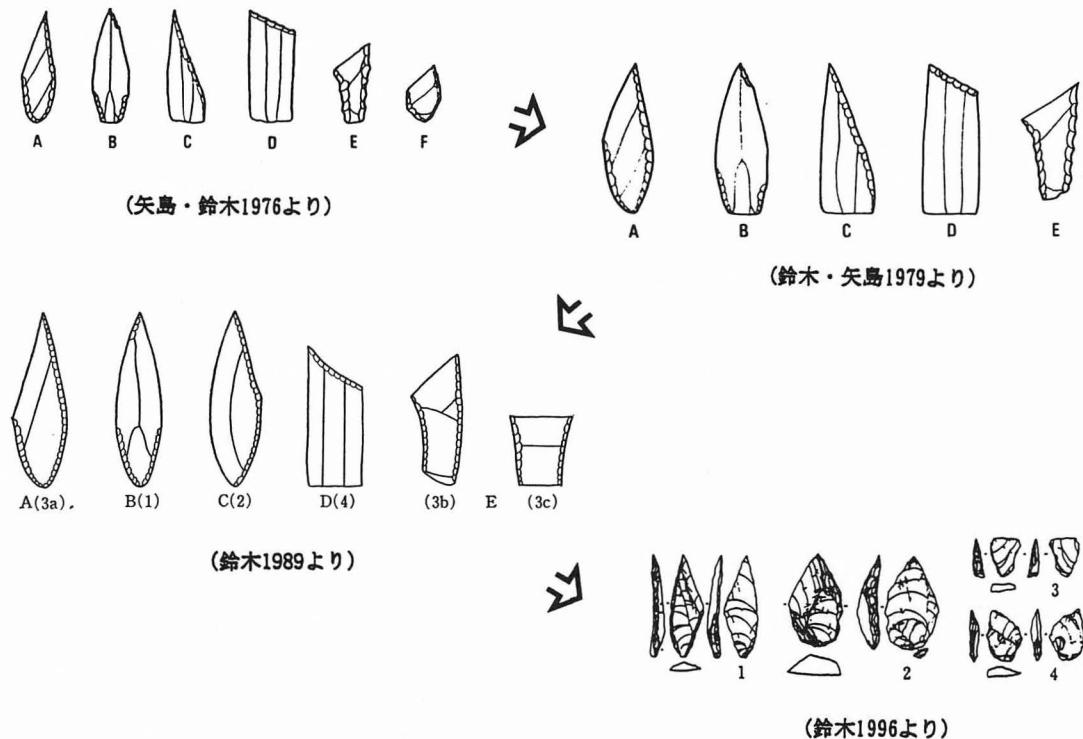
編年区分におけるナイフ形石器のとらえ方

列島における旧石器時代についての学史上、編年を組み立てる際に「ナイフ形石器」はある程度、大きな位置を占めている。また、列島の上部旧石器時代では主たる道具であったと考えられることから、その形態分析等も精緻に進められてきている。さて、編年研究については、鈴木次郎も述べるように「地理的なまとまりをもつ一地域内を対象とした地域編年の構築こそが基本」（鈴木1999）と考えられる。そこで本稿では、相模野台地を例に取った編年構築の際、「ナイフ形石器」がどのように扱われてきたかを確認したい。

相模野台地を例に取った旧石器時代編年については、鈴木次郎・矢島國雄による時期区分（矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978・1988など）や、諏訪間順による段階区分（諏訪間1988）などがある。鈴木・矢島らは「石器群の構造」をキーワードに、石器群全体を対象としてとらえ、個別石器と石器相互の関係に着目することで、その構造体の変化・推移から上部旧石器時代を5期に区分している。そのなかでナイフ形石器については、その形態組成も編年区分の要素としてあげられている。また、諏訪間は各器種の出現・発展・終焉、各器種の形態組成の変化、技術基盤の変化などを基準に画期をとらえ、相模野の層位に照らし合わせて上部旧石器時代を12段階に区分している。このように鈴木・矢島、諏訪間とともに、ナイフ形石器に関しては、形態分類から形態組成をおこない、編年区分の道具の一つとして用いている。

では実際にナイフ形石器がどのように扱われてきたかを、形態分類に関して、鈴木次郎の分類を例にみていく（第5図）。筆者は以前、鈴木の研究についてふれたことがあるが（吉田1998）、まず（鈴木1974）では相模野台地の石器群ではないが、砂川遺跡F地点のナイフ形石器を形態A～Dの4種にわけている^①。次に、（矢島・鈴木1976）では形態A～Fの6種となった。しかし、続く（鈴木・矢島1978）では形態Fを削除し、A～Eの5種となる。その後、（鈴木1989）において形態Eの規定に修正が施され、さらに、（鈴木1996）では二側縁加工・基部加工・一側縁加工・部分加工の4種となり、その中の二側縁加工のものを「砂川型」「下九沢山谷型」「切出形」「小形幾何形」の四つに細分している。このように、分析手段であるナイフ形石器の形態分類については、時期区分に関する見解の変遷もあって、若干の変遷をたどりつつも、加工の位置（部位）が主軸となり、さらに細かな形態で細分する方法が採用されたといえる。

形態の差が、ある程度時期差を反映したものと仮定し、類型化から組成へと展開する手法は妥当なものと考えられる。従って、類型化の内容が問われることとなるが、確かに、上記の分類群については、多くの研究者もイメージとして共有できるものであろう^②。しかし、その認定やさらなる細分については、より客観的な手続きが必要と考えている^③。たとえば竹岡俊樹が実践する形態測定・属性記述法（竹岡1989、1997など）がその例となるが、すでに筆者もその一部を援用してナイフ形石器の分類をおこなったことがあり（吉田1998）、数値化および量的属性による区分は有効な手法であろう。
 (吉田政行)



第5図 形態分類の例 (吉田1998を改編)

- (1) 実際にはA～Eの五つにわけているが、E類についてはナイフ形石器としてやや問題があるとされるため、ここでは除外して扱った。
- (2) ただし、加工の位置についても、石器の「据え方」の共通理解が前提となる。
- (3) 暖昧な加工・形態をもつナイフ形石器が出土し、どの分類群とするかで苦慮する機会はおそらくどなたもが経験されていることであろう。さらに遡れば、器種分類の時点で抽出した「ナイフ形石器」が果たして問題なくナイフ形石器として認められるものであるのか、特に、B 4層以下出土の資料については、ナイフ形石器・ナイフ状石器・台形様石器などはなはだ疑問であるといわざるを得ない。

石器製作工程

ここでは、これまでの相模野石器群変遷の表現区分（矢島・鈴木 1976, 諏訪間 1988等）を石器製作を中心とした内容で捉え直す。その際剥片剥離はⅠ類（単設）、Ⅱ類（両設）、Ⅲ類（90度打面転位）、Ⅳ類（求心状）、Ⅴ類（盤状剥片素材）等（砂田 1989・1996, 井関 1997-1999）を、調整加工は両面（石斧、尖頭器等）、片面（角錐状石器等）、周縁（搔器等）、二側縁（削器・ナイフ形石器等）、一側縁（彫器等）、部分（台形様石器・楔形石器・錐形石器等）等で構成される。

I期=段階Ⅰ 剥片剥離-調整加工は、両極剥離によって工程過程内（Ⅰ-Ⅳ類）で連係する。剥片剥離は、自然礫面を除去する石核整形過程とは区別されるが、目的的な剥片剥離は特定化される類型過程の所産として把握されない。調整加工は部分加工が主体的と言える。吉岡D区-B5 (103) に代表される。

II期前半=段階Ⅱ 剥片剥離-調整加工は、両極剥離によって工程過程と決定過程（例えば残核転用の楔形石器）に連係されるが、それとは別に両極剥離を媒介させない工程変換過程（Ⅴ類）が識別される。

剥片剥離は礫面除去とは区別され、その内で打縁調整がある程度識別され、特定化される調整加工に連係する傾向（例えばⅢ類－ナイフ状石器・Ⅳ類－台形様石器）が指摘される。調整加工は、両面加工（石斧）が見受けられるものの前期＝前段階同様、部分加工が主体的であると言える。

例として吉岡C区－B4L・B4M（102）等が該当する。

Ⅱ期後半＝段階Ⅲ 剥片剥離～調整加工は、両極剥離を媒介せず、折断による工程過程と工程変換過程～決定過程の連係が主体的である。また剥片剥離と調整加工は共に多様であり、剥片剥離の多様性は特定化されない過程の所産として、調整加工の多様性は、一側縁、二側縁加工等の加工量の増大を示す変異として抽出される。

例として吉岡A区－B4U（100）・上和田城山第4次－Ⅲ（90）・吉岡C区－B3LU等が確認されている。

Ⅱ期後半＝段階Ⅳ 剥片剥離～調整加工は、折断を媒介させない工程過程～決定過程の連係として主体的であり、剥片剥離は礫面除去とは顕著に区別される。工程過程内での偏差は、特定化される類型（Ⅰ類）過程の結果を反映する傾向が看取される。調整加工は二側縁加工が主体的で、決定過程内での偏差は、加工量が著しい過程（ナイフ形石器）の量的多寡に左右される傾向が識別される。ここでは、剥片剥離と調整加工がともに独自の工程として組織され、剥片剥離は打縁調整等の剥片剥離内の調整過程をその副産として内在化させ、調製加工は対向調整加工等の異方向からではなく、連続した同方向からの剥離によって可能であり、つまり、折断を必要とすることなく工程過程～決定過程の連係が強化されていると考えられる。寺尾－VI（96）に代表される。

Ⅲ期＝段階Ⅴ 剥片剥離～調整加工は、複合的な工程過程と工程変換過程～決定過程とその決定過程の中断において恐らく再加工による転用、言い換えると、器種再生された可能性が指摘される変換過程、すなわち決定変換過程の連係として主体的である。この決定変換過程は、多様な調整加工痕の重複からの類推である。本段階の剥片剥離は、礫皮除去とは区別されず、段階的・並列的な工程変換過程等が確認され、かつ多様である。

調整加工も半両面（尖頭器）、片面（角錐状石器）、周縁（角錐状石器・円形搔器）、半片面（ナイフ形石器・切出形石器）、一側縁（国府型ナイフ形石器等）、二側縁（切出形石器等）、部分（基部加工ナイフ形石器・円形搔器）等同様に多様だが、中でも周縁加工や片面加工等は单一方向からの工程的な連係を重層化させることで成立していると判断される。

柏ヶ谷長オサーVI－IX（74）・慶応SFC－IV（118）・上草柳2－II（92）・代官山－VI・VII（109）・高座渋谷団地－V（298）・下九沢山谷－IV（57）等の遺跡から抽出。

IV期前半＝段階Ⅵ 剥片剥離～調整加工は、組織的な工程過程と工程変換過程～決定過程と決定変換過程の連係が主体的である。剥片剥離は、打縁調整と打面調整を相互補完的に範囲限定させて特徴的な類型（Ⅱ類）の過程に連係される傾向が指摘される一方、礫面除去、作業面・打面の形成及び再生、稜状調整過程等の石核整形は、独自に組織され決定過程に連係されない傾向が看取される。

調整加工は多様で両面調整（尖頭器）が識別される。また調整加工の中には、樋状剥離（有樋尖頭器）や彫刃面の作出、基部裏面平坦剥離（ナイフ形石器）等、異方向的な嵌入として部分的に交差する特徴も抽出され、剥片剥離におけるⅢ類と相同する過程が局所的ではあるが、单一方向からの連係の重複性を基に成立している。言い換えると工程過程あるいは工程変換過程と決定過程あるいは決定変換過程双方で重層的・自己完結的に組織される作業過程には構造的な互換性の役割が予測される。

石器群は下九沢山谷－Ⅲ・長堀南－Ⅳ(87)・深見諏訪山－Ⅳ(88)・橋本－Ⅲ(55)・栗原中丸－Ⅴ(70)・上原－Ⅴ(127)・中原－Ⅴ(126)・サザランケ－Ⅴ(128)・福田丙二ノ区－Ⅱ等の石器群が確認されている。

IV期後半＝段階VII 剥片剥離～調整加工は多様化された工程過程と工程変換過程～決定過程と決定変換過程の折断による連係が主体的である。剥片剥離は、打面調整と打縁調整の関係と打面作出と作業面作出の関係を、相互補完的に置換し、礫面除去等の石核整形を最小限にすることで、決定過程に連係させる傾向が看取される。調整加工は、両面加工～部分加工までが看取されるが、本段階でも異方向的、嵌入的に交差する特徴が基部裏面平坦剥離、樋状剥離や彫刀面作出等として抽出されるが、本段階での調整加工の交差性は、剥片剥離の工程過程及び工程変換過程に小石刃剥離として転化されていると考えられる。

深見諏訪山－Ⅲ、代官山－Ⅳ－Ⅴ・下鶴間長堀－Ⅱ(86)・中村－Ⅳ(68)・本入こざっ原－Ⅲ(243)等から識別される。

V期前半＝段階VIII 剥片剥離～調整加工は、可逆性的方向性を持つ工程過程と工程変換過程～特定化される決定過程と決定変換過程（両面～周縁加工）が相互に連係し合う特徴が抽出される。この相互連係性は、言い換えれば、工程過程と工程変換過程～決定過程と決定変換過程の関係を並列化させるということであり、礫面除去から調整加工のみで目的的な決定過程に移行し、その副産として生じる決定過程からも工程過程及び工程・決定変換過程に連係される傾向が看取される。

上野1－Ⅳ(81)・寺尾－Ⅱ・月見野IV－A(77)・中村－Ⅲ・サザランケ－Ⅲ・南原－L1H(242)等の石器群から上記の内容が抽出される。

V期後半＝段階IX 剥片剥離～調整加工は並列的かもしくは段階的に並列化される工程過程と工程変換過程～決定過程の連係が主体的で、その作業内容は、剥片剥離を重層化させる前提となる打面～作業面の相互依存性において設定打面を必要とせず、連係作業に必要な設定作業面の確保を中心とするという意味の作業面転位を基本とした細石刃剥離に特徴付けられる。この作業面転位による連係作業は、逆に言えば打面設定の解放を背景としており、調整加工の交差性をより促進させる契機になっていると考えられる。

代官山－Ⅲ・柏ヶ谷長ヲサーⅣ・中村－Ⅲ・上和田城山－Ⅱ(90)・吉岡B区－L1HU(101)等から。

V期後半＝段階X 剥片剥離～調整加工は前段階と同様だが、折断・両極剥離による連係が強化されること細石刃剥離作業それ自体が剥片剥離作業と相同し、自己完結的に組織される傾向が指摘される。

上草柳1－I・報恩寺(97)・栗原中丸－Ⅱ・上和田城山－I・下鶴間長堀－I(86)等の当該期石器群から内容の抽出が可能である。

草創期初頭＝段階XI 剥片剥離～調整加工は並列的に段階化される工程過程と段階的に並列化される工程変換過程～決定過程及び決定変換過程の連係が、主体的である。調整加工は決定過程に移行する相互連係性を段階的に構造化することで、決定変換過程（尖頭器・石斧等）を柔軟にする傾向が把握される。

例として月見野上野1－Ⅱ(81)・寺尾－I・長堀北－Ⅱ(85)・相模野No.149－L1SU(78)・勝坂－漸～L1S(67)。

草創期初頭＝段階XII 剥片剥離～調整加工は前段階と同様だが、調整加工相互の連係間で、漸移的な補正剥離として、すなわち間調整加工が構造化される（有舌尖頭器・石鏃等）。

月見野上野1－I・月見野上野2(80)・花見山－FBL(31)・三ノ宮下谷戸(166)・吉岡B区－漸・青根馬渡No.4－漸科～L1S等。
(井関文明)

相模野台地・武藏野台地・多摩丘陵の編年区分

ここでは相模野編年（相模考古学研究会編 1972、矢島・鈴木1978、1988、鈴木1989）、諏訪間編年（1988）と武藏野編年（小田・キーリーC.T. 1973、1975、小田他1977）、そして多摩丘陵で構築した館野編年（1988）について概略をまとめた。

1. 相模野台地の編年

矢島・鈴木（1976、1988）、鈴木（1989）編年 鈴木次郎氏（1989）の編年では、生活面（検出層位）、発見した石器群の資料例、石器組成、石材組成、石器形態、剥片剥離技術などの多様な視点から分析を行っている。編年の特徴は相模野台地の層位のL5層上部以下をナイフ形石器、石刃技法が見られず、台形様石器の未発達な時期として相模野第I期、B2L層下部からL5層上部にかけてをナイフ形石器、石刃技法が出現、発達する相模野第・期、B2L層下部を除くB2層全層を他地域の石器群の流入・影響により、石刃技法、茂呂系ナイフ形石器が一時衰退、槍先形尖頭器が出現する時期として相模野第III期、BB1層からL2層を石刃技法、茂呂系ナイフ形石器の発達と終焉、槍先形尖頭器が発達する時期として相模野第IV期、L1SからL1H層をナイフ形石器の消滅と槍先形尖頭器・細石刃の発達する時期として相模野第V期と区分した。

さらに相模野第II期と第IV期を組成や剥片剥離技術などからそれぞれ前半と後半に細分して整理している。

諏訪間（1988）編年 諏訪間順氏は、矢島・鈴木編年を軸としながらも、『移りゆく石器文化の一つ過程（段階）をそれぞれ表すものとして、積極的に評価』し、さらに石器群が検出される層位に重点を置き、『層位的出土例の検討によって石器群の段階的把握』（諏訪間：1988）を行った。この編年で諏訪間氏は、矢島・鈴木編年の相模野第II期後半を段階III・IVと二分、相模野第V期を段階VIII～Xと三分することにより10の区分、さらに縄文時代草創期を段階XI・XIIの2つに区分し、合計12の段階に設定している。

2. 武藏野台地の編年

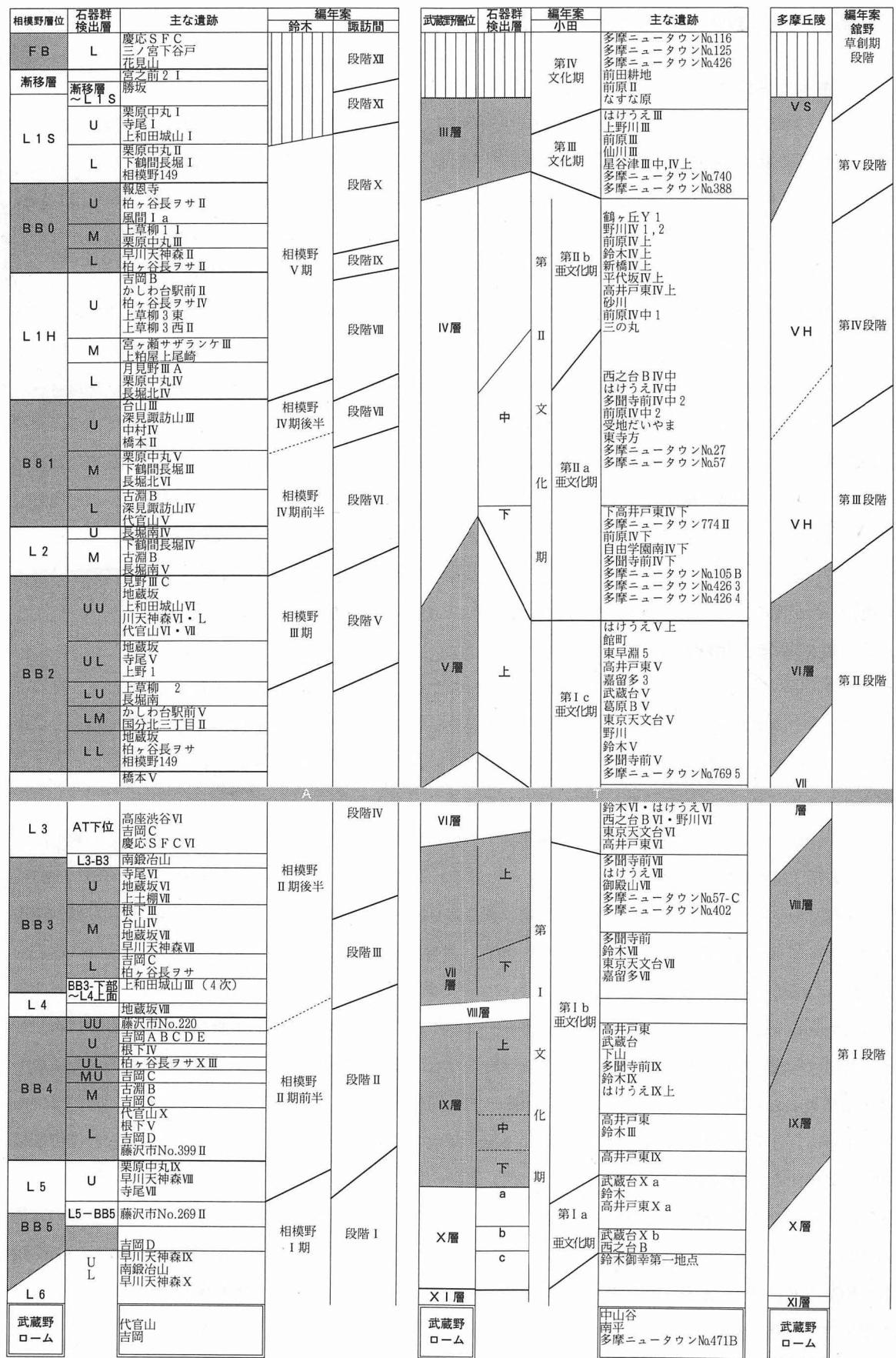
小田・キーリー、C.T.（1973、1975）、小田他（1977）編年 野川やICULoc.15,はけうえなどの重層した遺跡の発掘調査によって蓄積した石器群を、出土層位と、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石刃などの示準石器に重点をおいて整理し、『石器群の様相、礫群、層序などをからませ』（小田：1980）て、I～IVの文化期に大別した。概要は武藏野層位のV層以下をナイフ形石器が未発達な時期としてI期、III層下部からIV層をナイフ形石器の質量共に卓越する時期としてII期、III層中部の細石刃・細石刃石核の時期をIII期、大型の両面加工尖頭器がみられ、縄文時代草創期に移行する様相を呈するIII層上部をIV期として大区分した。さらに大区分した中からさらに第I文化期をa・b・c亜文化期、第II文化期をa・b亜文化期と細分している。

3. 多摩丘陵の編年

館野（1988）編年 多摩ニュータウン事業に伴い調査が行われた60箇所の遺跡をもとに構築されている。編年の特徴は、石器・石材組成、石核から見た剥片剥離技術、相模野・武藏野台地との対比、礫群の共伴や規模等の重点項目の他に丘陵地という非常に入り組んだ地形を考慮し、「河川」にも注意を払っている点である。概要としては、立川ロームのAT以下を第I段階とし、十分な資料がないとしながら剥片剥離技術や礫群・配石の存在などを予測している。VH層下部からVI層にかけてを第II段階、VH層中位を第III段階、VH層上半部を第IV段階、VS層を第V段階、IV層下部からVS層の境界辺りを縄文草創期段階として区分している。

以上の4氏の編年を右図にまとめて掲載した。現段階においておおまかな部分では対応できるようである。今後の課題としては、各時期の細かい部分での不整合をどの様に整理・理解していくかであろう。（三瓶裕司）

旧石器時代後半における石器群の諸問題



第6図 各台地の編年区分

編年研究の現状と課題

1. 編年とは何ぞや

編年は「歴史上の事柄の新旧・前後の関係を明らかにし、年代的序列をつけること。編年体の歴史」であり、編年体は「歴史編纂の一体。年月の順を追って事実を記載」し、「春秋」に始まるが広辞苑上の解説である。有史、こよみの中での行く年來る年は指折り数えることが可能だが、先史、特に関東ローム層の時代となると、土層堆積をまずもっての、唯一拠り所として、時間序列を組み立てざるを得ないのであり、至当な方法なのである。しかし、編年の困難性は、調査上忽ち隨所に出現することは、日常茶飯事な調査要件となってくる。それは、遺跡群の形成類型(砂田1996)を言い換えれば、同一空間と同一時間の分布幅の中にあっても各々の遺跡の通時間幅はすべて異なり(類型1・3)、異空間と異時間幅の中で同等の遺跡を検定すること(類型2・4)は至難の技なのである。かといって、編年の基本的要件は、岩宿遺跡の報告書において、要約すれば、関東ローム層から人工物がまとまりをもって地層の堆積順に出土する事実(安蒜1999)として的確に表現されている。発見の時代は蓄積の時代を経過しながら、示準石器による編年と石器組成による編年といった二大潮流を相互補完しつつも、前者が武蔵野編年として、後者を石器に関わる自然環境をも含めたすべての組成としての相模野編年と言い得よう。言い換えれば、相模野編年は編年とは言うものの、歴史叙述の紀伝体を総括した編年体系として了解可能かもしれない。その意味では、本紀(帝王一代の年)列伝(民族や個人の伝記)・志(特殊な分野の変遷)・表(制度の一覧)の解読を指向する内容をも孕んでいるのである。

2. 絶対編年と相対編年

近年のAMS (Accelerator Mass Spectrometer) 法による年代測定は、従来の測定法とは異なり、試料の最低必要量や測定誤差の少なさから、その使用が活発化している。ただし、従来の測定方法が全く使えないのではなく、重要なのは補正值 (Calibration data) を求める点である。補正方法については各種のプログラムがホームページ上でフリーウェアとして公開されている。

しかし、そうして求められた絶対年代が確率論上の算定値に過ぎないことは言うまでもない。ゆの幅を広げればその年代値としての確率は高まるものの、その値はある機器がある期間で求められた時点の年代であり、同一試料であっても測定装置が異なる場合は算定値は異なるし、同一測定機器であっても、機器の使用期間や使用状態によってもその測定値は異なるのである。現在、世界中では130以上の測定機器があるという (c14.sci.waikato.ac.nz)から、その測定誤差こそ計り知れないのである。あくまでも、「絶対年代」とは私は「絶対的確実」(absolute sichere) な年代と云ふ意味で使っているのではない。勿論以下記す所の研究法の助けに由つて得らる可き年代決定は、我々が之を以て全然満足しなければならない程度の、大なる確実性を有しているのであるが」(モンテリウス 157頁) という、Willard F.Libby氏生前の言説は時代を超えて認識すべきなのである。さらに、近年注目すべきは年縞堆積物による絶対年代の算定である(福沢・山田・加藤 1999)。湖沼堆積物から算出する季節差による年代値は、最寒冷期 (Last Glacial Maximum) の新たな提示とも絡んでいる。絶対年代と言われる年代の算出意義は、列島内に限らず、全世界的な文化史的並行関係を明らかにするには極めて有効な方法であるが、その手順の比較の方法の検討を怠ってはならないのである。絶対年代による編年は、魅力的かつ実証的であるように看取できるが、今後の測定法の開発精度の進捗や補正方法の統一化によっては、絶対年代に一喜一憂することなく、相対年代の目で絶対年代を援用すべきなのだろうか。

相対年代を普請する基本は自然層序の区分である。しかし、同一自然層序だからといって、万人が同一の自

然堆積物を同一に分層することは不可能である。匿名的個人であっても同一分層など困難極まりないのである。しかも、遺物は堆積土中で移動するのである。先の遺跡群形成の四類型は自然堆積土中の全ての遺物に充当するのである。ここ10年間で定着したかに見えるワインナーによる土層区分は、彼らの言う我々考古土層の区分をはるかに凌駕する細分である。Y No.（新期ローム層のテフラ番号:younger No.）は、木曽御岳第一軽石をY-1として、FB層下底がY-141上部としている。S No.（新富士系テフラの須走:Subashiri）は、FB層最下部を除いた部分にS-0-1～6からS-25までのテフラ番号を付している。当初の考古土層ラインマーカ達からは、スコリア観察による土層区分は、なるほど客觀性を帶びているかのように見えた。しかし、ワインナーによる土層区分のデータが蓄積されるにつれて、ワインナーが考古土層区分のゆらぎ幅を超える状況に至っている。客觀的に見えたYのナンバリングは、スコリア区分数が多いだけに、より高い客觀的成果を得るには肉眼觀察のみならず、顕微鏡によるスコリア断面の比較観察など、より微視的観察が常態となるべきだったのである。その意味では、各現場の土層を最も数多く観察する調査担当者の見る目が基本なのである。

3. 編年構築にあたって

どんな場合にしろ、編年という相対的事実認識を実行する場合、無意識な編年情報の個別的選択や資料体の意図的選択は慎重にならざるを得ないのである。関東ローム層中から抽出した資料体に編年という分類体系を付与し、さらにそこから何らかの解釈を得ようとする場合特に危険である。彼らの思考の下で彼らが遺存した石器群に、真の編年体系などという「時には、本当は存在しない「文化コード」を無理矢理」作り上げることになりはしないだろうか（板橋1989 48頁）、分野は異なるが深化したい文言である。（砂田佳弘）

おわりに

相模野旧石器の編年作業は継続する。新出の石器群を常に視野に入れつつも個々の資料と石器群総体を見据えながらの作業である。「統合しながら同質の石器群を時間的、空間的にまとめ、それらの石器群の構造の変化の様相を時間・空間軸に沿って整理し、石器文化の変化の内容と方向を把握する（鈴木・矢島1978）編年と、重複関係を持つ石器群を一文化層ごとに層位的に並べ、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃、石斧等の出現・発展・終焉と、各器種の形態組成変化、技術基盤の変化に画期を見いだし、この画期から次の画期までの共通した特徴を持つ石器群を抽出し段階として設定（諏訪間1988）」（大塚 1999）にまとめられる。時期間と段階には常に移行期なる言辞が潜む。実際の移行期など、時間幅の如何に關わらず捉えようもないのはずなのだが、年表の斜行関係や傾斜編年に顯著である。あえて移行部分を抽出するとなれば、それは相模野台地という列島内でも秀でた層位的序列を視覚的に把握できるフィールドに限られよう。相模野の卓越した層位区分は編年の有効性を捉えるには極めて特異な存在でもある。ただし、その層の厚さ故に、より下層の石器群が大々的に登場するには、泡沫現象下の一部の調査以外に未だ好機は到来していない。

相模野旧石器の編年の網の目は、繕いつつもどのような石器群が出現しようとも、直接的にその編み目に投げ込むことが可能である。しかしそれが究極的な編年でないことはもちろん、編み目の張り方次第によっては編者が選別した資料体を何らかの有意性によって恣意的に網の目を結ぶこととなる（浜本1989 87頁）。

我々の編年作業は、「象徴論的な人類学が誤認するであろうような、何かを言い表す象徴のシステムでもなければ、伝達のシステムでもなく、あえて言えば「恣意性」を中心とした秩序の機構」にあり、「その機構の外部にいる者にそれを「呪術的」に見せてしまうのである」（浜本 1997 370頁）。（砂田佳弘）

引用・参考文献

- ※紙面の都合上、すべての文献を掲載することが出来なかった。御容赦願いたい。
- 我孫子昭二・堀井晶子 他編 1980 『多摩蘭坂遺跡』 国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- 安蒜政雄 1986 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座 日本考古学』 第5巻
- 安蒜政雄 1992 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作作業の体系」『駿台史学』86 pp.101-128
- 安蒜政雄 1999 「岩宿遺跡と日本旧石器時代研究-岩宿からの問いかけ-」 第7回 フォーラム／シンポジウム『岩宿発掘50年の成果と今後の展望』 予稿集 pp.14-18
- 板橋作美 1989 「象徴論的解釈の危険性あるいは恣意性」『異文化の解説』 pp.3-54
- 内田好昭 1999 「日本考古学の歴史」『物質文化』67 pp.2-10
- 大塚健一 1999 「相模野編年とその問題点」かながわ考古学財団 旧石器プロジェクトチーム発表要旨
- 岡本 勇・松沢亜生 1965 「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」『物質文化』(6) pp.1-14
- 小田静夫 他編 1980 『西之台遺跡B地点』 東京都教育委員会
- 小田静夫・阿部祥人 他編 1980 『はけうえ』 国際基督教大学考古学研究センター
- 小田静夫・伊藤富治夫 他編 1977 『高井戸東遺跡』 高井戸東遺跡調査会
- 加藤晋平 1984 「日本細石器文化の出現」『駿台史学』 第60号
- 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『かながわの考古学』第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.1-22
- 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1995 「旧石器時代終末における石器群の諸問題（続）」
- F B層下部から L H層の石器群の様相』『かながわの考古学』第5集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.1-24
- 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1996 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L 2～B 1層石器群の様相」
研究紀要1 『かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.1-36
- 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1997 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-B 2層石器群の様相」
研究紀要2 『かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.1-16
旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1998 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L 3～B 3層石器群の様相」
研究紀要3 『かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.1-14
研究紀要4 『かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.1-14
- 旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム 1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L 4層以下の石器群の様相」
研究紀要4 『かながわの考古学』かながわ考古学財団 pp.1-14
- 栗原伸好 1999 「相模野第III期とIV期の間」『神奈川考古』35号
- 小池 聰 1999 『大和市 No.210遺跡』
- 小林達雄・小田静夫 他 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4 pp.231-270
- 相模考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 佐藤嘉広 1988 「日本考古学における層位論的研究の特質」『紀要』VIII pp.1-36
- J.E.キダー・小山修三 他 1970 「関東地方の先土器編年：ICU Loc.28c」『人類学雑誌』80-1 pp.140-156
- J.E.キダー・小田静夫 他編 1975 『中山谷遺跡』 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 1
- 柴田 徹 1998 「遺跡ごとに見た石質組成とブロックごとに見た石質組成に関する一考察-千葉県松戸市内における旧石器時代の遺跡を中心として-」『松戸市立博物館紀要』 第5号 pp.1-30
- 鈴木次郎・小野正敏ほか 1972 『小国前畠遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木次郎 1974 「VI. 砂川遺跡の石器群」『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡-第2次調査の記録-』
- 鈴木次郎 1989 「第1章 先土器時代-赤土の中に残された人類の文化」『大和市史』1 通史編 pp.3-125
- 鈴木次郎 1994 「南関東地方の様相」『第2回 岩宿フォーラム／シンポジウム 群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集 pp.49-52
- 鈴木次郎 1996 「II 石器群の様相」『かながわの考古学』かながわ考古学財団研究紀要1 pp.15-18
- 鈴木次郎 1999 「編年論」『石器文化研究』7 pp.161-170
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 雄山閣 pp.144-169
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 新版 雄山閣 pp.154-182
- 白石浩之 1992 「旧石器時代後期から縄文時代草創期の集落『神奈川県下における集落変遷の分布』かながわ考古学2 pp.1-14
- 白石浩之 1997 「石槍の分布とその様相-樋状剥離尖頭器から見た集団の動き-」『人間・遺跡・遺物』3 pp.27-47
- 砂田佳弘 1993 「先土器時代石器群研究の行方」『かながわの考古学』第3集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.18-27
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の出現-器種変遷と石材流通-」『國學院大學考古学資料館紀要 第10輯』
- 砂田佳弘 1996 「遺跡群の形成」『石器文化研究』5 pp.305-320
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階的把握-」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1995 「南関東地方A T上位石器群の変遷」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』予稿集 pp.341-359
- 芹沢長介 1967 「日本における旧石器の層位的出土例と14C年代」『研究報告』 第3集 日本文化研究所
- 千葉 寛・西村勝広 他編 1989 『野川中洲北遺跡』 小金井市教育委員会
- 歳原加世子・根本忠一 他編 1982 『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』 世田谷区遺跡調査会
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社
- 竹岡俊樹 1997 「柏ヶ谷長ヲサ遺跡第・文化層出土のナイフ形石器の分析」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』
- 中津由紀子・千浦美智子 他編 1977 『新橋遺跡』 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 4
- 野口 淳 1995 「武藏野台地IV下・V上層段階の遺跡群」『旧石器考古学』51 pp.19-36
- 浜本 満 1997 「妻を引き抜く方法-規約的必然としての「呪術」的因果関係-」『民族学研究』62-3 pp.360-373
- 早川 泉・横山裕平 他編 1984 『武藏台遺跡I』 都立府中病院内遺跡調査会
- 福沢仁之・山田和芳・加藤めぐみ 1999 「湖沼年縞およびレス-古土壤堆積物による地球環境変動の高精度復元-」
『国立歴史民俗博物館研究報告』81 pp.463-484
- 明治大学考古学研究室見野遺跡群調査団 1969 『概報月見野遺跡群』
- モンテリウス著、浜田耕作訳 1932 『考古學研究法』 p.182
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会 pp.1-30
- 吉田政行 1998 「鈴木次郎論-編年をめぐる『砂川』研究者列伝(2)-」『石器文化研究会 第126回月例会資料』
- <http://www.c14.sci.waikato.ac.nz/webinfo/k12.html>

神奈川における縄文時代文化の変遷V

中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相 その3 —文化的様相—

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

平成9年度から開始した中期中葉期・勝坂式土器文化期の様相をめぐる研究の3年次目にあたる平成11年度は、前年度に行った勝坂式土器編年案の成果をもとづいて、その文化的様相を探る研究活動を行った。該期は縄文文化が最盛期を迎える、各地に大規模な拠点的集落である環状集落が形成され始める時期に相当する。以下、検出された各種遺構・集落構造および遺物の特性について触ることとする。(山本暉久)

II. 遺構

1. 壱穴住居址

本プロジェクトで集成し得た該期の壹穴住居址は1439軒を数える。このうち、報告書等の事実記載・挿図から概要が比較的明らかとなっている81遺跡735軒の壹穴住居址を対象とし、平面形態・長軸規模・炉址形態・主柱穴数・壁下構造・拡張(建替)・付帯施設という7項目の属性についてデータ化を行い、各時期毎の傾向を抽出することを試みた。尚、各壹穴住居址の時期比定は報告書等の記載によるものであるが、詳細な時期に言及していないものに関しては、昨年度提示した編年案(I～VI期)に従って行った。

①時期別の軒数(第2図)

時期別の軒数は、I・II期が21遺跡31軒、III・IV期が32遺跡146軒、V・VI期が55遺跡325軒となっており、遺跡数・住居数とも右肩上がりに増加していることが分かる。同時に、1遺跡の平均住居数が増加傾向(I・II期;1.5軒→III・IV期;4.6軒→V・VI期;5.9軒)にあることにも着目しておきたい。

②分布(第3図上段左)

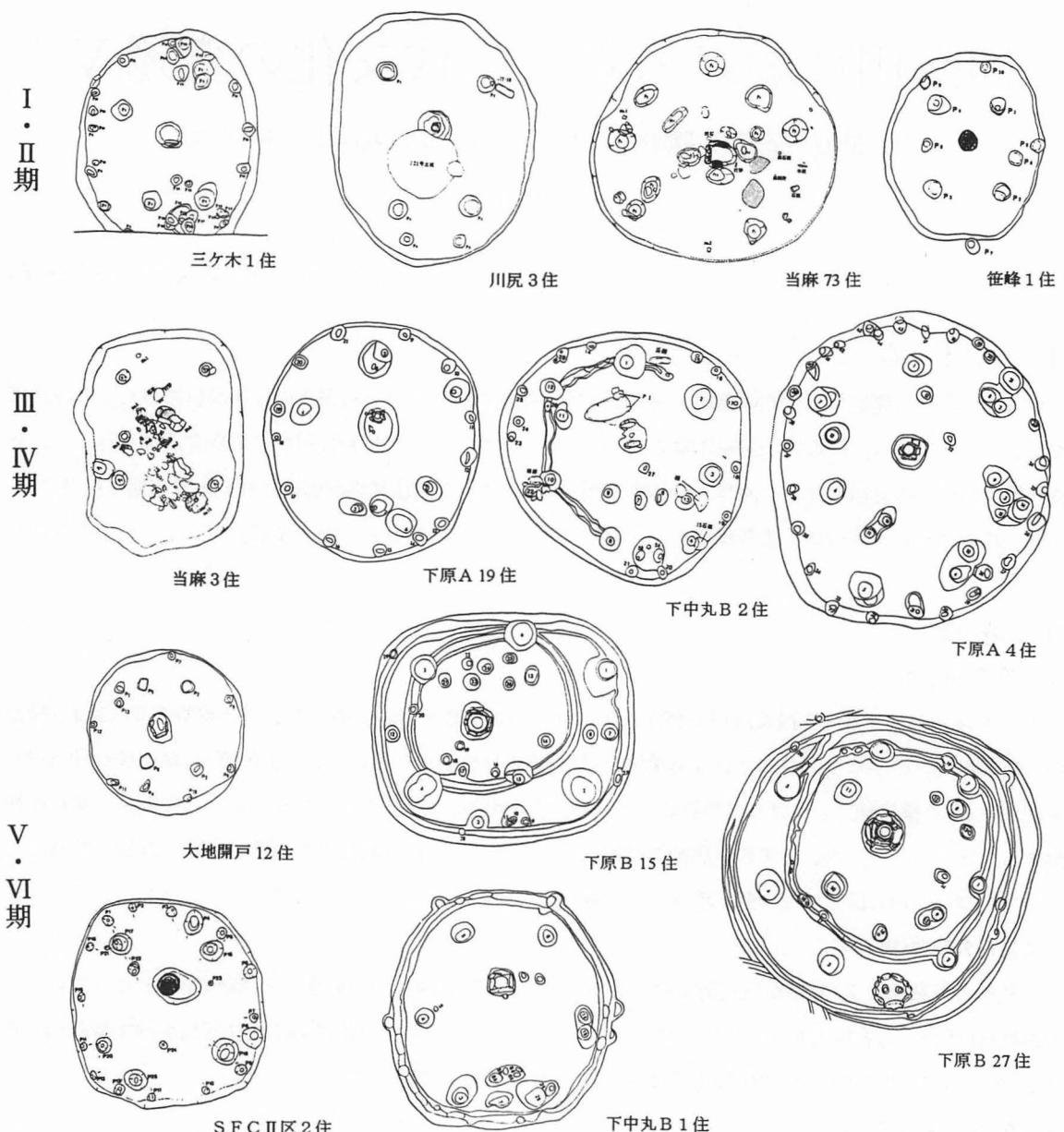
集成し得た735軒の住居の分布を水系別に集計した。勝坂式期全体を通してみると、多摩川・鶴見川水系に31遺跡185軒(25.2%)、相模川水系に27遺跡445軒(60.5%)が認められ、該期集落の立地・分布において、かかる水系周辺エリアが県東部と県央部の核となる地域であることが分かる。

③平面形態(第3図上段右)

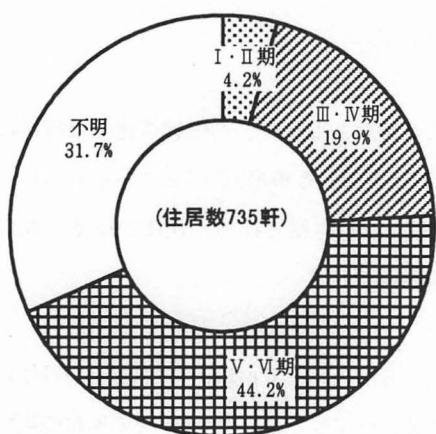
平面形態が把握できたものは735軒中491軒であった。グラフからも分かるように、各形態の比率は時期による際だった特徴を示すものではないが、定形的な形態(円形基調・方形基調・多角形)を示しているもの(479軒)のみで比較すると、時期が新しくなるにつれ、方形・多角形の形態を採る住居の比率が高まる傾向(方形;19.2%→22.1%→23.9%／多角形;0%→2.3%→2.9%)にあることが看取される。

④長軸規模(第3図中段左)

第3図のグラフは、長軸規模を3段階(2m以上4m未満／4m以上6m未満／6m以上)に区分し、各領域に属する軒数を集計・図化したものである。このうち、長軸規模の数値化が可能であった459軒を対象に時期別の推移をみてみると、概ね中規模と見なした4m以上6m未満の住居の比率は各時期を通して65%前後で一定



第1図 勝坂式期の竪穴住居址 (S=1/150)



第2図 勝坂式期竪穴住居址の時期別の比率①

第1表 勝坂式期竪穴住居址の時期別の軒数 (付帯施設・拡張等)

	入口施設		その他の施設			拡張等	
	張出部	ヒット	張出部+ヒット	埋甕	石器遺構	壁外ヒット	拡張
I-II	0	1	0	0	0	1	2 4
III-IV	0	4	3	0	0	0	17 35
V-VI	1	18	2	5	3	1	109 57
不明	1	1	0	2?	0	0	61 9
合計	2	24	5	7?	3	2	189 105

の比率を占めているが、概ね小規模と見なした2m以上4m未満の住居の比率は減少傾向(27.3%→25%→11.3%)に、概ね大規模とみなした6m以上の住居の比率は増加傾向(9.1%→10.7%→23%)にある。

⑤炉址形態(第3図中段右)

炉址形態を地床・埋甕(土器片廻含む)・石圍(石置含む)・石圍埋甕(石置埋甕含む)・炉無しに分類し、各類型毎に集計した。形態が把握された住居は634軒存在する。I・II期においては埋甕炉を付す住居の高い比率(51.7%)が目をひく。埋甕炉を付す住居15軒中7軒で阿玉台式土器の伴出が認められ、うち5軒では炉体土器として使用されていた。埋甕炉成立の背景として、東関東からの影響は看過できない要素と言えるかもしれない。III・IV期においては地床炉(29.4%)・埋甕炉(29.4%)・石围炉(21.4%)を付す住居が率的に拮抗する。また、炉無し・石围埋甕炉に関しては、確実なものが該期より散見される。前時期からの増加率を形態別にみると、石围炉を付す住居が5.7倍で唯一住居全体の増加率(4.7倍)を上回り、飛躍的に施設率が高まる。V・VI期の様相は、地床炉と石围炉の順位が逆転する他は前時期と大きな変動はない。前時期からの増加率は、埋甕炉(2.7倍)・石围炉(2.7倍)・石围埋甕炉(4倍)を付す住居が住居全体の増加率(2.2倍)を上回る。全時期を通してみると、石围炉・石围埋甕炉という縁石を伴う形態の炉址の伸び率が際だっており、ピークとなるV・VI期の比率は併せて全体の40%を越える。中期後半期へ引き継がれる傾向のひとつとしてとらえておきたい。

⑥主柱穴数(第3図下段左)

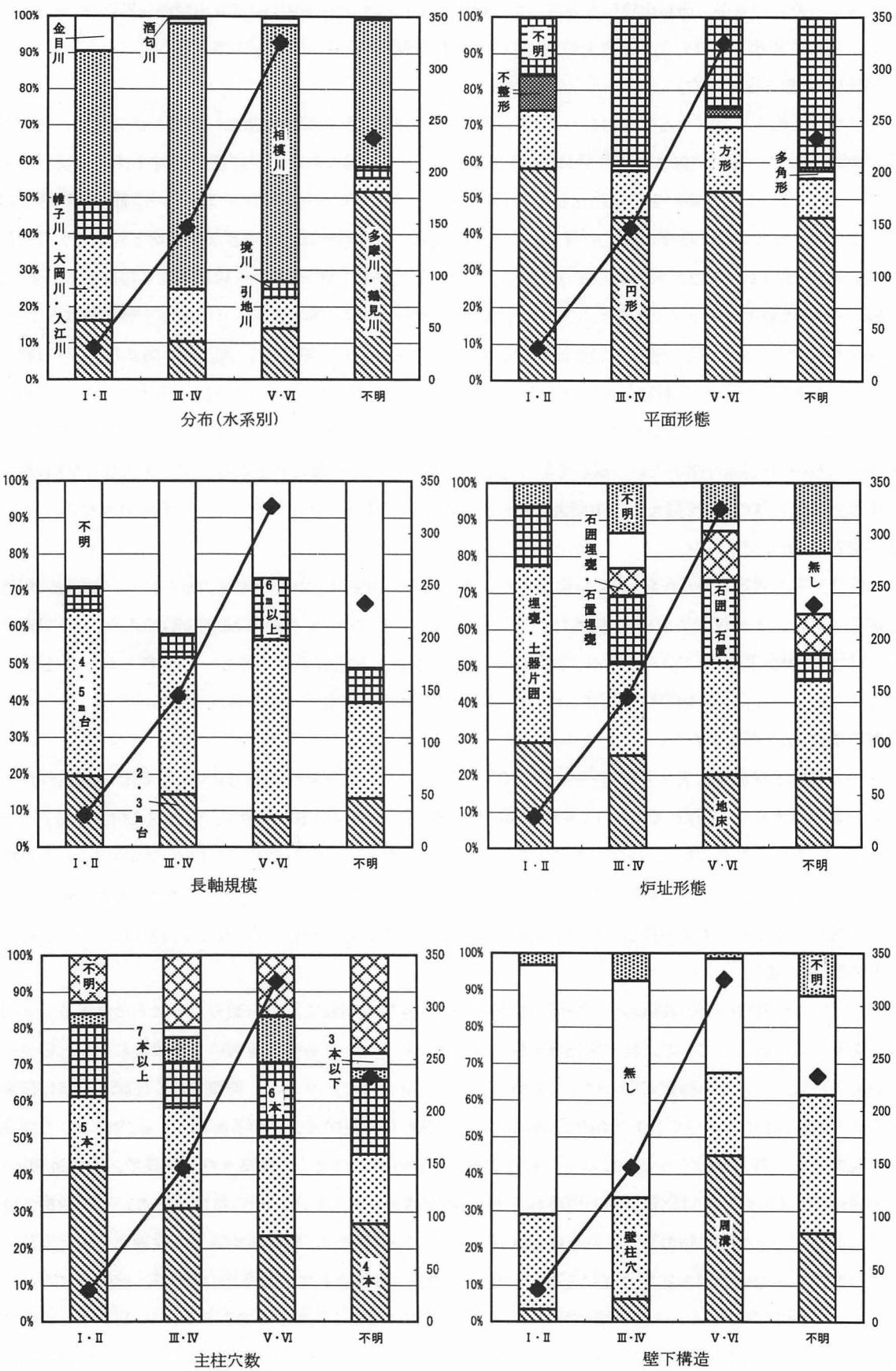
主柱穴配置を確定し得た住居は585軒存在する。集成した範囲では、0・2~8本柱の8パターンの主柱穴配置が確認された。I~IV期においては4本柱の住居が主体(I・II期;48.1% / III・IV期;38.5%)を占め、V・VI期では5本柱の住居が主体(32.1%)を占める。7本以上の主柱穴を有する住居は漸次増加しV・VI期でピーク(15.1%)に達するが、これは、長軸規模の項でふれた住居の大形化傾向と連動している側面もある。

⑦壁下構造(第3図下段右)

住居の周壁下構造を代表する周溝・壁柱穴の有無について、その判別が可能であった住居は691軒(住居の最終形態でのカウント)存在する。I・II期では、壁下構造をもたないものが70%、壁柱穴を付すものが26.7%、周溝を付すものが0.3%と、極端な偏在性を示す。III・IV期では、周溝・壁柱穴を付す住居のいずれも微増するが、全体的な比率はI・II期と大差がない。V・VI期では、周溝を付す住居の比率が45.6%と激増することが特徴で、壁柱穴タイプの住居と併せ、周壁下構造を有する住居が全体の7割近くを占めるようになる。

⑧その他(第1表)

第1表は、該期住居の付帯施設および建替・拡張等の状況を時期毎にまとめ軒数表示したものである。入口施設を有する住居として、竪穴状の張出部や梯子穴と思われるピットを有するものを対象としたが、確度の高いものに限定したため勝坂式期全体でも31軒をカウントするにとどまった。埋甕を伴う住居は、ほぼ確実なものが5軒存在する。いずれもVI期新段階に属すると思われる住居で、かかる時期が、県内における埋甕の初現期として有力であろうと思われる。石围遺構は住居内の入口近くに構築される施設で、上中丸遺跡・下原遺跡B地区においてVI期新段階と思われるもの3軒が報告されている。報告書によると、石围遺構の性格は、埋甕または祭壇に類似した施設と推察されている。現時点では、相模川中流域に立地する上記遺跡以外での類例をみない。勝坂式期の住居全体で、柱等の建替が実施されているものは105軒、拡張がなされているものは189軒存在する。I~IV期における住居の再構築は建替住居が主体であるが、V・VI期では拡張住居が飛躍的に増加(前時期比6.4倍)する。住居規模が大形化する傾向にあるV・VI期においては、建替・拡張等なんらかの再構築が実施されている住居は325軒中166軒を数え、全体の過半数におよんでいる。(井辺一徳)



第3図 勝坂式期竪穴住居址の時期別の比率②（分布・平面形・規模・炉址・主柱穴・壁下構造）

2. その他の遺構

当該期の竪穴住居址以外の遺構としては竪穴状遺構、掘立柱建物址、集石、土坑、屋外埋設土器がある。

竪穴状遺構(第4図1)

竪穴状遺構として報告されたものが笹峰遺跡に1基、土橋第六天遺跡に2基、大地開戸遺跡に1基ある。平面形は円形ないし不整円形、規模は直径約2.5~3.5m程の小形の竪穴で、床面には炉をもたない。ピットはあるものとないものがある。時期は笹峰遺跡例は第Ⅰ期、大地開戸遺跡例は第Ⅲ期、第六天遺跡例は第Ⅴ期に属する。小形の竪穴住居址と報告されたもので炉をもたないものには本遺構と類似したものがある。

掘立柱建物址(第4図2~4)

該期から加曽利E式期にかけての掘立柱建物址は港北ニュータウン内にある前高山遺跡、大熊仲町遺跡、神隠丸山遺跡、小丸遺跡、三の丸遺跡、高山遺跡、寅ヶ谷東遺跡、花見山遺跡の8遺跡で検出されている。このうち前高山遺跡では当該期に限定できる掘立柱建物址が18基検出されたが、18基中には柱穴列が単列のものと複列のもののが存在した。前者は短辺柱穴数-長辺柱穴数が2本-3本(同図2)や3本-3本と小形のものからなる一方、後者は小形のもの(同図3)は少なく、長軸長が8mを越える大形のもの(同図4)が多い傾向がある。この柱穴を二重に巡らす大形の掘立柱建物址は石井寛氏がD群掘立柱建物(石井1989)と分類し、当該期を特徴づけるものとしたもので、他にも小丸遺跡や花見山遺跡などで確認されている。この他港北ニュータウン外では大地開戸遺跡で第Ⅰ期に属する掘立柱建物址が1基検出されている。この掘立柱建物址は集落構成のわかる前高山遺跡や神隠丸山遺跡では竪穴住居址群より内側に占地しており、共同作業場や居住施設など多くの見解が示される本遺構の機能を推察する上で興味深い。

集石(第4図7・8)

当該期に限定できる集石は上白根遺跡で1基、湘南藤沢キャンパス内遺跡で9基、下原遺跡で1基、飯山上ノ原遺跡で2基、中坂東遺跡で5基、川尻遺跡で1基、三ヶ木団地内遺跡で3基報告されている。また大熊仲町遺跡や加賀原遺跡などでも勝坂式から加曽利E式にかけての集石の存在が報告されている。平面形は円形や不整円形をなし、規模は小さいものでは径が約0.5m程度、大きいものでは約2.0m程度のものまであるが、径が約1.0~2.0m程度のものが主体である。集石の下部には大抵円形で擂り鉢状の土坑が存在する。時期別には第ⅠないしⅡ期に属する中板東遺跡2号集石(同図8)や、第Ⅲ・Ⅳ期に属する三ヶ木団地内遺跡1・3号集石、第Ⅴ期に湘南藤沢キャンパス内遺跡例や中板東遺跡1号集石(同図7)などがある。

土坑(第4図9)

該期の土坑は平面形が円形基調を基本とし、不整円形や楕円形のものが存在する。規模は径が約0.4~2.0m程におさまるものが多い。深さが比較的浅く、土器が埋設されている土坑は墓壙と考えられ、墓制の項で触れている。一方それらに該当しないものは貯蔵穴など他の機能が考えられる。

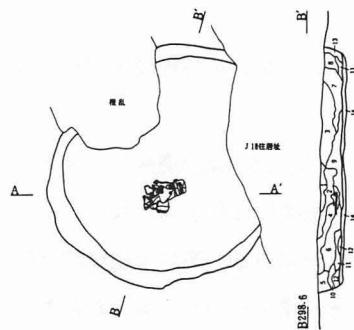
屋外埋設土器(第4図5・6)

当該期の屋外埋設土器は土器が正位に埋設されたものがほとんどである。逆位のものは大抵土坑内に埋設されたもので詳細は墓制の項で触れている。焼土を伴うもの(同図6)と伴わないもの(同図5)があり、前者は炉としての機能が想定できる。

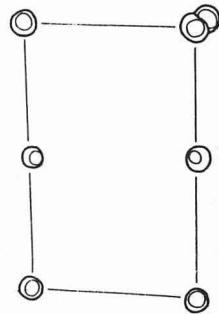
(松田光太郎)

参考文献

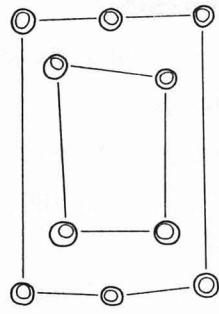
石井寛 1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』6



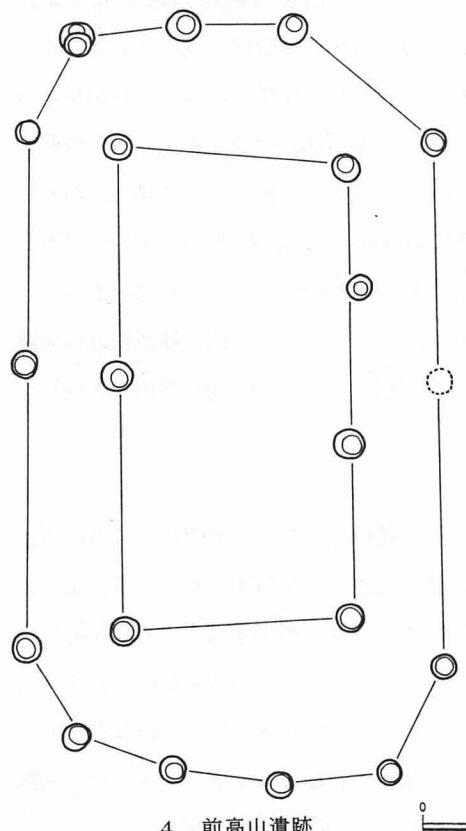
1 大地開戸遺跡 J 1号竪穴状遺構



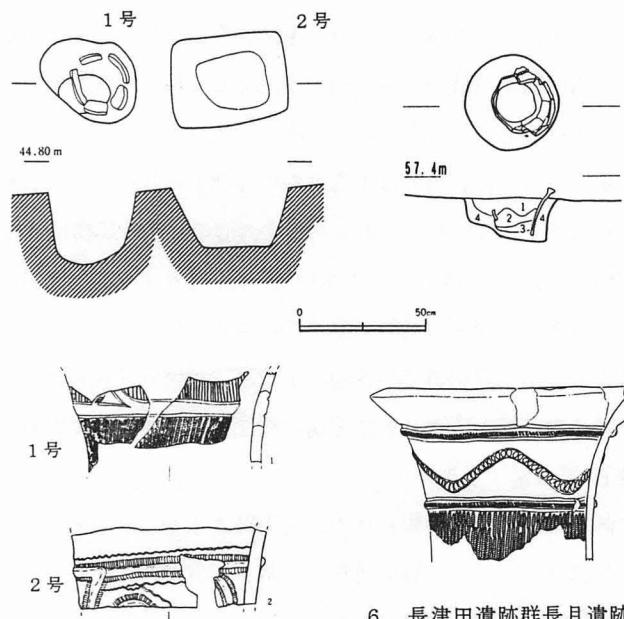
2 前高山遺跡



3 前高山遺跡

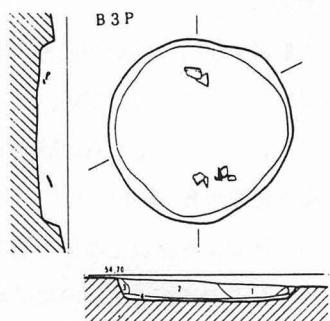


4 前高山遺跡

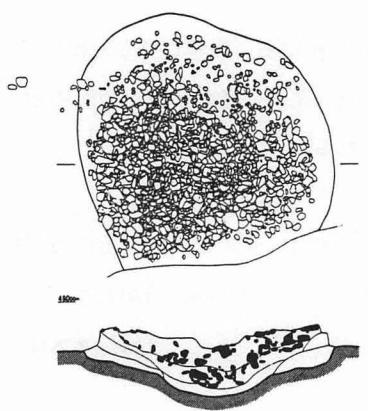


5 受地だいやま遺跡
第1・2号埋設土器

0 10cm



9 花見山遺跡 B 3号土坑



7 中板東遺跡 1号集石

8 中板東遺跡 2号集石

0 1m

第4図 勝坂期の各種遺構

III. 集落構造

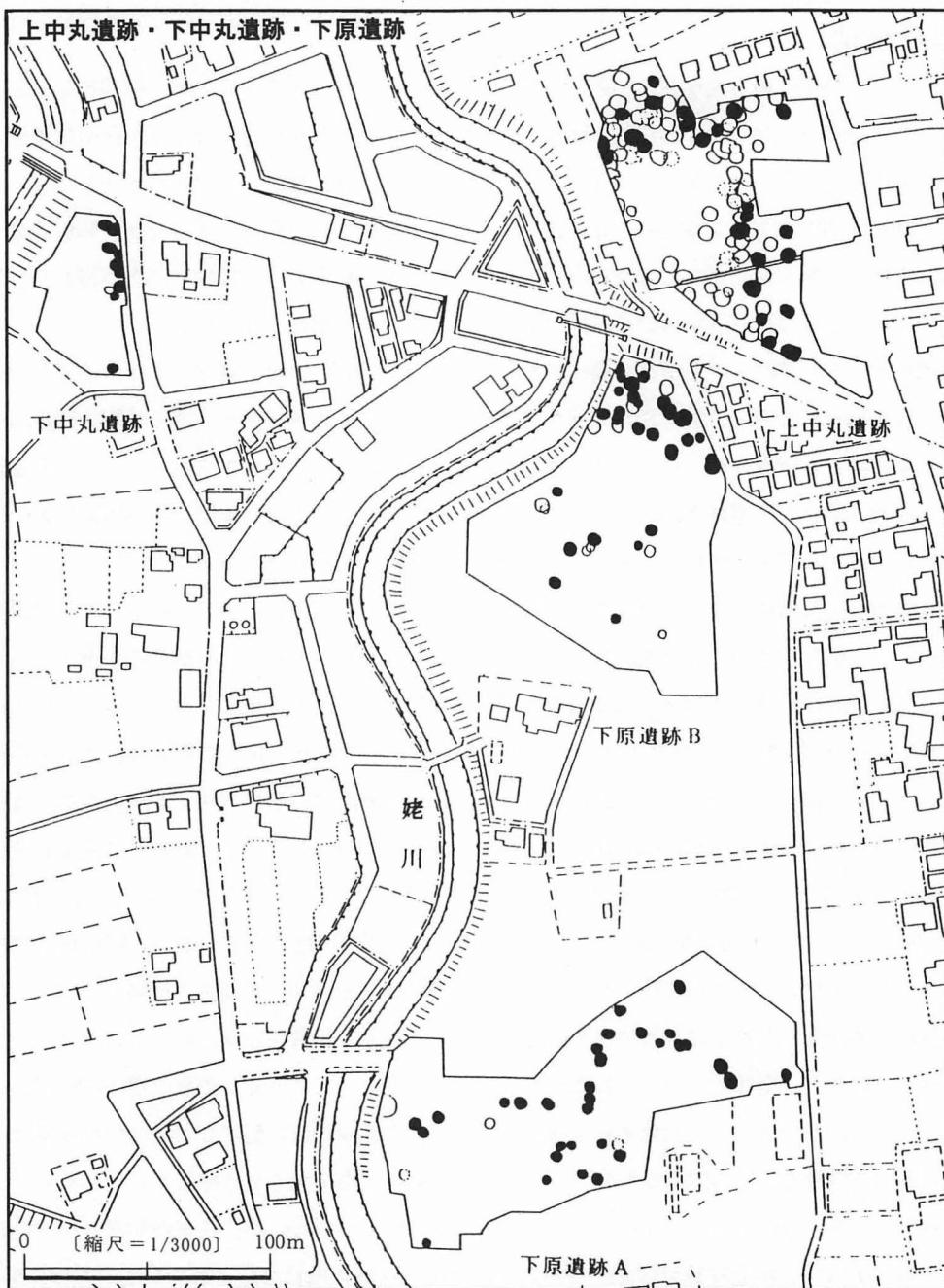
縄文時代中期は集落が最も発達した時期にあたる。神奈川県内における住居跡数の推移を見ると、中期初頭の五領ヶ台式期の住居跡は55基(加藤 1997)であったが、今回の集成で取り扱った中期中葉勝坂式期住居跡は1458基以上を数える。中期後半の加曾利E式・曾利式期にかけてはさらに急激に増加していくものと思われる。中期初頭期では2~3基程度の住居跡のまとまりで構成される集落であったが、勝坂式期では数十基単位のまとまりで集落が営まれるようになる。ここでは、ある程度の平面規模で調査が行われ、集落の構成がほぼ明らかになった代表的な遺跡を概観することにより、その構造を見ていきたい。

上中丸遺跡・下中丸遺跡・下原遺跡で構成される下溝遺跡群(第5図)は、隣接する3つの遺跡で比較的広い面積の調査が行われた例で、加曾利E式期まで継続して営まれる集落である。勝坂式期の遺構は住居跡94基と土坑・集石などが確認されている。勝坂式期を通じた最終的な住居の分布を見ると、下中丸遺跡、上中丸遺跡と下原遺跡B、下原遺跡Aの3つのまとまりが見られる。報告では、集落の古い段階において下原遺跡Aと下原遺跡Bで小単位の集落が出現し、北側の上中丸遺跡と西側の下中丸遺跡に拡散していく、盛期には広場を有する3ヶ所の環状集落に発達すると把握されている(文献76・77・85)。このように下溝遺跡群は、河川を挟む下中丸遺跡も含めた広い地域にわたり集落の広がりが認められることが特徴の遺跡である。

岡田遺跡(第7図)は、勝坂式期から加曾利E式期まで継続して営まれる集落である。勝坂式期の遺構は、住居跡358基と掘建柱建物跡・土坑墓・集石などが確認されている。勝坂式期の集落は、調査区の西側・東側・南側の3ヶ所の環状集落で構成され、新しい時期の住居は集落の内側に分布する傾向があると指摘されている(文献69・82・93)。杉久保遺跡(第6図)は、勝坂式期から加曾利E式期まで継続して営まれる遺跡である。勝坂式期の遺構は、住居跡58基が確認されている。報告では小単位の住居の変遷が捉えられている(文献71)。全体的な分布を見ると台地先端部にあたる北側と台地基部付近の南側の2つの環状集落で構成されている。当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡(第6図)は、勝坂式期から加曾利E式期まで継続して営まれる集落である。2遺跡は隣接し、合わせて17基の住居跡で構成されている。集落成立期においては小単位の住居が見られるのみであったが、全体的な分布では環状を呈するよう配置されている。前高山遺跡(第7図)は、勝坂式期の掘立柱建物跡がまとまって発見された遺跡である。掘立柱建物跡の配置など具体的な変遷は明らかではないが、竪穴住居跡と一定の間隔を保ちつつも最終的には環状を呈するよう配置されていることは注目できる。大熊仲町遺跡(第6図)は、住居跡の具体的変遷などは明らかでないが、住居跡50基と掘立柱建物跡5基で構成される集落で、掘立柱建物跡の配置が前高山遺跡と同様に環状に配されている。金程向原遺跡(第6図)、上白根おもて遺跡(第6図)は、調査範囲に制約があり周辺の様相は明らかでないが、環状又はブロック状の集落を呈していると思われる。吉岡遺跡(第7図)は勝坂式期の集落で、調査範囲では4基のみの住居跡で構成され、大規模な集落には発達しないことが想定できる例として取りあげた。

集落の発生期は、編年案の第I期及び第II期にあたるものは当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡などがあげられるが遺跡数は全体的に少ない。編年案の第III期・第IV期に発生期が該当する集落が圧倒的に多い。

集落の継続性は、中期初頭五領ヶ台式期から継続が認められる遺跡は極めて少ない。金程向原遺跡では、地点が少し異なるが北側に隣接する第II地点で五領ヶ台式期住居跡が3基発見されている。南側には勝坂式期~加曾利E式期の集落が展開しており、第II地点を含めて捉えると勝坂式の前段階から継続して集落が認められる少ない事例である。勝坂式期以降については、加曾利E式期まで継続する集落は多数認められる。

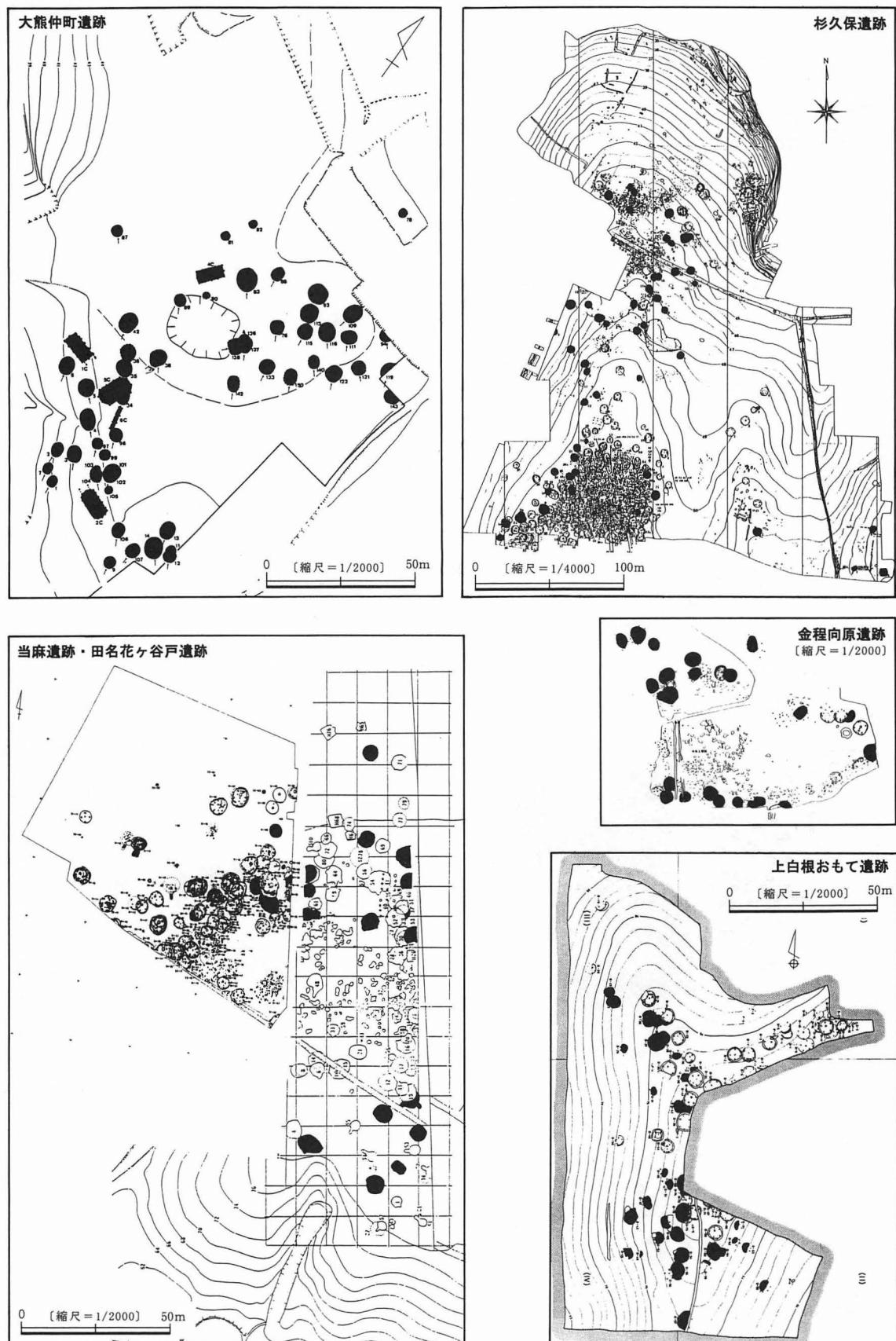


第5図 勝坂式期の主要集落（1）

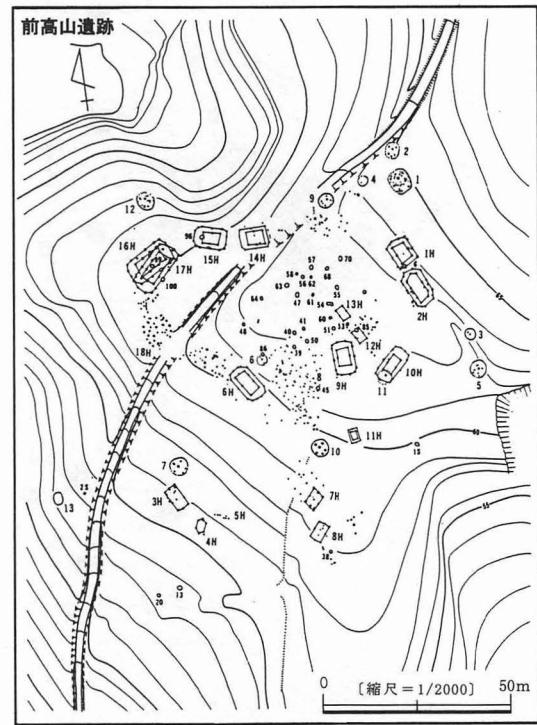
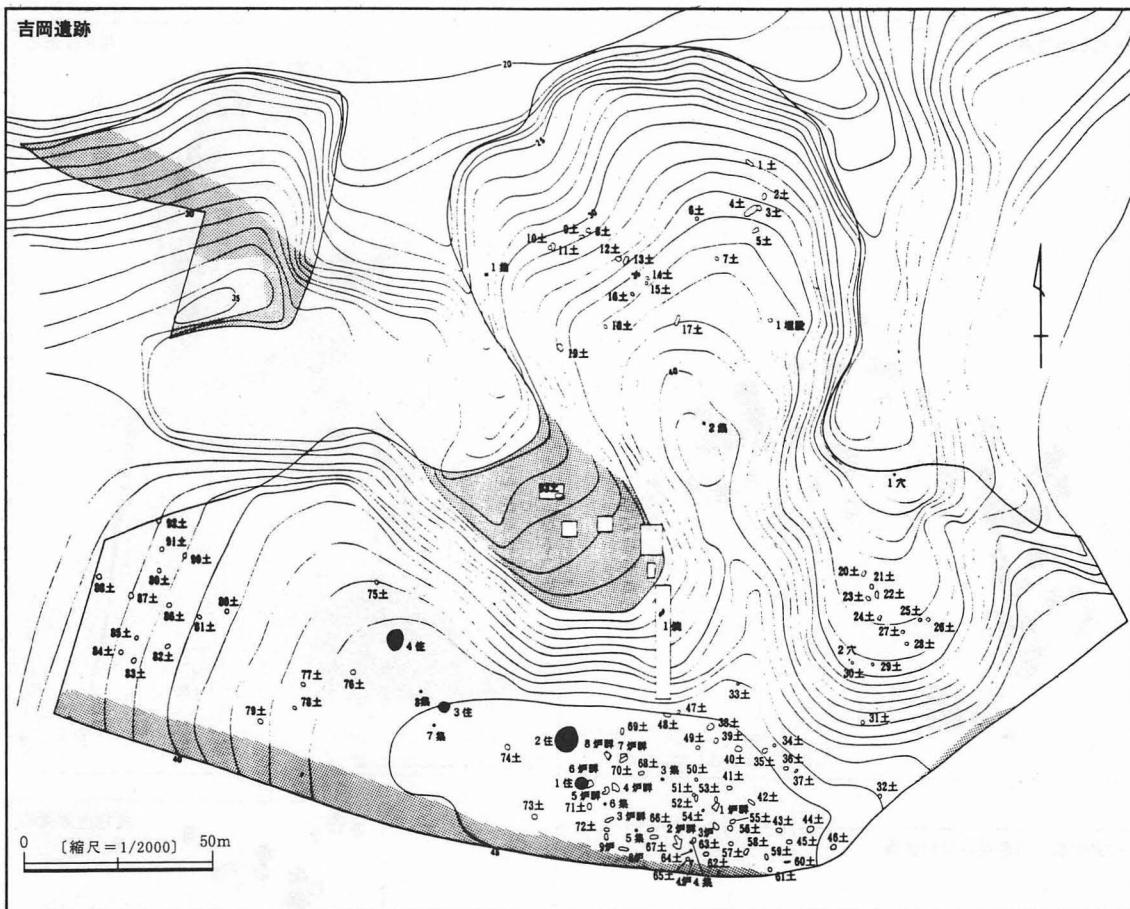
集落の規模は、下溝遺跡群や岡田遺跡のように数百mの規模を有するような大規模な集落である場合、杉久保遺跡のような数十基単位の集落である場合、吉岡遺跡のような小単位の集落である場合などがある。

勝坂式期の代表的な集落の一部を概観したが、いずれの場合も調査範囲という制約があり、遺跡の広がりを十分に捉えることが困難である場合も多い。ここで取り扱った遺跡においても、調査区に隣接する地形の検討や、近隣に所在する遺跡の様相を十分に把握して、集落の広がりを捉えていく必要がある。また、編年案の第Ⅰ期・第Ⅱ期の集落数が現時点では少ないと、第Ⅲ期・第Ⅳ期にかけて急速に発達した勝坂式期の環状集落が、加曾利E式期まで継続して営まれていることなど、今後検討していくかねばならない課題も多いといえよう。

（天野賢一）



第6図 勝坂式期の主要集落（2）



第7図 勝坂式期の主要集落（3）

IV. 墓 制

墓制を探る直接の手がかりとなるのは埋葬人骨だが、県内における勝坂期の埋葬人骨出土例は皆無である。また、人骨の次に手がかりとなるのは、埋葬が想定される土坑であるが、遺跡から発見される大半の土坑は時期や性格を確定するのが難しく、結果的に墓として扱うことができる資料は限られたものになる。

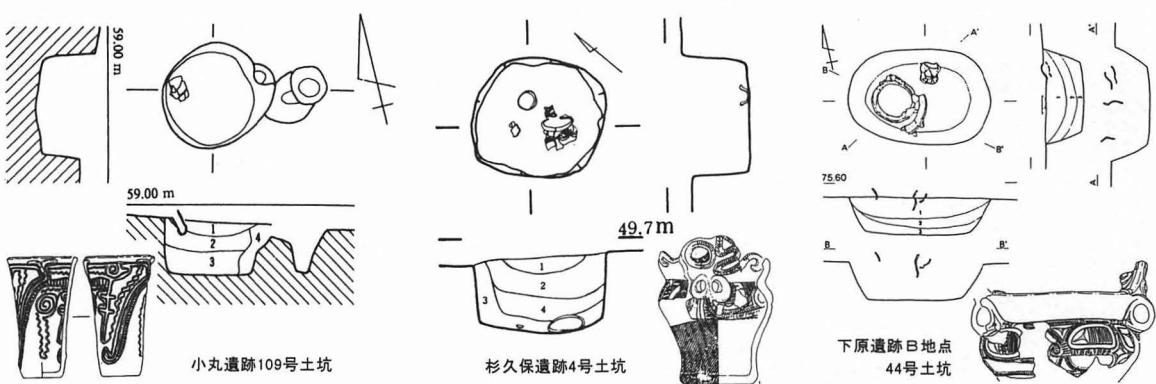
土坑墓：墓壙と推定される土坑で、現在までに報告されているのは以下の16例である。
① 貝被葬が想定される土坑(壁際の上層部や坑底から斜位に深鉢が出土する土坑)：横浜市三の丸遺跡A155号、海老名市杉久保遺跡1号(I～II期)・同4号(V期)・同10号(IV～V期)、相模原市下原遺跡B地区44号(V期)・同50A土坑(I～II期)。
② 土器の副葬と推定される土坑(小形円筒形土器が出土した土坑)：横浜市小丸遺跡第109号(I期)・下原遺跡B地区11号(V期)・同36号土坑(V期)。
③ 形態と土器片の出土から当該期の墓壙と推定される土坑：相模原市上中丸遺跡A地区25号(III期)・下原遺跡A地区第9号・16号・18号(II期)・同B地点19号(V～VI期)・杉久保遺跡第5号(IV～V期)・伊勢原市比々多遺跡群中坂東遺跡第27号(III期)。なお、③のうち上中丸・中坂東例は出土土器がやや大きく、貝被葬の可能性がある。これらの土坑の形態は不整橢円形か不整円形で、規模は長径80～150(平均111cm)、短径64～135(平均89cm)、深さ25～77(平均44cm)で、概ね径1m内外の規模として把握されるものである。縄文人の平均身長が150cm前後とされることから、大半の土坑では屈葬が想定されるが、貝被葬の想定される土壙の土器が上層から抗底にかけて出土することから、座位・仰臥・側臥・俯臥など多様な葬法が採られたものと思われる。

なお、土器以外の副葬品や覆土内に大型の礫を伴う土坑で、勝坂期に特定できる例は認められなかった。

集落内における位置：前期に環状集落が成立して以来、中央広場内に墓域が形成されることが指摘されているが、県内の勝坂期の環状集落で明確に墓域形成が確認されるいわゆる「縄文モデルムラ」の例は、下原遺跡B地区・横浜市北川貝塚・寒川町岡田遺跡の3遺跡だけである。同じ環状集落でも、下原遺跡A地区や杉久保遺跡の土坑墓は、どちらかと言えば環状集落の円環部に散在しており、中央広場の墓域形成は未発達である。また、住居址が数軒の小規模集落では、例えば小丸遺跡のように住居からやや離れて土坑墓が位置している。こうしたことから、当該期の土坑墓は住居と一定の間隔を空けて配されること、これが集落中央部に限定されることによって墓域が形成されること、また、中央広場に墓域を形成しない場合もあり得ること等を指摘することができる。

その他：このほか墓制との係わりが指摘される遺構として、埋設土器と大型掘立柱建物がある。埋設土器は小児埋葬、大型掘立柱建物は葬送儀礼に用いられたとする説があるが、どちらもその機能に諸説があり、ここでは墓制に関わった可能性を指摘するにとどめたい。

(長岡文紀)



第8図 勝坂期の土坑墓

V. 遺 物

1. 土製品（第9図、第2表）

ここでは、前号でおこなった土器編年案（I～VI期）に照らしながら、勝坂式期に属する住居址等の遺構から出土した土製品の概要を把握したい。なお、遺構外出土のものについては、集成・研究の進んだ土偶に限って今回の集計に加えたが、その他については、属性に乏しい上、同遺跡内に中期後半の遺構・遺物が多数出土している状況など、時期比定に確実性を欠く場合が多いため、集成の対象から外さざるを得なかった。

該期の遺構内で確認された土製品の主な種類は、土器片錐・土器片円盤・土偶・土製耳飾が掲げられる。数量的には土器片円盤が最も多く、次いで土器片錐・ミニチュア土器・土製耳飾・土偶の順となっている。

土器片錐（1～6） 五領ヶ台式期から引き続き事例が確認できる。I・II期に属する資料は該期の遺構数が少ないこともあり、点数は希少である。III期以後は遺構数に比例し点数が増加している。土器片長軸方向に浅い切目を作出する形態が一般的である。該期には石錐が併存するが、今後これとの関係解明が課題である。

土器片円盤（7～12） 土器片錐同様、前時期から事例が確認できる。点数の動向も土器片錐と類似している。平面形は周囲に摩耗痕が観察される円形基調のものが大半で、時期明瞭な有孔の資料は認められない。

土偶（13～23） 前時期の集成で県内の事例は管見に触れず、該期から漸く存在が確認できる。遺構外出土ではあるが、角押文を文様施文に用いたI期に比定される資料（9）が認められ、該期当初からの存在は確実であるが、これ以外I・II期の明確な資料は指摘できない。III期以降は、土器文様との対比が難しく細かな時期比定ができないが、住居址覆土中でV・VI期の土器とともに出土している事例が多い。遺存状態は、いずれも破損状態である。13の頭部には髪形を彷彿させる文様が施されており、15の側面觀は恰も仮面を被っているかのようにみえる。23には赤彩の痕跡が観察される。

土製耳飾（24～32） 属性に乏しく時期比定に不安が残るが、該期の住居址出土のものを集成した。24はI・II期の土器とともに検出されたものであり、いずれかとの共伴であれば該期で最も古い事例となる。その他はV・VI期の土器とともに出土している事例が多い。32以外は臼形の中央に貫通孔をもち、貫通孔方向に長い形態（29・30等）と直径方向に長い形態（24・27）が識別される。さらに前者には貫通孔が細く体部が厚手のもの（30等）と貫通孔が広く体部が薄手のもの（29等）とが観察される。25・27～29には赤彩が遺存している。

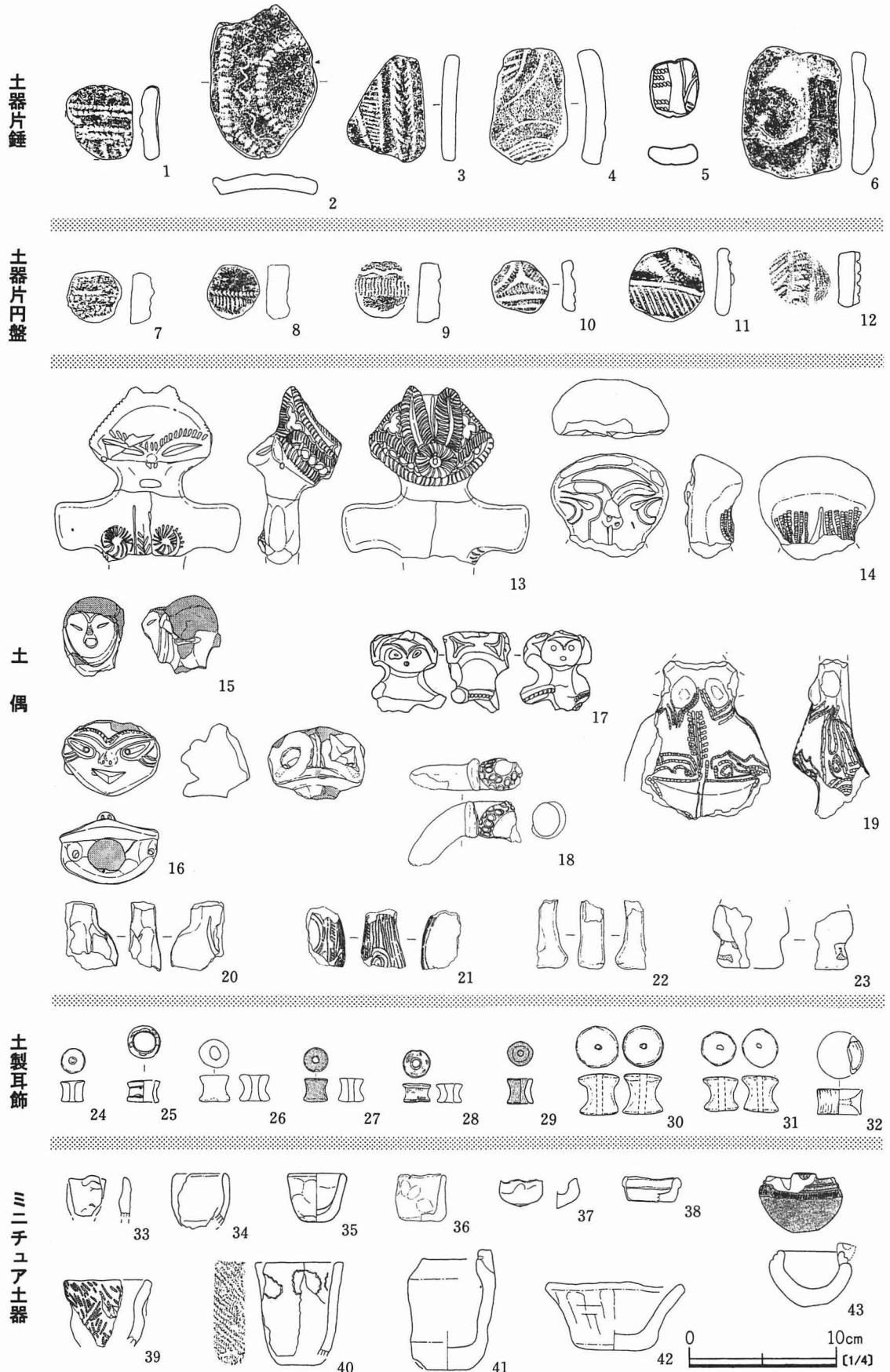
第2表 勝坂式期遺構の出土の土製品

所 在	遺跡 No.	遺 跡 名	土器片錐	土器片円盤	土 偶	土製耳飾	ミニチュア土器	挿 図 №
川崎市	85	金程向原第Ⅲ地点	2	8			1	
横浜市	1	赤田地区No2	7					
横浜市	5	上白根おもて	2	16			5	
横浜市	11	大口台	9	16			1, 2, 6, 35	
横浜市	14	井土尻				1	24	
横浜市	63	原出口				1	32	
横浜市	72	梶山北	10				3	
横浜市	83	西之谷大谷		2				
相模原市	113	上中丸A地区			(3)	2	1, 30, 31	
相模原市	115	下中丸B地区		15	1(3)	1	6, 21, 25, 33, 40, 41	
相模原市	116	下原A地区	2	11			1, 9	
相模原市	117	下原B地区	3	19	2		5, 12～14, 34, 37, 42	
相模原市	118	新戸		6				
相模原市	119	当麻		7	1		3, 11, 17	
相模原市	172	橋本			(1)			
海老名市	141	杉久保	1	71				
寒川町	147	岡田			(1)			
藤沢市	107	湘南藤沢キャンパス内	2	3		1	1, 29	
藤沢市	108	西部221地点	1					
城山町	151	川尻		20	3	2	2, 8, 20～22, 26, 27, 38, 39	
津久井町	152	大地開戸		16		1	28	
津久井町	153	三ヶ木		20	1		2, 7, 18, 19, 36	
山北町	149	尾崎		2	1		1, 43	
伊勢原市	133	神成松	1	7			4, 10	
秦野市	171	天神台			(1)			
平塚市	163	原口（未報告）				(4)		15, 16
合 計			40	239	9(13)	9	23	

※括弧内数値は他時期遺構内または遺構外出土

ミニチュア土器（33～43）

属性に乏しく帰属時期に不安が残るが、該期住居址出土の器高10cm以下の資料を集成した。手捏ね製が多く、形態はバラエティに富むが、無文が多い。V・VI期の土器と共に出土している事例が多く、40にはIII・IV期的な、43には赤彩に加えV・VI期的な文様がみられる。（恩田 勇）



第9図 勝坂式期の土製品

2. 石器・石製品(第10図)

ここでは、勝坂期全体の石器について、主に住居址等の遺構から出土したものを抽出し、大まかな器種毎の概略に触れてみる。なお当該期の石器類の出土量等についての数値的な検討は、報告資料が膨大なためと各資料の掲載内容にばらつきが認められたため、割愛させていただいた。ただし、石器の全体量の傾向のみ触れておくと、住居の軒数の増加がみられる勝坂Ⅲ期以降の出土量は激増している。

石鏃(1～7) 遺構外に持ち出されて使用されるため、完形品は多くなく、未製品や欠損品が目に付く。凹基無茎鏃が主流をなし、長さは正三角形状に近いものから、二等片三角形状のものまで多様である。1・2は平茎のもの。

石錐(8～11) 扁平な橢円礫の長軸・短軸の両端に浅い切れ目を入れている。双方に入れるものもある。溝状に加工したものは管見に触れなかった。西部221地点遺跡などで比較的まとまった量が出土している。

浮子(12)：軽石製の浮子である。製品としての出土例は多くない。周囲を整形したものと自然面を残したものなどがある。12は周囲を四角く整形し穿孔している。

敲石・磨石・凹石(13～19) 敲石は、敲打された面が扁平で面的に細かい敲打痕が認められるもの、端部を利用し敲打面が部分的に剥離痕が認められるものなどが比較的多く認められている(13～15)。凹石は礫の平坦面のほぼ中央に1箇所ないし複数箇所の凹部をもつもの(18)、磨石は敲石や凹石と併用して使われたものが多く、磨石のみとして使われたものは少ないようである。扁平・長橢円形礫の平坦面や側縁など多面を利用しているものが目立つ。

石皿・台石・多孔石(20～21) 石皿は摺り面が凹状に作出されるもの、大型礫の平坦面をそのまま利用したものなどが見られる。凹部は緩やかな局面をもつものが多く、また台石や多孔石との兼用も見られる。

打製石斧(22～31) 器種としての出土数は相対的に多い。短冊形・撥形がそのなかでも多くを占めるが中間的な形態のものもある。明瞭に中央に抉りをもち両端が広がる分銅形(31)は多く認められなかった。欠損したものを再加工して使用したようなものもあり、大きさは多様である。25・31のような大型の打製石斧も多くはないが認められる。このほか杉久保遺跡では三日月状の打製石斧なども出土している。

磨製石斧(32～37) 乳棒状を呈するものが主体である。敲打痕を残すものなど未製品や欠損品の出土が多い。ほかに刃のみを磨いている部分磨製石斧(37)がある。36は刃部両端を定角的に加工した痕跡がみられるとされている。

大型粗製石匙(38～41) 形態は石匙に類似するが、大型で粗製のもの。量的には打製石斧や磨石・敲石類に劣るが、当該期にはよくみられる。ホルンフェルスが石材として多用される。摘み部分をもち、刃部が横形、あるいは斜めのものと縦形のものとがあるが前者が圧倒的に多い。

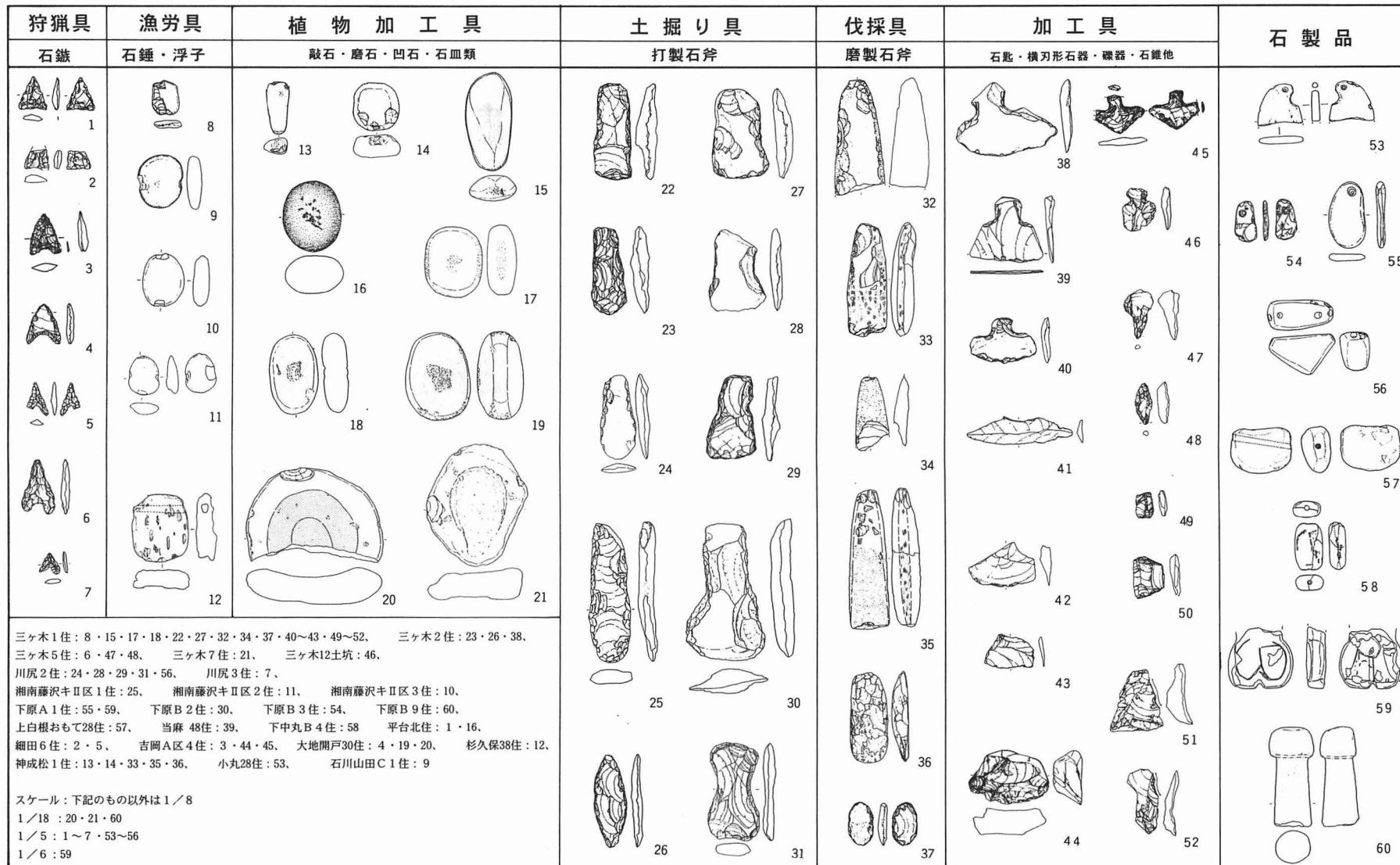
横刃形石器(42～43) 鋭いエッジをもつ剥片の1辺ないし2辺を刃部としているもの。

石錐(47～48) 摘み状の部分をもち尖頭部を棒状に作出したもの、棒状に作出したもの、剥片の端部にノックチ状の加工を加えて先端部を作出したものなどがある。

礫器(44) 自然礫の側面などに刃部を作出してあるもので、片刃のものと両刃のものがある。

石匙(45・46) 小型で精製された作りのもの。出土は多くないようである。45はチャート製であるが比較的大型で特異な例である。粗製ではないという意味で小型石匙の範疇にはいるものとした。

その他の加工工具では、楔形石器(49・50)、スクレイパー(51・52)などが出土している。 (加藤千恵子)



第10図 勝坂式期の石器・石製品

石製品(53~60) 勝坂式期の石製品としては、小丸遺跡28号住居址出土の垂飾(53)、川尻遺跡J 2号住居址出土の垂飾(56)、下原遺跡B地区第4号住居址出土の垂飾未製品(58)、同遺跡第20号住居址出土の垂飾、第35号住居址出土の垂飾(54)、第9号住居址出土の石棒2点(60)、上白根おもて遺跡第28号住居址出土の垂飾(57)等があげられる。また、下原遺跡第19号住居址出土の岩偶(59)、上白根おもて遺跡第41号住居址出土の岩偶様の石製品の存在が特筆される。これらの事例はそのすべてが編年案のⅢ~Ⅴ期に相当する。I~Ⅱ期に属すると同定し得る事例は皆無で、勝坂式期前半段階における石製品の様相は不明である。垂飾は厚手のいわゆる大珠とされるものが見られる。石棒はその多くが遺構外からの出土で、厳密に当該期に所属することが明らかな事例は炉石に転用されていた上述の2例のみにとどまった。石棒の使用の場が主として屋外にあったとすれば、本来当該期に所属していた事例の多くを見落としている可能性は高い。大珠、石棒、岩偶の事例は前段階までには見あたらず、石製品は当該期をもって、五領ヶ台式期まで続いた玦状耳飾り等の前期的様相を払拭し、中期的な様相を確立したものといえよう。

(小川岳人)

神奈川県内 中期中葉土器出土主要遺跡地名表（補遺2）

- (1) この表は一昨年度および昨年度刊行した「神奈川における縄文時代文化の変遷V -中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相 その1」「同 その2」(1998・99 研究紀要3・4)に掲載できなかった遺跡を補うものである。
 (2) 掲載基準および様式は前回を踏襲している。
 (3) 作成に当たってはプロジェクトメンバーが分担して集成し、データベース化した。なお、表の編集は長岡が担当した。

遺跡No.	遺跡名	所在地	住居数	阿玉台	文献No.
横浜市青葉区					
170	上恩田遺跡群 杉山神社遺跡	恩田町字内田前 912番地外	28		112
秦野市					
171	天神台遺跡	北矢名			113
相模原市					
172	橋本遺跡	元橋本町橋本7			114
厚木市					
173	中荻野成井田遺跡	中荻野成井田・本郷			117
伊勢原市					
174	神戸・上宿遺跡	神戸字両毛703-5他			122
175	咳止橋遺跡	粕谷字咳止橋外	1		118
中井町					
176	境大塚遺跡	境字大塚218外			119
津久井郡					
177	県営三ヶ木団地遺跡	三ヶ木633他	1		121

文献一覧（表中文献No.と一致）

- 112 1985 大川清ほか 「上恩田遺跡群杉山神社遺跡の調査」 第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
- 113 1985 杉山博久ほか 『秦野市史 別巻 考古編』秦野市
- 114 1985 大貫英明ほか 『橋本遺跡 縄文時代編』 相模原市橋本遺跡調査会
- 115 1995 坂本彰ほか 『花見山遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X VI (財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター (遺跡番号62 の本報告)
- 116 1996 竹石健二・野中和夫 『金程向原遺跡III -第III地点(遺物編)発掘調査報告-』 金程向原遺跡発掘調査団 (遺跡番号85 の遺物編報告)
- 117 1998 北川吉明 『中荻野成井田遺跡』 神奈川県厚木市一般国道412号厚木・上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書(VIII) 国道412号線遺跡発掘調査団
- 118 1998 高杉博章 『神奈川県伊勢原市 咳止橋遺跡 県道63号(相模原大磯線)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』 伊勢原市No.128遺跡調査団
- 119 1998 高杉博章 『神奈川県中井町 境大塚遺跡 県立やまゆり園再整備に伴う埋蔵文化財発掘調査』 中井町境大塚遺跡調査団
- 120 1999 石井寛 『小丸遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 25 (財)横浜市ふるさと歴史財団/横浜市教育委員会 (遺跡番号47 の本報告)
- 121 1999 北平朗久・吉田浩明・麻生順司 『神奈川県津久井町 県営三ヶ木団地内遺跡発掘調査報告書』 県営三ヶ木団地内遺跡発掘調査団
- 122 1999 木村吉行・柏木善治 『神戸・上宿遺跡(No.15) -第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告 15 伊勢原市内-』 かながわ考古学財団調査報告 57 (財)かながわ考古学財団
- 123 1999 吉田浩明・中山豊 『神奈川県城山町 川尻遺跡(城山町No.1遺跡)発掘調査報告書』 城山町No.1遺跡発掘調査団 (遺跡番号151に関わる調査報告)

弥生石器の基礎的研究（3）

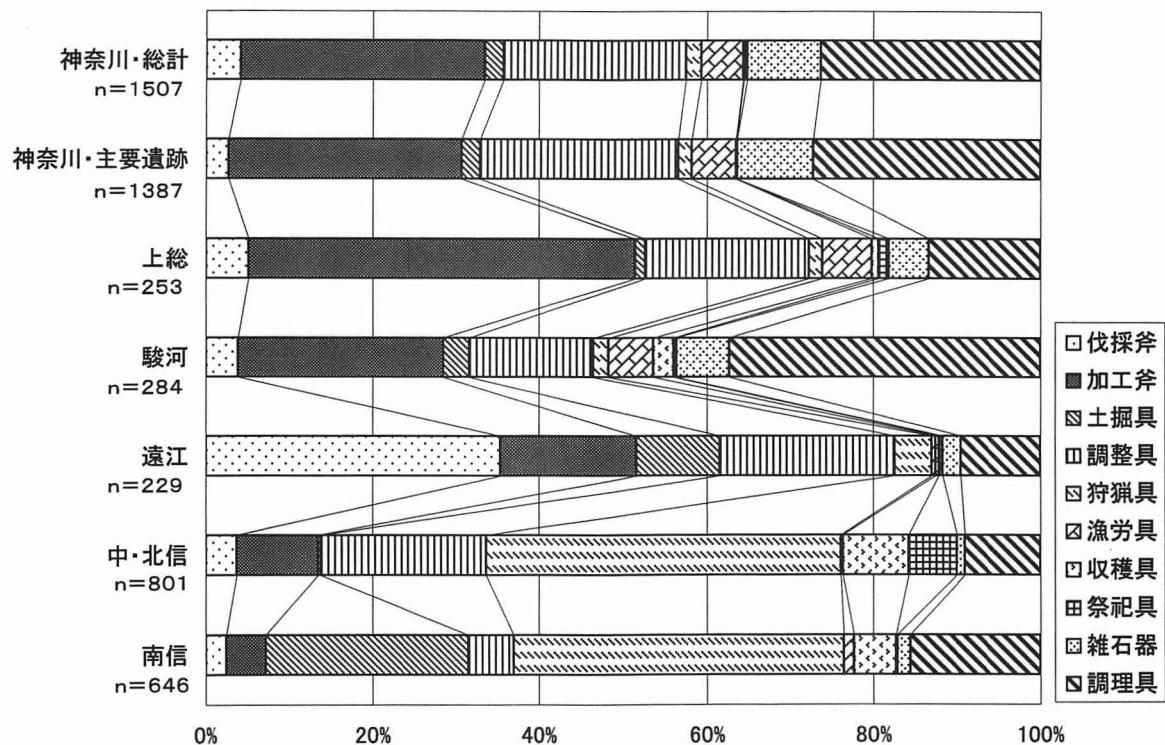
弥生時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

これまで2年間にわたり、県内で出土した弥生時代の石器について集成・分類を行い、基礎的な統計処理による様相の把握を行ってきた。今回も引き続き、弥生石器を対象として検討を行うこととする。

前号では、時期ごとの器種組成、磨製石斧の法量の傾向、地域的な組成の傾向、調理具・調整具の器種組成の傾向等について検討を行ったのであるが、その結果、石器の種類・量ともにIV期（中期後葉・宮ノ台式期）に増大し、V期（後期）に激減するという、関東地方に通有のあり方が再確認された。しかしながらまた一方で、県内の地域的な器種組成の傾向として、V期の「朝光寺原」地域の石器依存度が相対的に高く、なおかつ調理具の占める割合が高いといった点で、隣接する「下末吉」地域と相違が認められることや、漁撈具の分布と割合に有頭石錐の分布が関連するらしいこと等が明らかとなった。またさらに、金属器の普及（=磨製石器類の減少）と調整具（砥石類）の出現頻度が比例関係にはなっていないという状況も明らかにされた。

今回は、神奈川県内の石器組成の特徴をより明確にするために近接地域の代表的地域・遺跡の様相と比較し、その上で県内の代表的遺跡について分析を試みることによって、県内における地域色を明らかにすることを目的とする。



第1図 神奈川県および近接地域の石器組成

分析の方法は今回も統計的処理による組成の比較を中心に行うこととし、石器の器種・量とともに豊富なIV期の遺跡を取り上げて分析することにした。

分析の対象とする遺跡は、石器が11点以上出土している堅穴住居址が2軒以上、または遺跡全体でIV期の石器が50点以上あることを選出の基準としたが、この基準を下回っている場合でも地域を代表する遺跡として選んだ遺跡もある。分析に当たっては、遺跡出土のIV期の石器すべてを対象とした。

県内の遺跡については地域的に代表的な遺跡を選び、また同時に、遺跡の地理的立地条件も考慮した。このため、今回はIV期の遺跡の分析であるが、前号でのV期の地域区分に近い地域区分となっている。分析対象となった遺跡は、「相模」地域の県西部から三ツ俣遺跡（低地）と砂田台遺跡（台地）、三浦半島から赤坂遺跡と佐原泉遺跡、「南武藏」地域の下末吉台地地域から大塚遺跡と折本西原遺跡、多摩丘陵地域から関耕地遺跡と観福寺北遺跡および観福寺裏遺跡の4地域9遺跡である。

近接地域の遺跡についてはIV期の主要遺跡を選び、静岡県の遠江地域から1遺跡、駿河地域から5遺跡、千葉県の上総地域（下総南西部を含む）から4遺跡、長野県の南信地域から2遺跡、中信地域と北信地域から各1遺跡の3県6地域14遺跡を分析対象とした。なお、山梨県には分析対象として良好な遺跡が見当たらなかったため、検討を加えていない。

県内遺跡のデータは前回までに集成したデータを用いた。県外の遺跡については、今回新たにデータ化して分析したが、県内遺跡と同様の資料化は行っていない。

分析に当たってはメンバー全員で検討を重ね、県外遺跡のデータ集成および各遺跡の分析は全員で分担して行った。グラフについては、峰および伊丹が整理統合して出力した。原稿は文末に文責を示し、用語の統一と全体の編集は伊丹が担当した。
(池田)

2. 近接地域の特色

(1) 千葉～上総～

千葉県は石器として相応しい石材が産出せず、出土する石器に関しては製品・未成品を含めた他地域からの流通が想定されている（石川1994）。ここでは上総地域のIV期を代表すると考えられる千葉市城の腰遺跡、市原市大厩遺跡・菊間遺跡、袖ヶ浦市美生遺跡といいすれも台地上に所在する集落遺跡の石器組成を示すことにした（第2図）。

まずこの4遺跡を概観してみると、1. 大厩遺跡・城の腰遺跡に見られるように木製品製作に関わると考えられる伐採斧・加工斧が60%以上を占める集落遺跡、2. 美生遺跡に見られるように伐採斧・加工斧は20%を越えるに過ぎず、約50%を調理具が占める集落遺跡、という大別が可能であろう。菊間遺跡はこの中間的な石器組成を示すものと見なされ、加工斧と調整具、祭祀具と調理具がほぼ同じ比率で出土している事実が指摘できる。

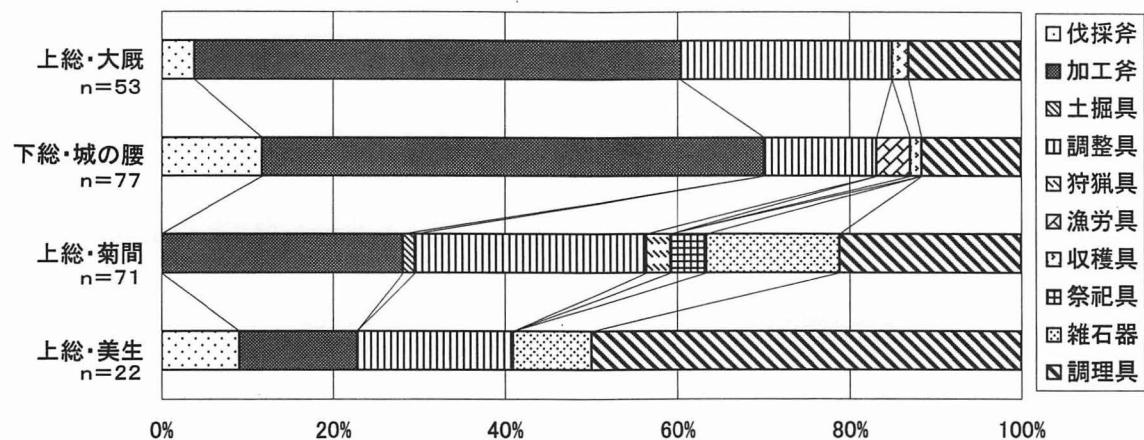
これと同様の傾向は神奈川県においても見られ、大塚遺跡は約50%弱を伐採斧・加工斧が占め、関耕地遺跡での組成は美生遺跡に、砂田台遺跡は菊間遺跡に類似している。また、静岡県の遠江・駿河地域においても角江遺跡・矢崎遺跡においては伐採斧・加工斧が、有東遺跡・雄鹿塚遺跡では調理具が多数を占めるなど、有東式土器・宮ノ台式土器という内容的にも近似した土器型式分布圏で示される両地域においては、集落遺

跡の石器組成に共通する要素が見出せる。この背後に想定されるものとしては、均一的な生産体制の存在があげられようし、石器組成に見られる上記の傾向は各集落が生業に適応した用具を選択した結果であるとも考えられるのである。

ここで他の周辺地域と比較した場合、千葉県の上総地域に見られる特色を指摘するならば、組成に占める伐採斧・加工斧の比率の高さがあげられる。上総地域の4遺跡の総数で見ると、223個体の石器のうち伐採斧13個体、加工斧98個体と約50%をこの二者が占めている。これは遠江・駿河地域が約40%、中・北・南信地方で11%に過ぎないことと対照をしており、また神奈川県の総計での約34%をも越えている。先述のように適した石材の産出が見られない千葉県でのこのあたり方は特異であり、それが加工斧に、そして伐採斧にまず利用された背景には農耕社会としての生業の中で、農耕具を含む木製品生産がいかに重要な意味を持っていたのかを示すものと思われる。また大廐遺跡に見られる調整具の比率の高さは未成品等を他地域から入手し、集落内で再加工を行い、刃部の再生を繰り返し行っていた事情を物語るものと思われるのである。

このIV期、南関東地方には既に各種の鉄器が流入しており、磨製石斧の生産はその不足を補うために行われたという想定は、従来の研究の中で幾度も繰り返されてきている。特に原材となるべき火成岩系の礫が僅少な上総地域におけるあり方に対して、この地域が大規模な環溝集落群を形成している事実から石器だけでなく鉄器の供給が前提であることが指摘されている（安藤1997）。神奈川県から上総に至る集落遺跡において木工用の伐採斧・加工斧が高い比率を占めている事実は、「見えざる鉄器」の見積りの多寡も問題ではあろうが（櫛宜田1997）、利器が鉄器化してゆく過程の一端を示している可能性も考えられるのである。

（高村）



第2図 上総における主要遺跡の石器組成

(2) 静岡～駿河・遠江～

静岡県内で分析の対象としたのは、遠江の浜松市角江遺跡、駿河でも西に位置する藤枝市上藪田川の丁遺跡・清水遺跡・静岡市有東遺跡と東に位置する沼津市雄鹿塚遺跡・清水町矢崎遺跡の5遺跡、計6遺跡である。遠江と駿河全体のそれぞれの割合は第1図のとおりである。静岡県では各遺跡は周辺の石材を用いて石器を製作していた可能性が高いとされ（平野1986）、石材の差異を越えた共通項があれば、それが地域色と

呼び得る地域と言えよう。

遠江は角江遺跡1遺跡のデータであるが、その特徴としては、伐採斧が3割近くを占め、他地域と比べて突出していることがまずあげられる。土掘具が南信について多く、収穫具も比較的多い。反対に、調理具の少なさが中・北信と並んで際だっている。

駿河の特徴としては、調理具が非常に多いことが第一にあげられる。それ以外の器種では、調整具はやや少ないものの、神奈川県や上総などと比較的似かよった割合を示しているようである。しかしながら、地域の特徴が、そのままその地域内の各遺跡でもあてはまるかどうかは問題がある。駿河においては、遺跡ごとにその様相は大きく異なっており、地域ごとの特徴を抽出することは難しい。

各遺跡ごとの石器組成は第3図のとおりである。以下、個別にみていくこととする。

角江遺跡は三方原台地南方の砂堤列上に立地しており、旧河道や方形周溝墓などが検出されている。既に述べたように、伐採斧が3割以上と突出していることが特徴としてあげられる。ただしここでは旧河道などの出土が大半で、この組成の割合がそのまま集落における石器組成の割合とは言い難い。

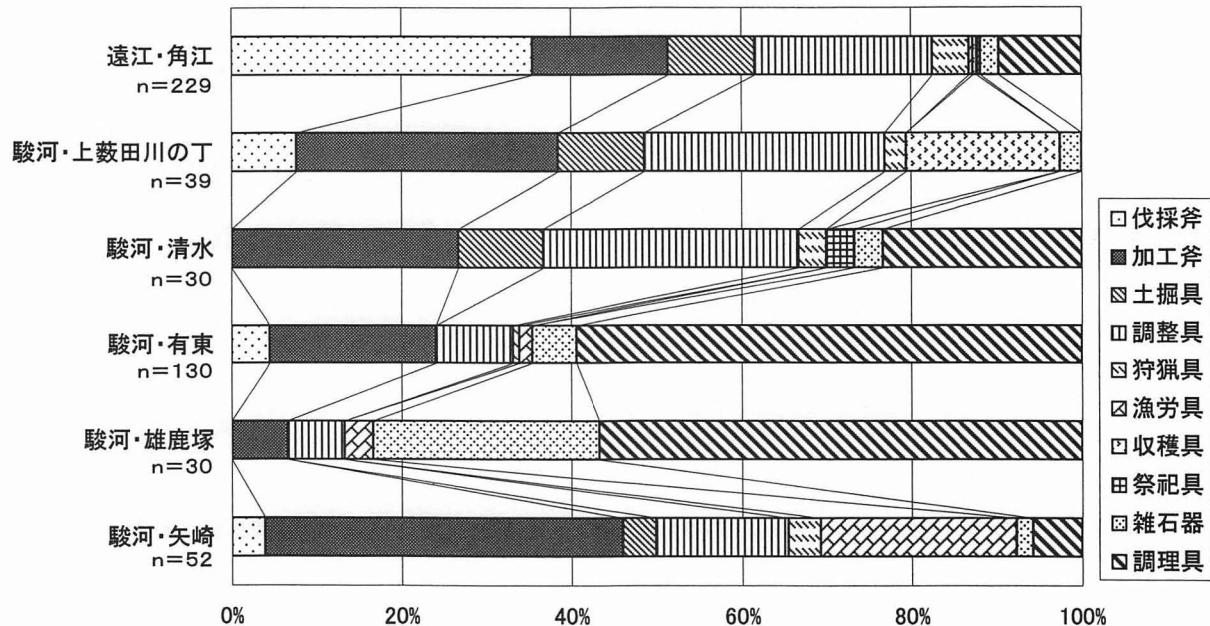
上戸田川の丁遺跡は志太平野の沖積地上に立地している。調査面積は狭いものの、堅穴住居などが検出されている。加工斧と調整具がそれぞれ3割以上と多く、それに約2割の収穫具が続く。

清水遺跡も志太平野の沖積地上に立地している。ここでは3割を調整具が占め、それに加工斧が続き、調理具も2割認められる。ただし、角江遺跡と同様、自然流路からの出土である。

有東遺跡は静岡平野の後背湿地上に立地している。集落と水田域、墓域などが検出されており、部分的な調査ではあるものの静岡平野のなかでも抜きん出た規模をもつと考えられる。ここでは6割近くを調理具が占めている。

雄鹿塚遺跡は標高1m程度の低湿地帯に立地している。トレンチ調査であり、総点数でも30点であるが、過半数を調理具が占めている。

矢崎遺跡は狩野川の形成した河岸段丘上に立地している。ここでは、4割余りが加工斧であり、ついで多



第3図 遠江・駿河における主要遺跡の石器組成

いものが漁撈具である。そしてこの漁撈具の割合は2割以上と突出している。ただし、総数52点の石器は、戦前の調査のものも含んでおり、報告された組成の割合の比率が実体と見合ったものであるか考慮する余地がある。

以上のように各遺跡ごとの差異を承知した上では、全体の傾向を示すことにはためらいを感じる。集落を完掘するような新たな資料の増加によって、今後大きく変わることも予想はされるが、現時点での非常に大局的な傾向として考えてみたい。

IV期の石器組成は、畿内などでは伐採斧が加工斧に比べ量的に卓越するのに対し、宮ノ台式土器文化圏では伐採斧が少ないことも特徴の一つといわれている（安藤1998）。駿河でもほぼ同様の結果が得られており、宮ノ台式土器分布圏と駿河との共通性の高さを裏づける結果となっている。遠江の角江遺跡は、これらの遺跡と明らかに異なって伐採斧が卓越するが、これが活動形態を異にする地域差であるのか、遺跡自体の個性であるのかは明らかではない。

伐採斧・加工斧などの磨製石斧以外の器種では、遺跡ごとで大きなばらつきはあるものの、敲石・磨石など調理具としたものが極端に多い遺跡が駿河でみられることは特徴の一つといえるだろう。

駿河地域の特徴としては、漁撈具が一定程度の割合を占めていることもあげられる。なかでも矢崎遺跡ではかなり多く、距離的に近い神奈川県の三ツ俣遺跡の様相と共に共通するところがある。これは有頭石錐などの分布などからも裏付けられる。

上記のことをふまえてみてみると、駿河は神奈川県との親縁性が強い地域と考えられる。遠江になると大分異なる要素もみられるが、遠江自体は南信や中・北信に比べると相対的には神奈川県の方に共通する部分が多いようにも思われる。しかしながら、遠江と神奈川県との検討は、遠江以西のデータとの比較を踏まえた上で行なうべきであろう。

（飯塚）

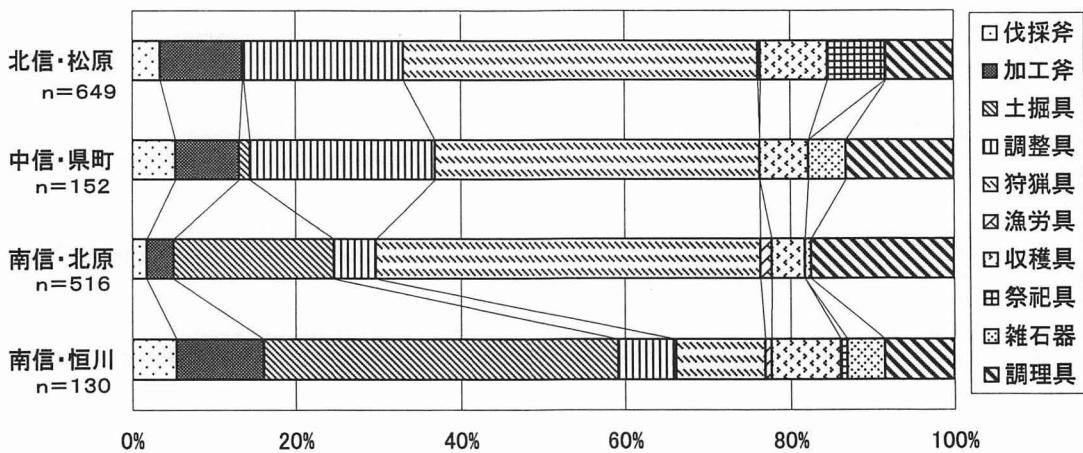
(3) 長野～中・北信、南信～

長野県の趨勢を提示するにあたっては、南信の飯田市恒川遺跡群と北原遺跡、中信の松本市県町遺跡、北信の長野市松原遺跡を主要な例として扱った。グラフはそれらの遺跡から出土した資料をデータ化したものである（第4図）。

選択した遺跡の立地をみると、恒川遺跡群と北原遺跡はともに天竜川右岸の河岸低位段丘上の扇状地に占地し、県町遺跡は松本平の薄川右岸の扇状地先端部、松原遺跡は千曲川右岸の自然堤防から後背湿地上にかけて位置する。

これらのデータで最も特徴的なのは、狩猟具の組成比率が非常に高いことである。主要例のうち、恒川遺跡群だけは1割程度に留まるものの、その他の県町・北原・松原遺跡ではともに4割を超え、量的に突出している。狩猟具には打製・磨製石鏃両方が存在し、それぞれの組成比率は遺跡によって異なる。また近接する恒川遺跡群と北原遺跡の例をみてもわかるように、狩猟具が極端な組成比率を示すのはある地域全体を通じての様相ではなく、遺跡毎に違いを見せていくようである。北信でも松原遺跡では4割強の比率を示すのに対し、同じ長野市内のIV期の遺跡の中には出土した石器の中に打製・磨製石鏃双方で7%程度しか存在しない例もみられるという（久保1993）。

逆に差異の少ない部分に目を向けると、収穫具は数こそ1割弱と少ないがどの遺跡においても同程度の割合で出土しており、県域全体を通じて安定した組成比率を示している。収穫具には打製・磨製石包丁の双方



第4図 信濃における主要遺跡の石器組成

があり、形態や穿孔の数等の属性から数種類の類型が見られる。

また今回のデータでは雑石器の中に含ませた「使用痕を持つ剥片」のうち、石包丁と同様の石材で縁辺に光沢を有するものが一定量みられる。この光沢が珪酸が付着したものとは断定できないが、石包丁と同様の用途も考えられることから収穫具には多様なバリエーションが存在した可能性は否定できない。

他に長野県における弥生石器出土例の特徴的な点は、調整具や雑石器に分類したものの形態上の多様さであり、例えば砥石類の他にも部分的な研磨痕を有する石器などが存在する。こうした形態差が用途の差、換言すれば研磨する対象の違いを示す可能性を論ずるのは早計であるが、注目しておきたい。

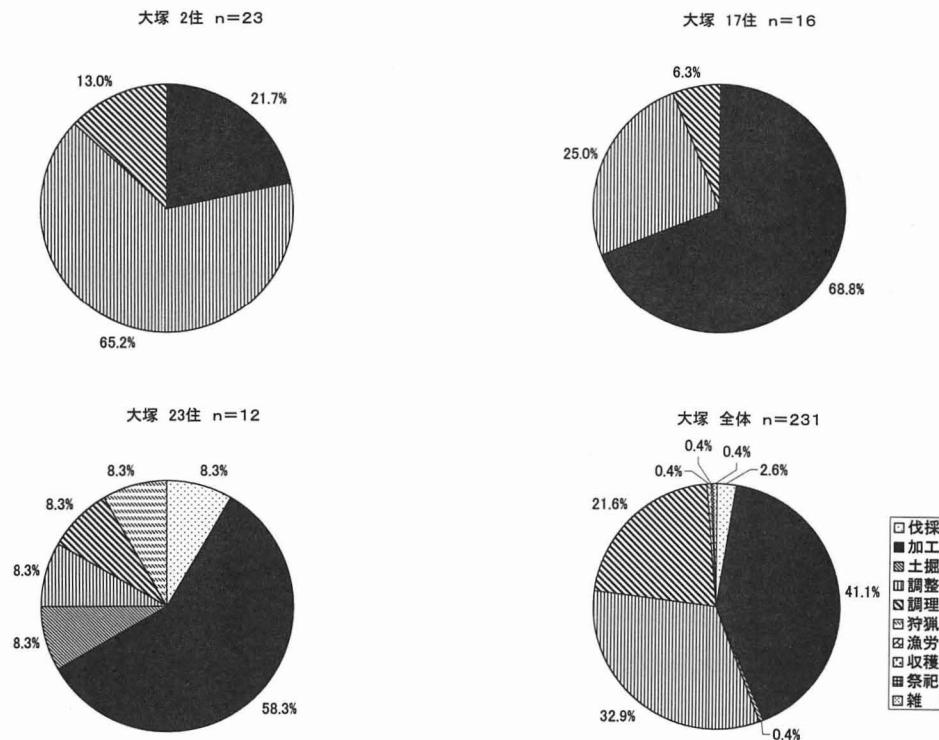
(渡辺)

3. 神奈川の代表的遺跡の特色

(1) 大塚遺跡 横浜市

大塚遺跡では、全体をみると加工斧（41.1%・95点）が最も多くを占め、ついで調整具（32.9%・76点）、調理具（21.6%・50点）で、この3器種が主体を占める（95.6%・221点）。それ以外では伐採斧（2.5%・6点）のほか、土掘具・収穫具・祭祀具・雑石器があるが、それぞれ実数でも1個のみの出土で、主要な組成には含まれない。以上のこととは、加工斧の占有率が突出していることを除けば神奈川県全体の石器組成のあり方とほぼ合致する。

これを11個以上の石器が出土した2・17・23号住居址を例にとり住居址単位でみると、占有率の違いこそあるが、2・17号住居址では遺跡全体のあり方を端的に示すように、加工斧・調整具・調理具の3器種しか出土していない。ただし、2号住居址では調整具が65.2%（14点）、17号住居址では加工斧が68.8%（11点）と、主体となる器種に相違がみられる。また、23号住居址では、主体となる3器種のほか、伐採斧・土掘具・狩猟具などが含まれ、組成にはバラエティーがあり、個々の遺構間では組成のあり方にかなりばらつきがみられることが分かる。

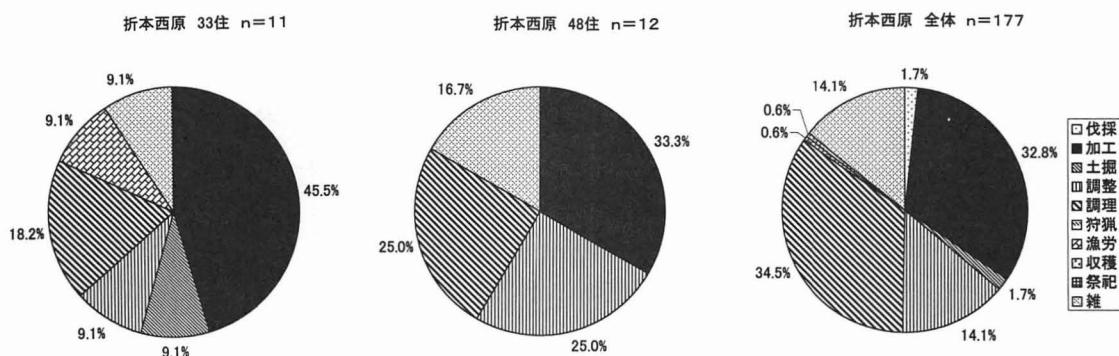


第5図 大塚遺跡の石器組成

(2) 折本西原遺跡 横浜市

折本西原遺跡では、全体で見ると調理具（34.5%・61点）が最も多くを占め、ついで加工斧（32.8%・58点）、調整具・雑石器（各14.1%・25点）で、伐採斧・土掘具・狩猟具・収穫具が数%ずつとなる。特に占有率の高い石器は無いが、加工斧・調理具の多さに対し、調整具が前出の二器種の1/2以下の出土量である点は特筆すべきであろうか。ただし、雑石器を除けば、主体となる3器種について神奈川県全体の石器組成のあり方から逸脱することはない。

住居址単位でみると、48号住居址では加工斧・調整具・調理具・雑石器が遺跡全体の組成を反映するように出土しているが、33号住居址では加工斧が45.5%（5点）を占めるのに対し、調理具18.2%（2点）・調整具・土掘具・漁撈具は10%以下で、大きく加工斧に偏っている。11個以上の石器が出土した住居址が2軒の



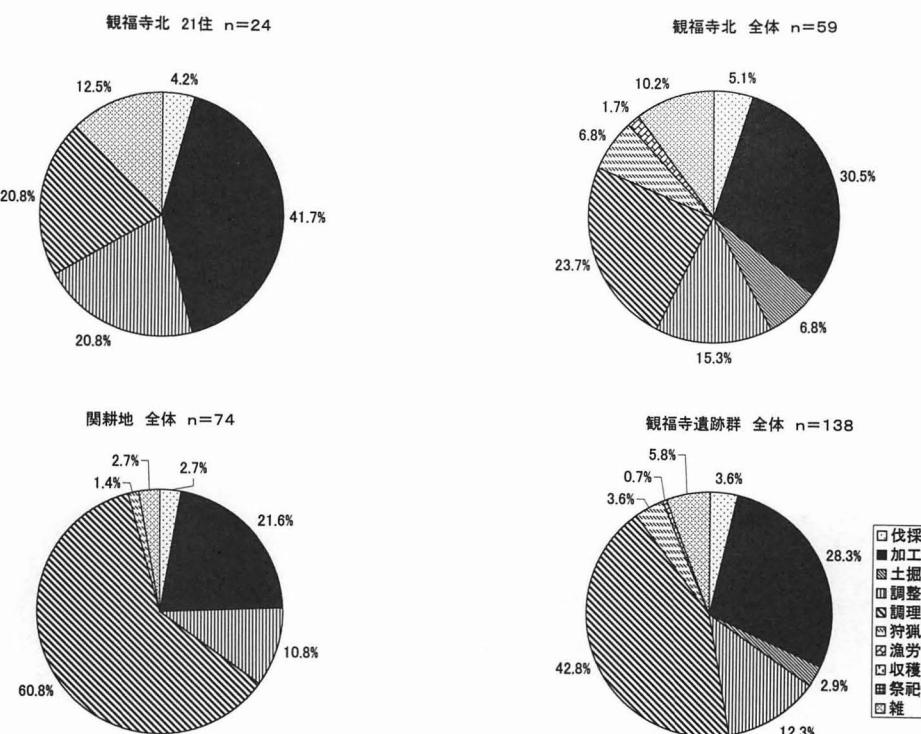
第6図 折本西原遺跡の石器組成

みであるため、ここで住居址単位の石器組成について細かい検討はなし得ないが、加工斧・調理具が組成の中で主要な位置を占めている点は遺跡全体のあり方と合致するものの必ずしも遺跡全体の組成が個々の住居址の組成に反映するわけではない。
 (新開)

(3) 観福寺遺跡群 横浜市

遺跡は横浜市緑区荏田に所在し、早渕川右岸の丘陵上に位置する弥生時代中期後葉の環濠集落であり、方形周溝墓も検出されている。本遺跡群は調査区分に、観福寺裏遺跡、観福寺北遺跡、関耕地遺跡の3冊の調査報告書が刊行されているが、立地およびその内容から同一遺跡と考えられる。ここでは各遺跡名を調査区を表すものととらえ、様相を把握してみたい。各遺跡毎の様相は以下の通りである。

- ・観福寺裏遺跡 5点あり、全て加工斧である。これは検出遺構の少なさに起因するものと考えられる。
- ・観福寺北遺跡 分類基準における収穫具・祭祀具は出土していないが、他の器種はいずれも出土している。内訳は加工斧(30.5%・42点)・調理具(23.7%・33点)・調整具(15.3%・21点)の3器種が主体を占め、加工斧が最も多い。他の器種は僅少である。次に多数の石器を出土した21号住居址を見てみると、遺跡全体の様相と同様に、加工斧(41.7%・10点)・調理具(20.8%・5点)・調整具(20.8%・5点)の3器種が主体を占め、これに雑石器(15.5%・4点)、伐採斧(4.2%・1点)が続く。
- ・関耕地遺跡 分類基準における土掘具・漁撈具・収穫具・祭祀具は出土していない。加工斧・調理具・調整具の3器種が主体をなすことは観福寺北遺跡と変わらないが、この中でも調理具が60.8%(45点)と圧倒的多数を占め、これに加工斧(21.6%・16点)、調整具(10.8%・8点)が続く。この他に伐採斧・狩猟具・雑石器が出土しているが数は僅少である。



第7図 観福寺遺跡群の石器組成

④遺跡群全体 調理具が42.8%（59点）と最も多い。これは関耕地遺跡において多数の調理具が出土していることに起因する。調理具の後には加工斧（28.3%・39点）、調整具（12.3%・17点）が続き、他の伐採斧（3.6%・5点）・土掘具（2.9%・4点）・狩猟具（3.6%・5点）・雑石器（5.8%・8点）は僅少である。

以上をまとめてみると、観福寺裏遺跡を除いた各遺跡あるいは遺構において最も多いたる器種には違いがあるが、加工斧・調整具・調理具の3器種が主体を占めることに違いはなく、伐採斧・土掘具・狩猟具・漁撈具・雑石器は僅少であり、収穫具・祭祀具は出土していない。これは神奈川県内の様相（第1図）とほぼ合致する。関耕地遺跡においては調理具が圧倒的多数を占めており、これは駿河の様相（第3図）と近似し、奇異な印象を受ける。しかしこの要因を安易に論じることはできない。（村上）

（4）佐原泉遺跡 横須賀市

遺跡全体における組成は、伐採斧2.6%（1点）、加工斧21.1%（8点）、調整具60.5%（23点）、狩猟具・漁撈具各2.6%（各1点）、調理具10.5%（4点）である。神奈川県総計の組成と比較した場合、伐採斧（神奈川県総計4.2%）・加工斧（同29.3%）ではやや低く、調整具（同21.6%）が飛び抜けて高い割合を占める。また、調理具（同26.3%）が低く、漁撈具（同5.0%）・雑石器（同8.9%）がやや低率である点も特徴としてあげられよう。また、最も多くの石器が出土した第32B号住居址（総計17点）においても、調整具が多く（47.1%・8点）を占めている。

佐原泉遺跡における石器組成に共通する遺跡として、同じ三浦市に所在する赤坂遺跡がある。両遺跡には共通して、伐採斧・加工斧・狩猟具・漁撈具の割合が低く、調整具の割合が高いという特徴が認められる。このような特徴は、この地域特有の石器組成といえよう。



弥生図 8

第8図 佐原泉遺跡の石器組成

（5）赤坂遺跡 三浦市

遺跡全体における組成は、伐採斧3.4%（4点）、加工斧20.3%（24点）、調整具42.4%（50点）、雑石器2.5%（3点）、調理具31.4%（37点）である。神奈川県総計における組成と比較した場合、伐採斧・加工斧・雑石器ともやや低く、調整具・調理具の割合が高い。

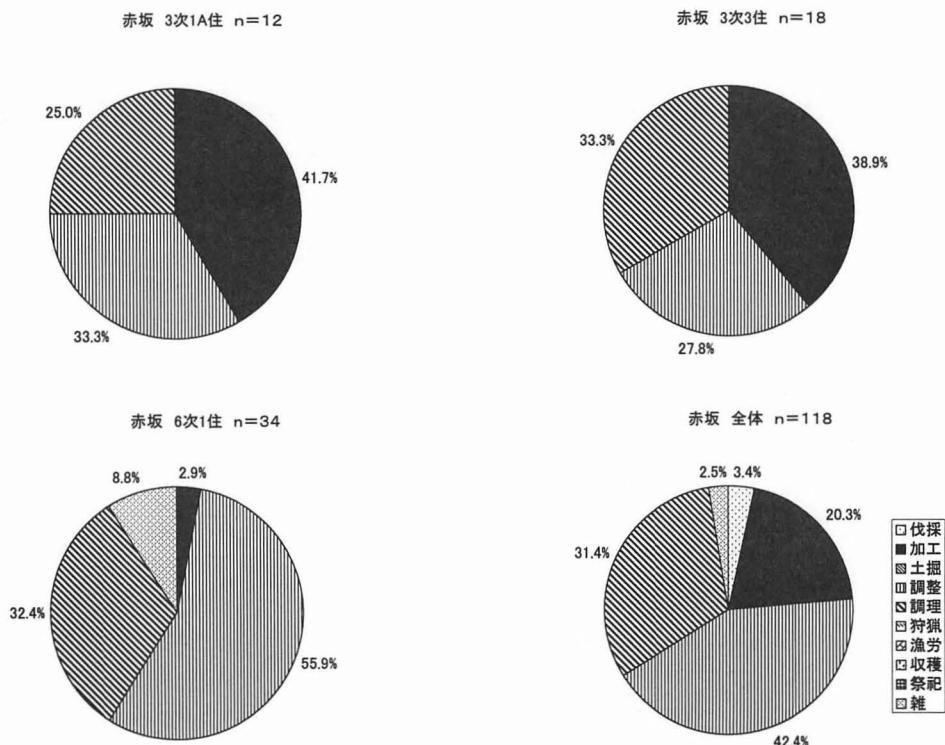
11点を超える石器が出土した住居址（3次1A住・3次3住・6次1住）を見ると、加工斧に大きなばら

つきが認められるが、本遺跡の特徴である調整具はいずれも高率（33.3%・27.8%・61.3%）である。

先に述べたように、佐原泉遺跡と赤坂遺跡には共通点が多い。伐採斧の割合がやや低く、加工斧・狩猟具・漁撈具が少ない。そして、最大の特徴となる調整具の占める割合が高い。このような共通点は、他の神奈川県内主要遺跡で見ることができず、この地域に特有の事象といえる。伐採斧・加工斧等が少なく、道具を加工する道具である調整具の割合が高いということはいかなることを示しているのか、現段階としては不明といわざるを得ない。

さらに組成の類似した周辺の遺跡として、調整具がやや多く、狩猟具・漁撈具・雑石器が少ないという点で大塚遺跡があげられ、加工斧が少ないという点で関耕地遺跡・三ツ俣遺跡があげられる。大塚遺跡・関耕地遺跡とも、佐原泉遺跡・赤坂遺跡に隣接する地域に所在する遺跡であり、何らかの関連性が予想される。

(阿部)

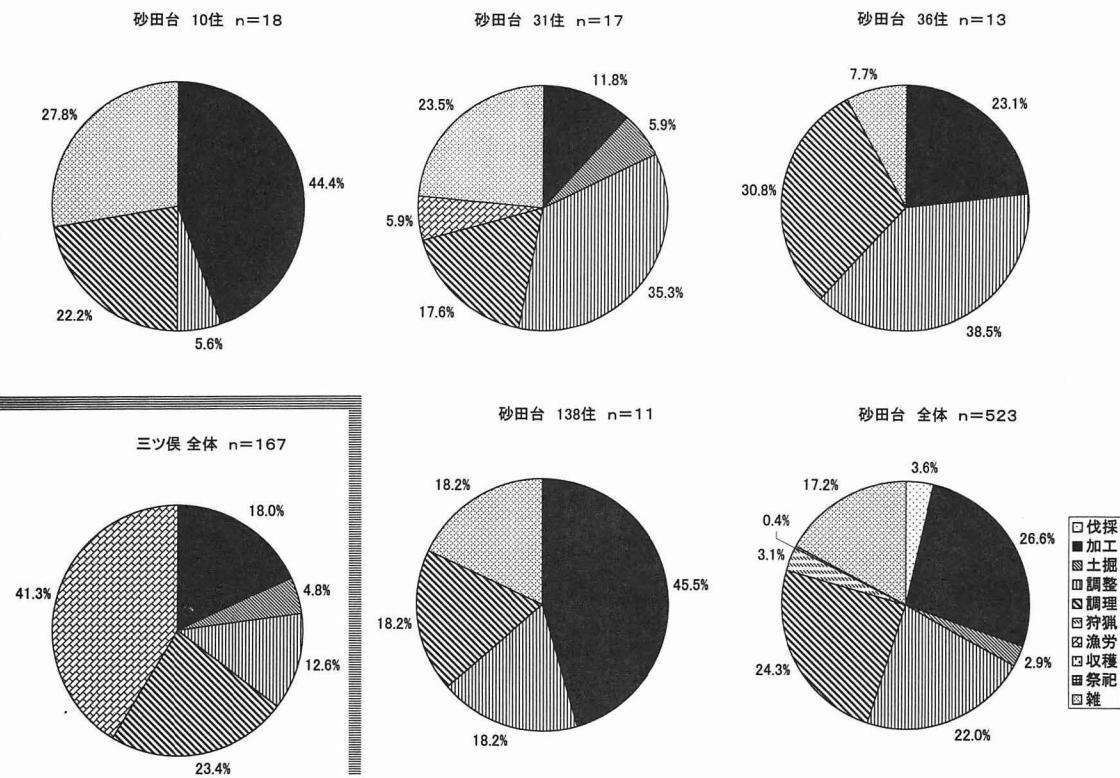


第9図 赤坂遺跡の石器組成

(6) 砂田台遺跡 秦野市

砂田台遺跡は遺跡全体で見ると、加工斧が26.6%（139点）、調整具が22.0%（115点）、調理具が24.3%（127点）を占め、これだけで全体の70%以上を占める。残りは17.2%を雑石器が占め（90点）、伐採具・土掘具・狩猟具が数%ずつである。

これを今回抽出した住居址ごとに見ると、調理具の占める割合は17.6%～30.8%ではほぼ一定の割合を保っている。しかし、加工斧と調整具については占有率にかなりのばらつきが見られる。10号住居址では加工斧が44.4%（8点）を占める一方、調整具は5.6%（1点）である。138号住居址も加工斧が45.5%（5点）を占めていて、残りは調整具・調理具・雑石器が1/3ずつを占める。31号住居址と36号住居址では調整具がそ



第11図 三ツ俣遺跡の石器組成

第10図 砂田台遺跡の石器組成

それぞれ35.3%（5点）・38.5%（6点）を占めている。このように、この二つの器種については、占有率の突出する遺構の存在が見られる。

伐採斧・土掘具・狩猟具それに漁撈具の占有率は極めて低く、出土する遺構も限られており、汎遺跡的に用いられたものととらえることはできない。

以上の点から、個別の遺構については占有率データにはらつきがあるが、遺跡全体では神奈川県の総計にほぼ類似した占有比率であるといえよう。

(7) 三ツ俣遺跡 小田原市

三ツ俣遺跡は11点以上出土する住居址はないため、遺跡全体のデータで検討を行った。加工斧・調整具・調理具がそれぞれ18.0%（30点）・12.6%（21点）・23.4%（39点）出土している。調理具については神奈川県の総計や主要遺跡の平均値とほぼ同率であるが、加工斧・調整具は平均値よりもやや低くなっている。

この遺跡を特徴づけるものは漁撈具の突出（41.3%・69点）で、主体となる石器となっている。それに比べて伐採斧は出土しておらず、土掘具も極めてわずかである。これは神奈川県の総計や、主要遺跡のデータから見ても特異なもので、沿岸地域に存在するという立地面からきた特徴であるととらえられる。

（櫻井）

4. まとめ

今回は前回までの成果を受け、IV期に限定して近接地域をも射程に入れ、その石器組成について考えてみた。第1図からは上総=加工斧突出型、駿河=調理具突出型、遠江=伐採斧突出型、中・北信=狩猟具突出型、南信=狩猟具+土掘具突出型という類型を想定できた。また駿河・上総は漁撈具が一定程度組成する地域とも読める。これに対して神奈川県はバランスがとれているというか特徴があまりないように見受けられる。しかし各地域の状況が、ある意味で見せかけとも言えるのは2節で論じられたとおりである。遺跡毎に強烈な差異が存在している。また3節で述べられたように、神奈川県もそれと同様にかなり特徴的な遺跡も見受けられ、さらに住居址単位で見てみると組成比にかなりのばらつきが看取される。これはどの地域にもあてはまる現象である。ここで取上げた遺跡で石器製作が行なわれた遺跡は多くはない。ほとんどが消費の結果廃棄した資料が中心になる。石器は土器とは異なり、住居址によって占有の度合いが大きく異なることと併せて考えれば、特定の住居の機能・性格を石器組成から類推することが可能となろう。ここから先は応用的研究の領域となり、その解釈は共同作業にはなじまず、踏込むことはここでは避ける。

分析を重ねてきて問題点をあげれば分類基準についてである。調理具としたものなかにはハンマーストーンなどの調整具が混入している恐れがある。先学諸氏との解釈の差異はここに根差していると言えよう。器種と石材との関連も極めて重要な課題であるが、保管資料が偏っており、全点の実見が困難なことにより諦めた。また使用痕にまで考究できず用途・機能の推定まで手が届かなかったのは遺憾である。

今後の課題としては前号のまとめで谷口が列記したことに加え上記のことも含め多々ある。今年度のはじめに弥生石器の基礎的研究3箇年目のまとめとしてどのようなテーマに取り組もうとしたか列挙しておく。

1. 器種毎の再分類と編年 分類階層は現状でよいのか再考し、中分類・細分類・法量 にもとづく大中小の分類を行ない、細分ののち、さらに細やかな石器の変遷を追う。
2. 器種組成の問題 遺跡の性格と器種組成の関係について把握するために遺跡ごとの組成を調査する。
3. 機能・用途論 機能類推を行なう。石庖丁の代替器種は何かとか、扁平片刃石斧の用途は何だったのか等。
4. 文献研究 弥生石器研究史を著述する。また研究史を踏まえた今後の展望はどうなのか。
5. 補遺に徹する 補遺を含めた神奈川における弥生石器分類表を提示する。

5を除きいずれも大きな課題であるが、我々は1年という短い期間で共同作業になじむものとして「2. 器種組成の問題」を選択し、その上で範囲を近接諸地域にまで広げてみたということである。

神奈川県における弥生石器の大きな趨勢はなんとか把握できたのではないかと自負するものである。これにて石器についての集成・分析作業は一旦終結する。次年度はまた別の視点から神奈川県の弥生文化に論攷を加えていきたい。

(伊丹)

補 記

長野県松原遺跡については長野市埋蔵文化財センターによる既報告資料に拠った。遺跡の中心部を調査した長野県埋蔵文化財センターによる最終報告書が近刊であり、膨大な伐採斧をはじめ多種多様な石器が出土していることを担当者の青木一男・町田勝則両氏から教示された。この成果が反映されれば北信の評価も変更の余地があることをお断りしておきたい。

文 獻

データ元遺跡文献

<県 外>

城の腰遺跡

菊池真太郎・谷 旬・矢戸三男 1979 『千葉市城の腰遺跡』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告3 (千葉市大宮地区) 日本道路公団東京第一建設局 千葉県文化財センター

大厩遺跡

三森俊彦・阪田正一 1974 『市原市大厩遺跡』千葉県開発公社 千葉県都市公社

菊間遺跡

斎木 勝・種田斉吾・菊池真太郎 1974 『市原市菊間遺跡』千葉県都市部 千葉県都市公社

美生遺跡

實川 理・浜崎雅仁 1992 『美生遺跡群I 第1地点』君津都市文化財センター発掘調査報告書第71集

角江遺跡

佐野五十三・中川律子・青木 修・中嶋郁夫 1996 『角江遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第69集
静岡県埋蔵文化財調査研究所

上藪田川の丁遺跡

鈴木隆夫・池田将男 1981 『上藪田モミダ遺跡 上藪田川の丁遺跡 鳥内遺跡』国道1号藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 藤枝市教育委員会

清水遺跡

鈴木隆夫・椿原靖弘 1992 『清水遺跡』藤枝市教育委員会

有東遺跡

菊田 宗・天石夏実 1997 『有東遺跡 第14次調査報告書』静岡市埋蔵文化財調査報告43 静岡市教育委員会

矢崎遺跡

中野國雄・秋本真澄 1998 「矢崎遺跡」『清水町史 資料編II(考古)』清水町史編さん委員会

雄鹿塚遺跡

鈴木裕篤 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第46集 沼津市教育委員会

恒川遺跡

小林正春・桜井弘人・佐々木嘉和・山下誠一 1986 『恒川遺跡群 遺物編』飯田市教育委員会

北原遺跡

神村 透 1972 『北原遺跡』高森町教育委員会

県町遺跡

直井雅尚・関沢 聰 1990 『松本市県町遺跡』松本市文化財調査報告No.82 松本市教育委員会

松原遺跡

飯島哲也・寺島孝典・中殿章子 1991 『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集 長野市埋蔵文化財センター

矢口忠良 1993 『松原遺跡II』長野市の埋蔵文化財第51集 長野市埋蔵文化財センター

飯島哲也・寺島孝典・中殿章子 1993 『松原遺跡III』長野市の埋蔵文化財第58集 長野市埋蔵文化財センター

<県 内>

大塚遺跡

岡本 勇・小宮恒雄・坂上克弘・武井則道 1994 『大塚遺跡II』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XV 横浜市埋蔵文化財センター

折本西原遺跡

石井 寛 1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会

岡田威夫・水澤裕子・御堂島正・松本 完 1988 『折本西原遺跡 I』折本西原遺跡調査団

觀福寺裏遺跡

北原實徳・斎藤啓子 1986 『神奈川県横浜市觀福寺裏遺跡』日本窯業史研究所報告第18冊

觀福寺北遺跡

平子順一・鹿島保宏 1989 『觀福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会

閑耕地遺跡

田村良照 1997 『横浜市觀福寺北遺跡群 閑耕地遺跡発掘調査報告書』閑耕地遺跡発掘調査団

佐原泉遺跡

中村 勉 1989 『佐原泉遺跡』泉遺跡調査団

赤坂遺跡

岡本 勇・川上久夫 1977 『三浦市赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団

中村 勉・諸橋千鶴子 1992 『赤坂遺跡 第3次調査地点の報告』赤坂遺跡調査団

中村 勉・諸橋千鶴子 1994 『赤坂遺跡 第2次・第4次・第5次・第6次・第7次調査地点の報告』三浦市埋蔵文化財調査報告書第3集

砂田台遺跡

宍戸信悟・上本進二 1989 『砂田台遺跡 I』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

宍戸信悟・谷口 肇 1991 『砂田台遺跡 II』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

三ツ俣遺跡

市川正史・伊丹 徹 1986 『三ツ俣遺跡(第1分冊)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13

近藤英夫・立花 実 1991 『国府津三ツ俣遺跡』国府津三ツ俣遺跡調査団

参考引用文献

安藤広道 1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第2号

安藤広道 1998 「南関東地方における石製利器の終焉をめぐって」『考古学ジャーナル』No.433

石川日出志 1994 「東日本の大陸系磨製石斧—木工具と穂摘み具—」『考古学研究』第41巻第2号

久保勝正 1993 「松原遺跡の石器群の様相」『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集 長野市埋蔵文化財センター

瀬宜田佳男 1997 「石から鉄へ—鉄器化の評価をめぐって—」『東日本における鉄器文化の需要と展開』
第4回鉄器文化研究集会発表要旨集

平野吾郎 1986 「東海地方における弥生時代の石器について」『研究紀要』I 静岡県埋蔵文化財調査研究所

弥生時代研究プロジェクトチーム1997・98 「弥生石器の基礎的研究」(1)・(2)『研究紀要 かながわの考古学』3・4
神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団

横穴墓の研究（6）

－形態・構造面からの検討を中心に－

古墳時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

前回までの（1）～（5）の検討では、横穴墓の検討の基本的な視点として、横穴墓の地域的特性を示す特徴的な墓制として立体的な構造面からとらえることを目標とした。そのため、横穴墓の構造を基本的に規定する羨道から玄室床面にかけての平面形態をI（台形）、II（方形）、III（撥形）、IV（不整形・小形）に区別して全体の大分類とし、構造の立体的な特徴を表す主軸方向の断面（縦断面A～F）、主軸に直行する断面（横断面a～d）、および造り付けによる埋葬施設（付帯施設）の3つの構造要素を組み合わせることで、多様なあり方を示す横穴墓の構造の個々の特徴と相互の比較対照のためのより客観的な基準とする分析視点をもって進めて進めてきた。

こうした分析視点をもとに、横穴墓から出土した土器を時間軸の一基準として、検討可能な神奈川県内で調査された711例について、平面形態の大分類毎に年度にわたって構造の特徴とその年代的なあり方を含めて検討を加えた。紙数の関係もあるが、それぞれの大分類毎の検討では分類内での特徴、構造の年代を含めた傾向性について費やし、分類間の関係や構造上での相関関係、出現および盛行などの本質的な問題についてはほとんどふれることができなかった。例えば、I類の中での方形に近い台形、撥形に近い長台形などの中間的形態分類の相互の関連や出現時期、盛行などの変遷についていかに考えればよいのかという、本質的な問題点の解明に関わる部分については、十分に意が尽くせたとは言い難い状態である。

そこで、今回は本テーマのまとめとして（2）～（5）を通して大分類毎の形態のあり方の検討結果を叩台として、形態相互の時間的な消長を含めた関連性や傾向性、神奈川県内の横穴墓の形態の特徴について検討を加えていくことにしたい。

（長谷川）

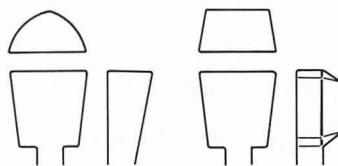
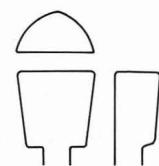
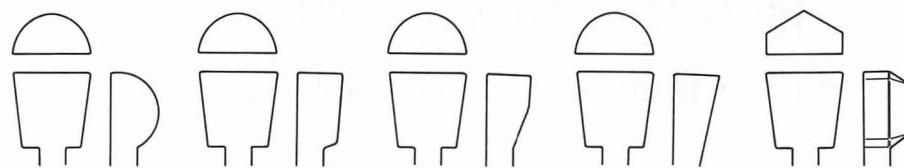
2. 類型の概念規定

I～IV類の検討で使用したすべての形態は、視覚的理の補助として第1～5図に提示した。平面形、縦断面形、横断面形をセットとして掲載し、付帯施設はこれらに組み合わされることとなる。挿図は平面形態を基本とし、縦断面形を縦列で揃え、横断面形は上部よりa～dの順送りとし、各図には分類名を提示した。

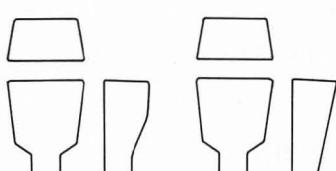
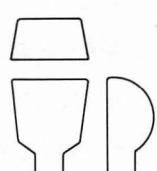
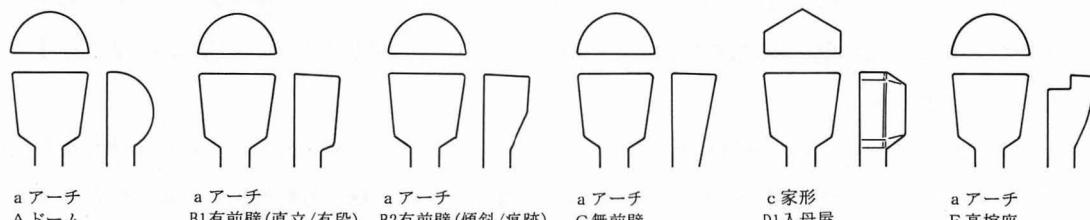
先に示した分類の概要は以下の通りである。平面形はI類が台形、II類は方形で、それぞれ短・長でa・bと区別を行い、棺室構造としてcを設定し、前壁の有無及び角度からも1～3と細分した。III類は撥形で、形態によりa～cに、付帯施設の有無からはA・Bと細分し、更にその構造から1～3と分類した。IV類は不整形で、前壁の有無からa・b、更に小型をcとした。縦断面形は、A～Dを天井形で、E・Fを埋葬施設の形態を主眼に分類している。Aはドーム形、Bを有前壁とし、更に前壁でB1は直立／有段、B2は傾斜／痕跡とした。Cは無前壁、Dは家形とし、D1で入母屋形、D2で切妻形とした。Eは高棺座形、Fは棺室形である。横断面形はaアーチ形、b尖頭アーチ形、c家形、d平天井形とし四項目の細分をしている。

（柏木）

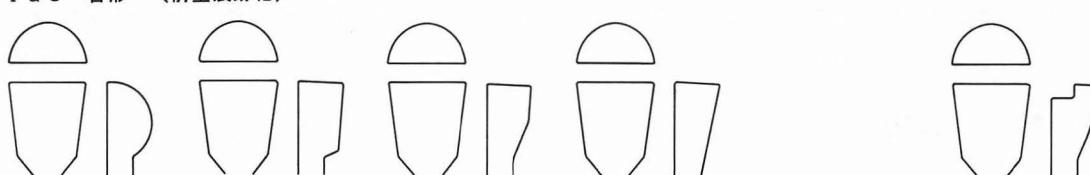
I a 1 台形 (前壁角110°未満)

d 平天井
D1 入母屋

I a 2 台形 (前壁角110°以上)

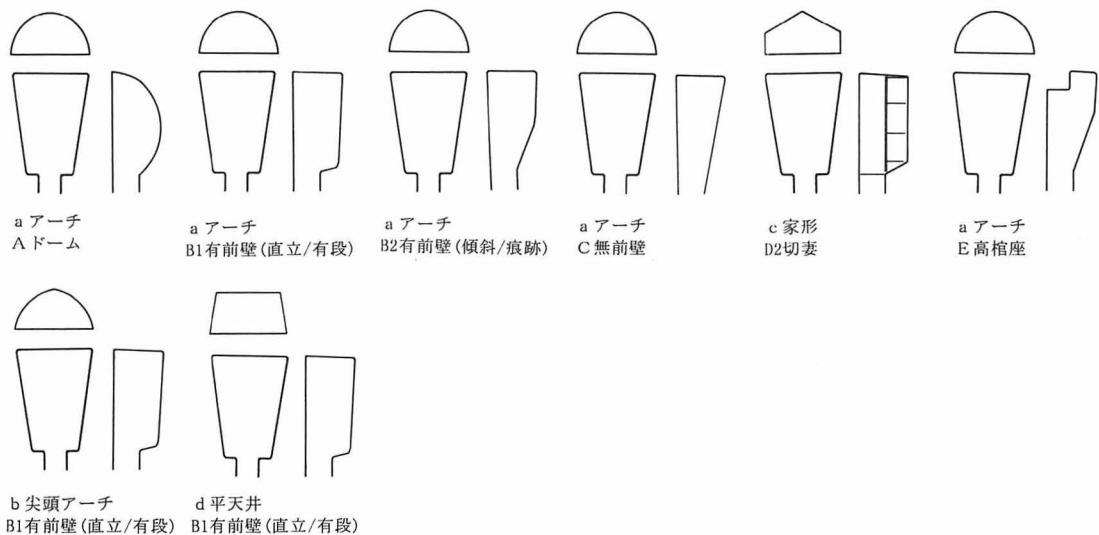


I a 3 台形 (前壁痕跡化)

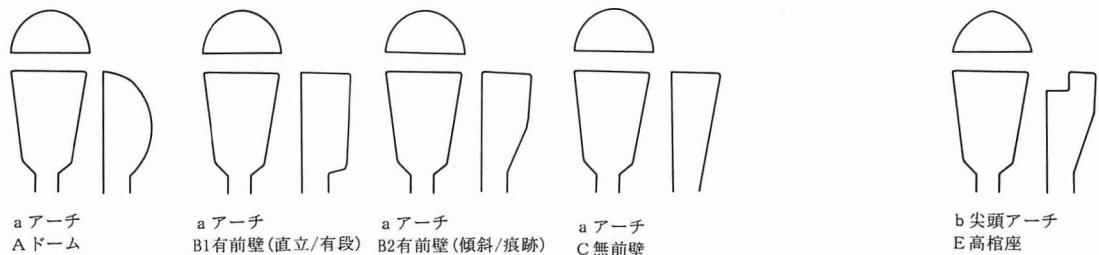


第1図 集成横穴墓の形態 その1

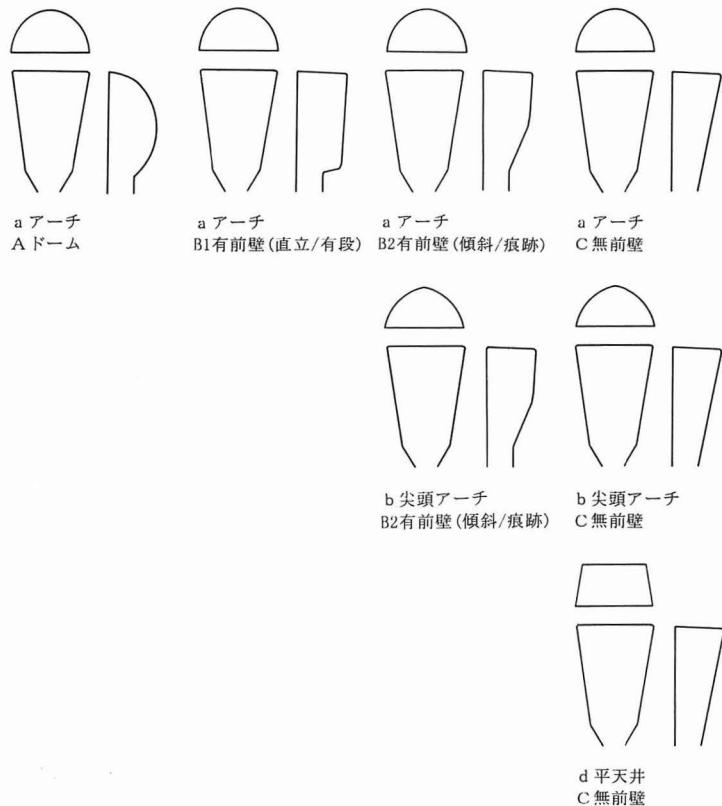
I b 1 長台形 (前壁角110°未満)



I b 2 長台形 (前壁角110°以上)

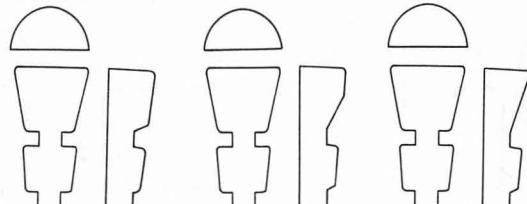


I b 3 長台形 (前壁痕跡化)

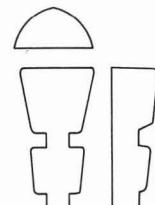


第2図 集成横穴墓の形態 その2

I c 1 複室構造 (前壁角110°未満)

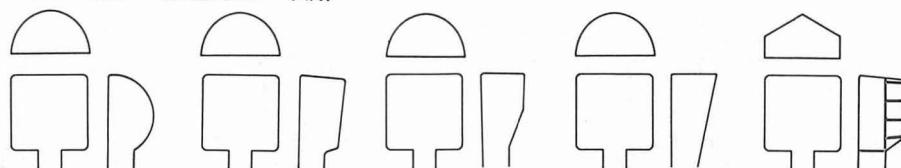


a アーチ
B1有前壁(直立/有段) B2有前壁(傾斜/痕跡) C無前壁

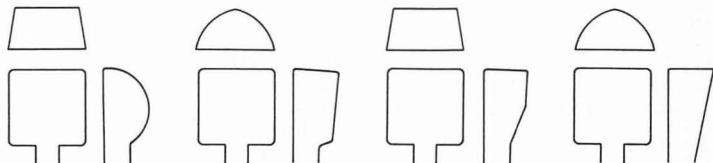


b 尖頭アーチ
B1有前壁(直立/有段)

II a 1 方形 (前壁角110°未満)

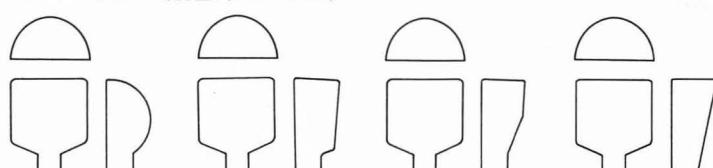


a アーチ
A ドーム
a アーチ
B1有前壁(直立/有段)
a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡)
a アーチ
C 無前壁
c 家形
D2切妻



d 平天井
A ドーム
b 尖頭アーチ
B1有前壁(直立/有段)
d 平天井
B2有前壁(傾斜/痕跡)
a 尖頭アーチ
C 無前壁

II a 2 方形 (前壁角110°以上)



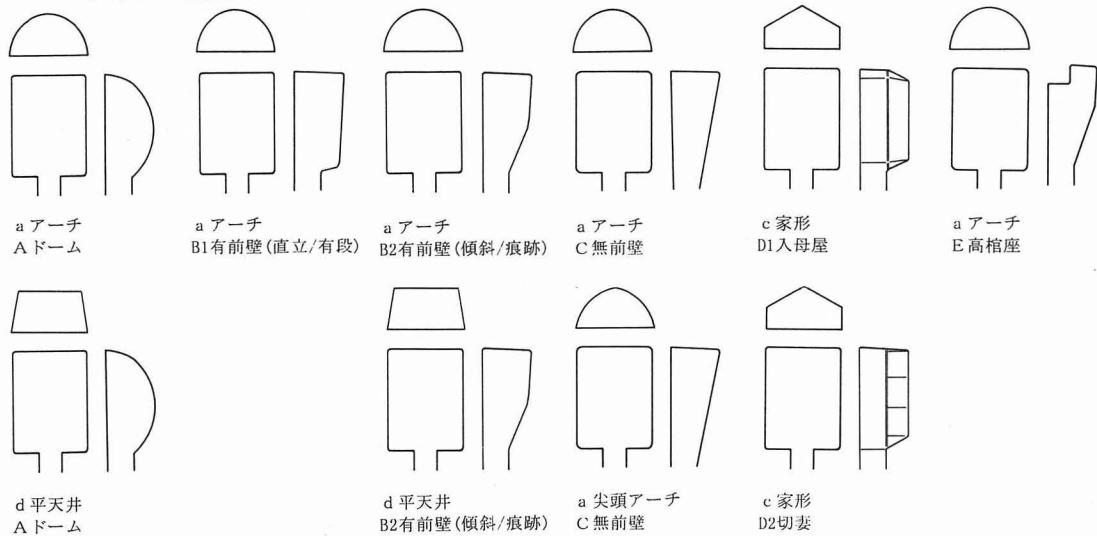
a アーチ
A ドーム
a アーチ
B1有前壁(直立/有段)
a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡)
a アーチ
C 無前壁



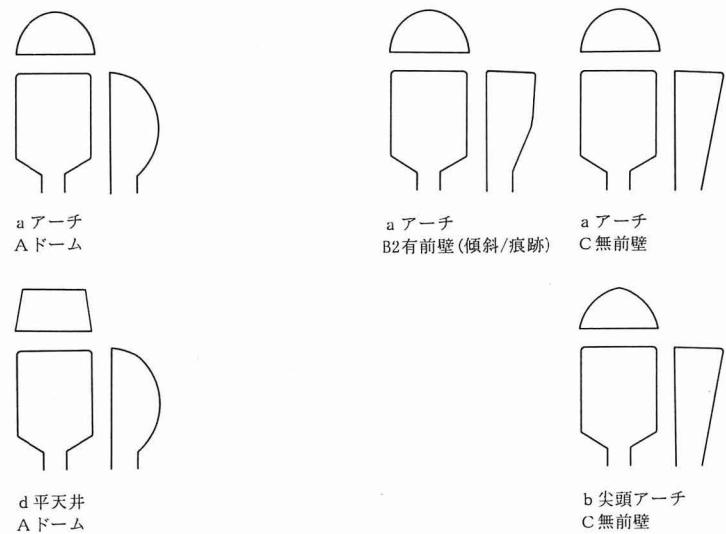
d 平天井
A ドーム
d 平天井
C 無前壁

第3図 集成横穴墓の形態 その3

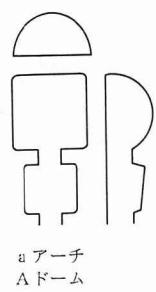
II b 1 長方形 (前壁角110° 未満)



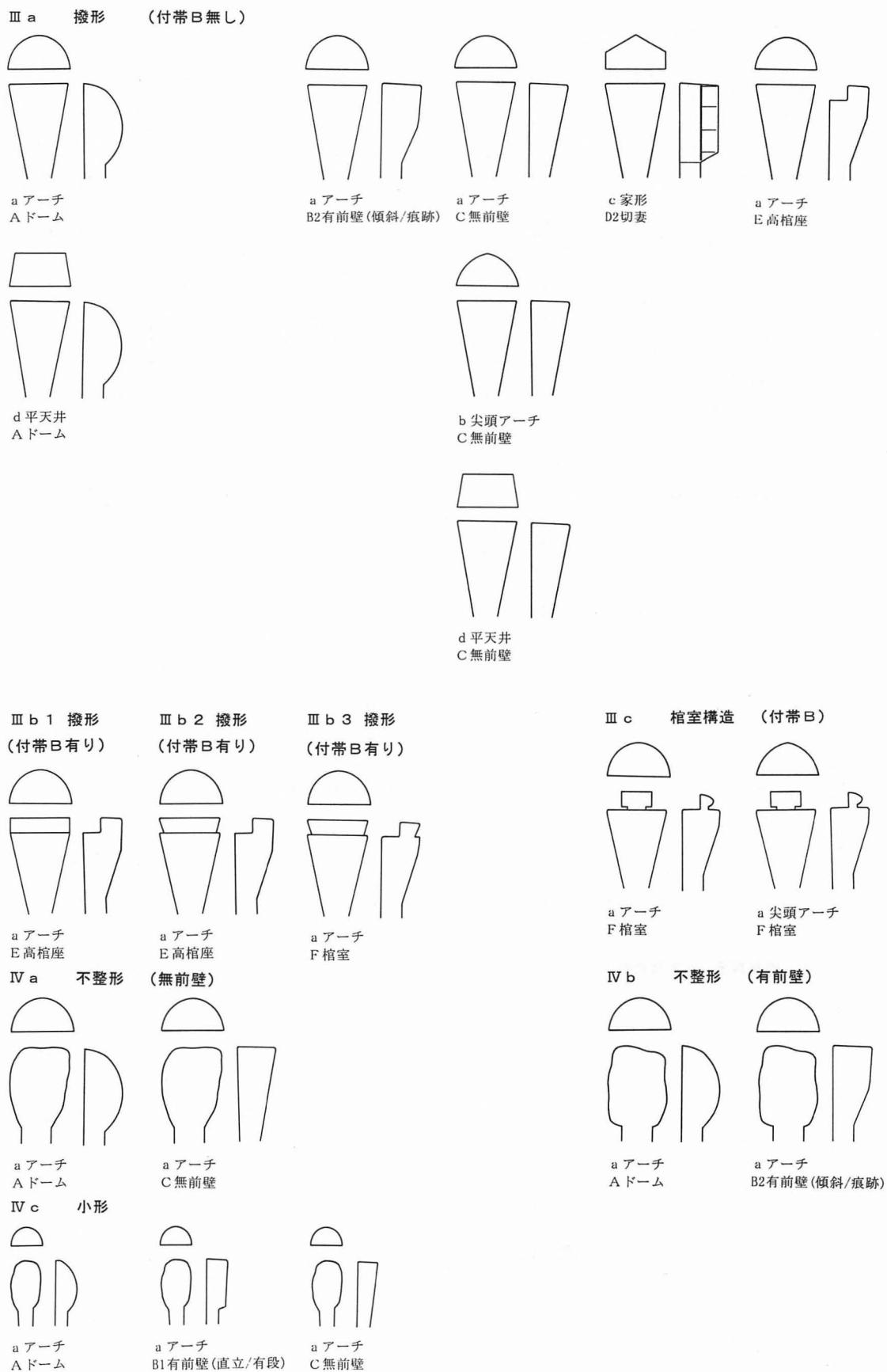
II b 2 長方形 (前壁角110° 以上)



II c 1 複室構造 (前壁角110° 未満)



第4図 集成横穴墓の形態 その4



第5図 集成横穴墓の形態 その5

3. 横穴墓出土土器からみた形態・構造面の変遷

横穴墓の形態と出土土器については、(1)で年代の指標となる須恵器の変遷について基準を示し、(2)～(5)の検討でその基準に基づくI～IV類の各類別から出土した土器の年代について検討を加え、各形態の年代的な消長、特徴についてふれてきた。各形態の横穴墓から出土する資料的な性格として、横穴墓のような追葬を前提する墳墓では構築当初から少なくとも1回以上の葬送が行われ、出土する土師器、須恵器が必ずしも構築当初の年代を示すものではなく、当初の副葬品が追葬時にかたづけられていることが前提として考えられる。そのため、横穴墓から出土した1点の土器をもって、その形態の構築年代を決定することは、問題がある。また、出土した土器についても、全てにわたって実見にもとづく観察ができないために図面上で判断せざるえない状況もある。同様に、横穴墓の形態分類の中でも、中間的形態の所属をめぐっては数値化による基準によったが、必ずしも該当分類に的確に対応するかの保証はないという可能性もある。いずれにしても、形態の特徴と変遷の方向性を踏まえた上で相互比較をせずに、出土土器だけで形態の年代的な消長を決定しまうことには大きな誤認を生ずる可能性がある。

こうした資料的な認識上の特徴から、まとめとして横穴墓の各形態の消長の相互比較をふまえての検討を試みるために、いくぶんかの資料の操作を加える必要がある。その操作としては、各形態からの出土土器の年代が新旧全体にわたり、中間に空白期間がある場合は、古い段階の年代幅をとる。形態相互の比較をする上で出土資料が少なく、明らかに年代的な齟齬ができる場合は、土器からの検討は保留とする。こうした前提で、各形態と出土土器の相互関連をみていくと(第1・2表)、以下のとおりの形態変遷の傾向性を指摘することができる。

1. 平面形での総体的なあり方をみた場合、台形(I類)、方形(II類)形態が概して他の形態よりも先行して出現し、その後に撥形(III類)形態が7世紀中葉以降に各種の形態が構築され始め、さらに7世紀第3四半期頃から不整形、その他(IV類)が出現する。
2. 台形(I類)、方形(II類)を相互比較すると、台形(I類)のうち奥壁と側壁の長さが均等になる形態(Ia1～3類)、方形(II類)の中でも長方形形態(IIb1類)で前壁を有するタイプが6世紀後半にかかる年代から出現し、追葬による新しい年代の土器を除いて考えると7世紀中葉前後まで構築された可能性がある。
3. 撥形(III類)の中でも高棺座(IIIb・E類)、棺室形(IIIc・F類)は7世紀中葉以降後半にかけて盛行する傾向がうかがえ、典型的な撥形(IIIa類)は7世紀中葉前後から前壁の有無に関係なく出現し、いずれも後半まで構築されている。しかし、IIIa類の場合、内部施設との関連でみると造付ないしは組み合せ式の石棺(4・5類)を有するものは、先の方形、台形形態の横穴墓の出現期に近い時期にみられ、撥形の一部の形態は、比較的早い段階に構築されていた可能性がある。
4. 不整形、その他(IV類)は、7世紀第3四半期から8世紀前葉まで利用され続けている。
5. こうした形態の総体的な変遷の傾向性を考えられるが、必ずしも断面形での退化の方向性(縦断面形での前壁の有無、横断面形での家形、平天井形からアーチ形へ)とは合致しないこと、平面形は相対的に新しくみられるが、内部施設との関連では古くなるものがあり、神奈川県全体でみた場合は、総体的な形態の変化の方向性とともに、出現期については多様なあり方があったのではないかという予想がされる。
6. このため、総体的な変化を踏まえて県内の地域毎の状況について検証を進めていく必要がある。(長谷川)

第1表 平面形・縦断面形の各時間幅

平面	概念図	立面	概念図	年代								
				580	600	645	660	671	681	700	715	725
I a1			B1									
			B2									
			C									
I a2			B1									
			B2									
			C									
I a3			A									
			B1									
			B2									
I b1			E									
			B2									
			C									
I b2			B1									
			B2									
			C									
I b3			B1									
			B2									
			C									
II a2			A									
II b1			A									
			B1									
			B2									
			C									
II b2			A									
III a			A									
			B2									
			C									
III b1			E									
III b2			E									
III c			F									
IV												

第2表 III a 類付帶施設の各時間幅

平面	概念図	立面	概念図	年代								
				580	600	645	660	671	681	700	715	725
III a			1a-1									
			2a-1									
			2a-2									
			3									
			4b									
			5a									
			5b									
			6									

4. I ~ IV類横穴墓の数値的検討

数値的な側面からの検討は、前回までの各表の最頻値を用い、全体での傾向を把握していくこととする。基本的に各類における数量の多少により規制されるものであるが、これは最も標準的な各類の規模で比較することを表し、それにより全体的な様相が把握されるものと考える。しかし、前回までの検討において提示した事象は、各類の横穴墓数などとも相俟って、各類の間において比較した結果をすべて提示できるものとはなり得なかった。そこで、各類における詳細は前号までに譲ることとし、以下数値的検討により判明した総体的な見解を提示する。

玄室面積と平面形態

傾向として玄室の規模では、前壁有りから前壁痕跡化へと小型化し、無前壁に至り大型化する傾向が看取されている（第6図）。I類（台形）・II類（方形）のa・b類（短・長）の関係は、奥壁規模の相違は認められないことから、b類でほとんど面積が大きくなっている、奥壁幅も相対的に規模に応じて変化していくことが看取されている。III類（撥形）においては、大半が玄室と羨道の区別が不明瞭なものであったことから、計測値D（側壁が最も狭まった部分）の位置を玄門として計測を実施している。III類のなかでも一部では框石などの存在が認められ、空間の分割が意図されているものもあるが、主体的な様相は呈していない。IV類（不整形）のなかで前壁の有無において分類したa・b類においては、該当横穴墓数が少ないものの、形態による面積の変動は認められていない。面積においては小型としたIVc類が、I～III類に存在する3m²未満のものよりも、更に小規模な一群として把握されている。

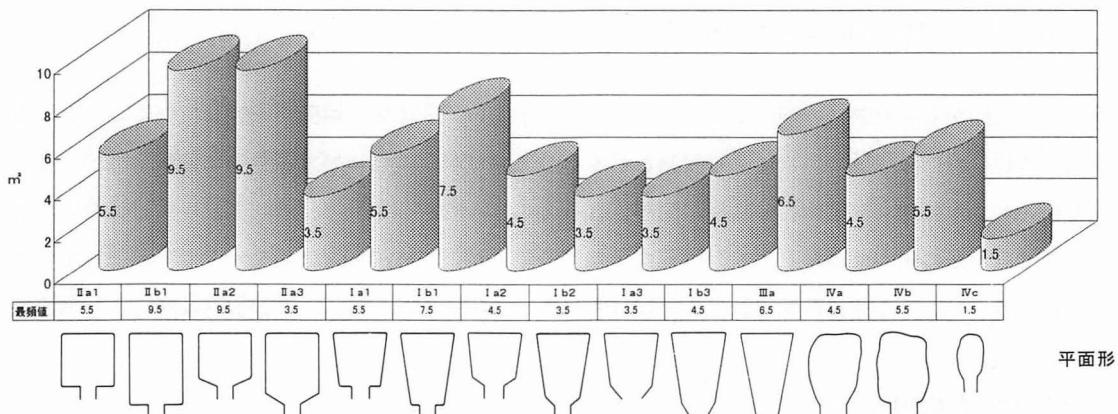
玄室面積と奥壁高　－縦断面・横断面の検討－

I～III類での面積と玄室高さの関係においては、最頻値が30～40%の範囲に集中し、基本的に形態が変化しても、奥壁がアーチ形をのものを中心としては、面積に占める玄室高さの「%」は変わらないものであった（第7図）。それは、玄室面積が小さくなれば、高さもそれに比例して低いものとなり、玄室面積が大きくなれば高さも比例して高くなる現象として捉えられる。しかし、前壁の存在が明瞭なものは、20%以下に最頻値の広がりを持ち、面積に比しての高さが比較的低いものとなっている。また、前壁の存在が不明瞭になるに従い高さの占める「%」は40%以上の最頻値を持ち、面積に比しての高さが高くなる傾向が把握された。IV類では玄室面積に比した玄室全高の「%」が、I～III類に比してIVa・b類で低く、IVc類で高いものとなっている。これは面積の規模に対して玄室高がIVa・b類で低く、IVc類で高くなるものとして把握される。高さの規模において小型化するIV類のなかでも、IVc類に限っては面積が狭いものの、高さでは他の類とさほど変わらないものとして捉えられる。

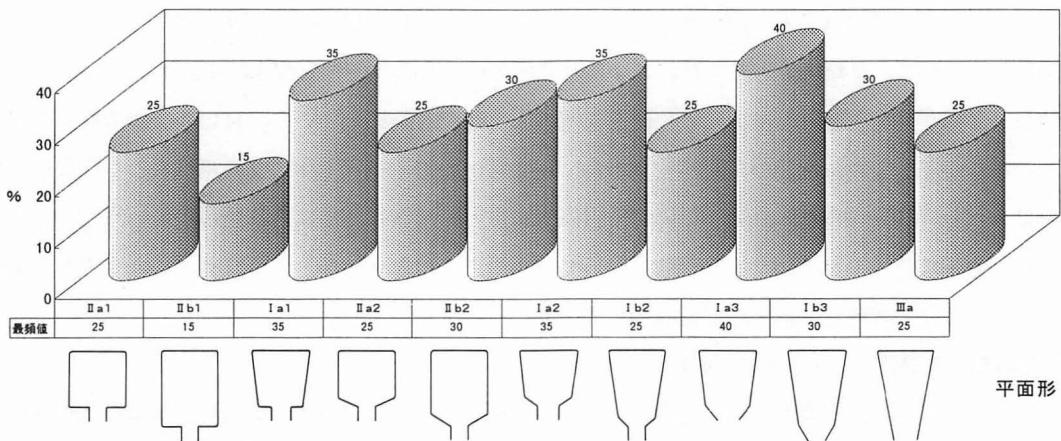
付帯施設　－棺座を中心として－

棺座長

I・II類では、玄室長に比した棺座長は、前壁を持つものにおいては20～70%と幅を持ち、前壁が不明瞭となるに至って棺座長の占める「%」が大きくなり、III類に近い様相を呈すこととなる。棺座の占める「%」の拡大が最も普遍化するのがそのIII類であり、なかでIIIa類における付帯施設Aは30～50%に集中し、かなり広い埋葬スペースを占めることとなる。IIIb・c類における付帯施設Bの長さは、1→2→3へ最頻値の「%」が大きくなり、僅かながら埋葬スペースの拡大として把握される。IV類では1基の存在が認められるのみであり、他の類との比較は行えなかった。



第6図 玄室面積の最頻値比較図



第7図 奥壁高／玄室面積の最頻値比較図

棺座高

前壁の明瞭な I b 1 類（長台形・前壁角110°未満）と、その他棺座長の検討において埋葬スペースの拡大が把握されたIII b・III c 類で、奥壁高に比した棺座は「%」で高いものが中心となる。他の類では低位なものが主体であり、5～10%の最頻値を持つものが大半を占めるものであった。III b・III c 類の付帯施設Bでは、1→2→3へ玄室高に占める棺座高の「%」が高くなり、III類のなかでもa類との相違は明らかなものである。他の類との比較における総体的な側面からみても、県内横穴墓のなかでは、付帯施設Bの玄室高に占める棺座の高さはかなり高い「%」として把握される。

棺座実数高

棺座はI・II類においては1～20cm台の低位なものが中心であり、I a 3 類（台形・前壁痕跡化）で一部高い棺座の存在も確認されている。なかでII類に関しては、造付石棺が他の類より比較的多く検出されており、高段で狭い面積のものが主体となる。棺座は低段で広い面積が主体となり、II類におけるところで両者は相反したものであった。III類はa類の付帯施設Aにおいて、I・II類と同様に低位なものが中心であり、数値的にも1～20cmのものが主体であった。III b 類の付帯施設Bでは、70cm以上の高いものが主体となり特徴的な様相を呈す。なかには180cm以上のものの存在も確認され、数値的な幅としてはかなりの広がりが把握される。形態的な特徴としても棺座高の変化は捉えることができ、これらのことからも高棺座は、付帯施設Bの敷設が一つの画期となることが想定される。

(柏木)

5. 数量的分析のまとめ

I類からIV類までの各類における数量的分析では、各平面形細分類の数量、平面形と縦断面形の組み合せの数量を提示し、各類型内での傾向把握と想定しうる横穴墓の変遷過程や問題点の抽出を行ってきた。個々の類型ごとのまとめについては、もう一度「横穴墓の研究(1)～(5)」を参考願うとして、ここでは各類型内のみでの数量的比較・検討では、明確にし得なかった点や課題とした点及び今までの分析の中で横穴墓全体を通してみても特徴的で、横穴墓の変遷の中で主要と思われる点について再度まとめを行いたい。

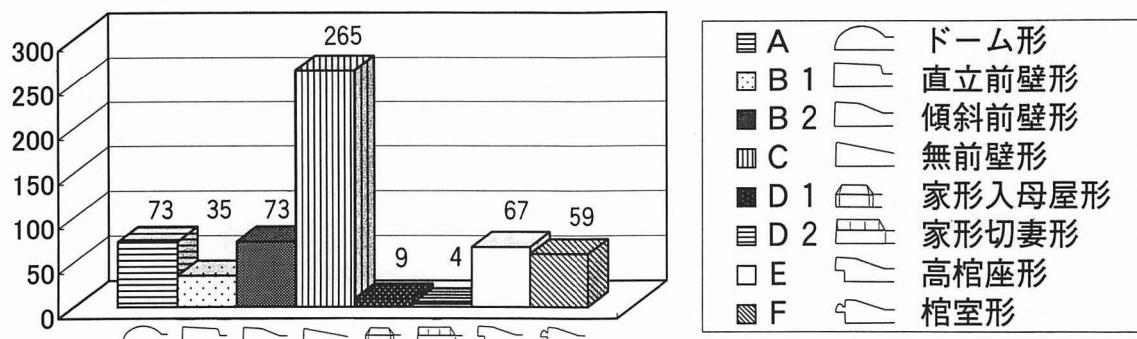
平面形態の分析

トータル的な数量的検討を行うにあたって、操作する資料（横穴墓）の整理を最初に行いたい。各類型の分析では、平面形の分析は平面形が判明しているものすべてを使用しており、その総数は711基である。一方、縦断面形の判明している横穴墓は合計581基である。前回までは、この両者の数字を分析内容によって使い分けてきたが、今回は全体の中で主要と思われる点を明確するという目的から、使い分けの煩雑さを避け、縦断面形も判明しているものの取り上げていく。なお、平面形態のみ判明のものと、縦断面形も判明している横穴墓の比については、第3表の通りである。数量比の誤差では、III類撥形の誤差が大きくなっているが、これはIII類の細分形態の中で平面形と縦断面形との組み合せが規制されている分類が存在するためであるが、その細分比差も最大1.8%であるため、検討にあたって統計学的にも多大な影響はないものと考えられる。以下要点をまとめていく。

- ①平面形の細分形態で最も多い横穴墓は、撥形の無施設（低棺座・有石棺含む）形・IIIa類で161基を数える。続いて台形の前壁痕跡化形・Ia3類（89基）、撥形棺室・IIIc類（59基）、撥形高棺座・IIib類（58基）が続き撥形の優位が明白で、撥形棺室・IIIc類、撥形高棺座・IIib類も一定量存在する結果となっている。
- ②方形・I類は前壁が痕跡化するにつれ（Ia1・Ib1→2→3）数が減少するが（第9・10図）、台形・II類は前壁痕跡化が進むにつれ増加する（第11図）。

平面形と縦断面形の組み合わせの分析

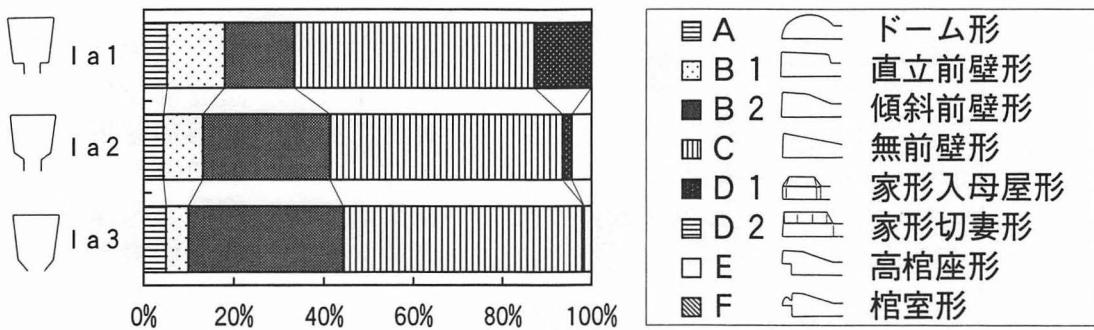
①平面形と断面形の組み合せに様々なバリエーションが存在する。平面形分析の結果から規格性の高いと考えられる方形平面・II類でも天井形はドーム・有前壁（直立／有段）・B1、有前壁（傾斜／痕跡化）・B2、無前壁・C、家形入母屋・D1、家形切妻・D2天井形との組み合せが認められる。I・II類では平面前壁が110°以下である、方形・IIa1類、長方形・IIb1類、長台形・IIb1類を除くすべてが、無前



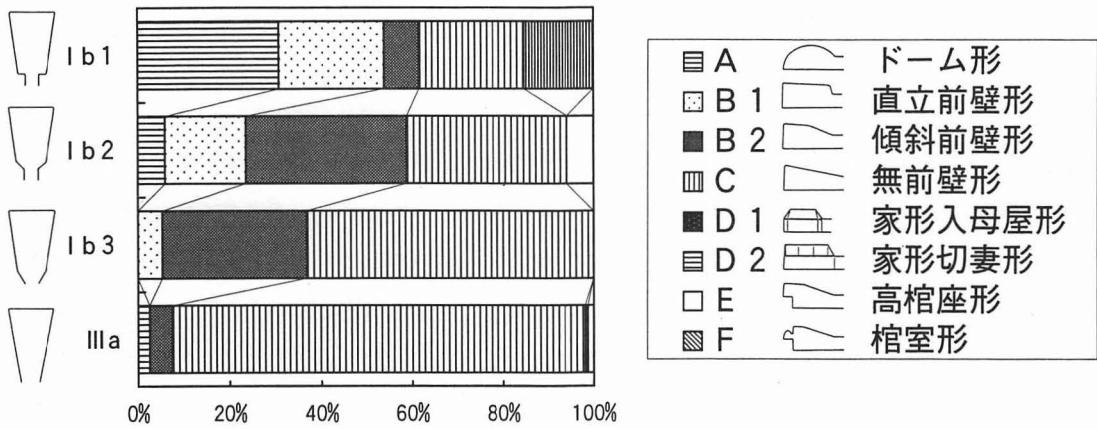
第8図 縦断面形（天井形）の割合

第3表 各分類の数と割合

	平面概念図	平面形の割合1 (平面形のみ判明 含む)	平面形の割合2 (縦断面形も判明 しているもののみ)	誤差	割合2を用い た分類内比		
大分類		総数	総量比	総数	総量比	比差	区分内比
I類		269	37.8%	201	34.5%	3.3%	34.6%
II類		98	13.8%	78	13.4%	0.4%	13.4%
III類		307	43.2%	278	47.8%	-4.6%	47.8%
IV類		37	5.2%	25	4.3%	0.9%	4.3%
I・II類分類							
I a		199	28.0%	146	25.1%	2.9%	52.3%
I b		64	9.0%	49	8.4%	0.6%	17.6%
I c		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	2.2%
II a		44	6.2%	44	7.6%	-1.4%	15.8%
II b		33	4.6%	33	5.7%	-1.0%	11.8%
II c		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	0.4%
I類細分類							
I a1		53	7.5%	39	6.7%	0.8%	20.0%
I a2		60	8.4%	46	7.9%	0.5%	23.6%
I a3		86	12.1%	61	10.5%	1.6%	31.3%
I b1		18	2.5%	13	2.2%	0.3%	6.7%
I b2		21	3.0%	17	2.9%	0.0%	8.7%
I b3		25	3.5%	19	3.3%	0.3%	9.7%
I c1		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	3.1%
II類細分類							
II a1		31	4.4%	26	4.5%	-0.1%	33.3%
II a2		20	2.8%	17	2.9%	-0.1%	21.8%
II a3		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	1.3%
II b1		37	5.2%	27	4.6%	0.6%	34.6%
II b2		7	1.0%	6	1.0%	0.0%	7.7%
II b3		1	0.1%	0	0.0%	0.1%	0.0%
II c1		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	1.3%
III類細分類							
III a		190	26.7%	161	27.7%	-0.9%	57.9%
III b		58	8.2%	58	10.0%	-1.8%	20.9%
III c		59	8.3%	59	10.1%	-1.8%	21.2%
IV類細分類							
IV a		9	1.3%	7	1.2%	0.1%	28.0%
IV b		16	2.3%	12	2.1%	0.2%	48.0%
IV c		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	24.0%



第9図 Ia類の縦断面比率

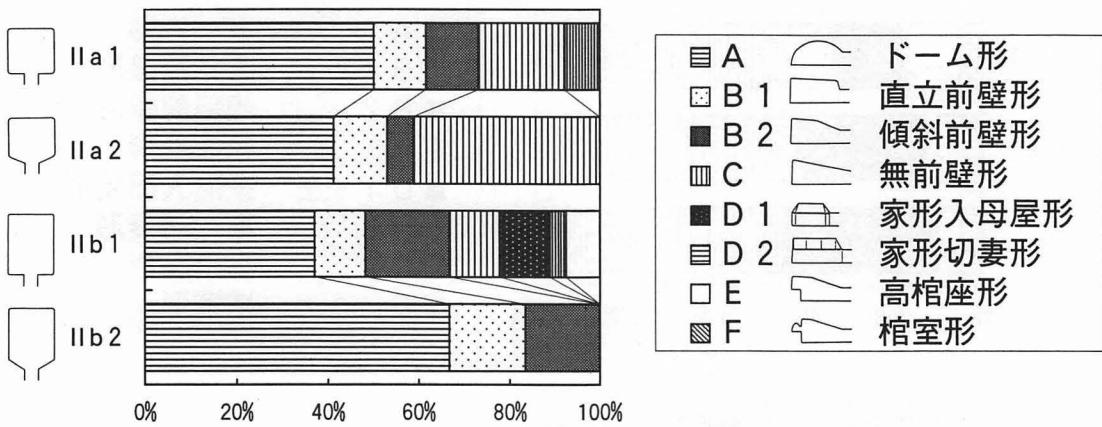


第10図 Ib類・IIIa類の縦断面比率

壁天井形との組み合わせが最も多い。

②一方、天井形からみた平面形態との組み合わせでは、家形入母屋形・D1は台形・Ia1類、台形・Ia2類、長方形・Ib1類、撥形IIIa類に限られ、家形切妻形・D2は長台形・Ib1類、正方形・IIa1類、長方形・IIb1との組み合わせに限られる。また、ドーム形・Aは方形・II類に最も多く（36基）、ついで不整形・IV類（18基）となる。有前壁天井B1・B2はいずれの平面にも一定量存在するが、主体的な組み合わせにはならない。

以上が横穴墓の数量的分析によって得られた、大枠での傾向である。これらの結果から、横穴墓の変遷を検討していくにあたって、想定し得る点をいくつか挙げていく。方形・長方形は前壁が崩れるのに従って数が減少し、台形・長台形では前壁が崩れるほど数が増加するという傾向が認められ、方形・長方形から撥形への変遷は想定しにくい結果となっている。一方、台形から撥形への変遷は、天井形の変化も複雑な形態から無前壁形への変遷として追認し得る結果となっている。特に長台形平面と撥形の変化は様々なバリエーションを持ちながらも、一定の傾向性が認められる。長台形と台形の関係は、長台形で前壁の形態が良好なもの・Ib1～2類の方が、台形で前壁の形態が良好なもの・Ia1～2類よりも、天井形が複雑なものとの組み合わせが多い。台形は一貫して無前壁天井との組み合わせが多く、平面前壁形態の崩れに従って前壁傾斜天井が微増するという異なる結果になっている。但し、台形には家形入母屋形との組み合わせも認められるため、必ずしも長台形の方が古相であると言い切ることはできない。



第11図 II類の縦断面比率

また、方形と長方形の関係も、方形は平面前壁形態が崩れるに従ってドーム形・家形天井の数が減少し、無前壁天井形が増えるというスムーズな変遷がみられるのに対し、長方形は平面前壁形態が崩れるに従い、天井形のバリエーションが減少し、ドーム形・直立前壁形・傾斜前壁形に限られるという異なった変遷をたどる。この結果のみでは、どちらが古相かを明確に判断することは不可能であり、台形、長台形、方形、長方形の出現時期と展開については、数量的分析のみによっては想定しがたい。あえて、推察するなら多様なバリエーションの存在は、横穴墓導入期の形態が複数存在したことや、異なる導入期と形態が横穴墓の変遷を豊富なものにしていることが考えられる。また、横穴墓の変遷は撥形への変遷に留まらず、最も単純化した撥形平面・天井無前壁形が確立された段階で、新たに高棺座形や棺室形などの複雑化した構造の横穴墓が一定数造られるようになる点にも注意を要すると思われる。

(植山)

6. おわりに

横穴墓の研究は平成7年度に開始して以来、回を重ねて今回で6度目の検討となる。この間、我々の研究成果を引用・参考文献として取り上げていただく報告書等が、僅かながらも見受けられるようになったことは、執筆者一同心強い限りである。一方そうした反面、複雑すぎて内容が理解できない、分類の設定が細かすぎて混乱が生じている、さらには細分のための細分遊び等といった激しい意見も耳にしている。今回の検討はこれらの意見をも踏まえ、より平易な内容とすべく心掛けたつもりである。

今回は、これまで検討を加えた内容のいわば総括であり、各形態相互の時間的な消長を含めた関連性や傾向性さらには形態の特徴について吟味したもので、具体的には出土土器からみた形態・構造の変遷と、数量的・数値的分析結果をまとめてみた。また、理解し難いと評判であったI～IV類の各形態については、今回平面形と縦・横断面一括したものを図化し、分類の基準をより明確に提示した(第1～5図)。

横穴墓の研究は、今回で終了することを目途としていた。しかしながらこれまでの検討は、神奈川県という現在の行政区画を対象とした分類を基本とし、地域性については各類型における特質を抽出するにとどまり、各地域における横穴墓の出現から消滅に至る過程については詳細な検討が試みられていなかった。そこで次回は、これまで検討を加えた成果を基に相対的な変化を踏まえた上で、律令行政区画における「郡」程度の範囲、あるいは河川流域を視野に入れ、横穴墓の地域性の検証に努めてみたい。

(上田)

神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究 —その歩みと今後の視点—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

『かながわの考古学』が各時代ごとにプロジェクトチームを組んで共同研究の成果を発表するようになったのは、1994年の第4集『かながわの考古学の諸問題』からである。奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは、まず「神奈川県内の墨書土器集成」(1994年)・「神奈川県の墨書土器について」(1995年)・「神奈川県の刻書土器集成」(1996年)と文字資料に関する共同研究を3年間行った。続いて「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究1~3」(1997~1999年)を進め、3年間にわたって竪穴住居の竪構造に関して基礎資料を提示しその成果をとりまとめた。

今回、テーマを決定するにあたってチームの6名がそれぞれ構想をもち寄り議論した結果、時あたかも20世紀の終末、21世紀を迎えるにあたって、神奈川の古代史研究について考古学の視点からまとめるうことになった。われわれの力量からみてやや背伸びした企画といえなくはないが、日々新たな知見のある考古学的資料を通じてかながわの古代史研究の進捗をみようとする試みである。

研究方法としては、古代史研究を分野別に分類して論じるとともに研究史年表を作成することとした。分野別は国府・郡衙をはじめとする官衙関係、寺院関係、集落関係、遺物関係の四つに大別した。さらに集落関係については、集落構造を中心とした視点と立地を中心とした視点とに、遺物関係についても土器類に絞り込んで在地関係と搬入品関係とに区分した。生産遺跡や祭祀関係の遺跡、墳墓、土器・陶磁器以外の遺物等が含まれていない。これは視点の拡散を防ぐことと、神奈川県の古代史研究の中ではそれらが何回も議論されるほど資料数が豊富でないことによるものである。

発表する順序として今年度は研究史年表を作成し、論文著者名と論文名を提示した。そして2年次以降に、文献目録と各分野における研究史の総括を述べる手順とした。年代が同じ場合、どちらが先に研究されたか等を論じられることを想定して、月まで入れた。月が不明な場合は□で示している。項目は前述した官衙関係、寺院関係、集落関係、遺物関係に区分している。集落関係は集落構造と立地、遺物関係も在地の土器と搬入品とに細分しているところから、官衙関係はA、寺院関係はBとした。集落関係では集落構造に関するものはC、立地に関するものはD、同様に遺物関係も在地の土器をE、搬入品をFで示した。展覧会・シンポジウム・遺跡名等の記事に対しては、何に関連しているかを示すため、A~Fで示している。遺跡名はその遺跡の発掘調査が開始された年月を入れている。また、同じ記事でも必要があると判断した場合は、あえて分野ごとに重複して掲載している。

年表の作成にあたっては、日頃から神奈川県の古代史関係の文献を精力的に集成されている荒井秀規氏(藤沢市教育委員会)のデータベースを最大限に活用させていただいた。また、田尾誠敏(東海大学)・中三川昇(横須賀市教育委員会)の両氏に助言をいただいた。さらにプロジェクトチーム全員が参加している「相模の古代を考える会」の方々からも資料提供等の支援を得た。なお、官衙関係(A)は中田、寺院関係(B)は富永、集落関係の集落構造(C)は加藤、立地(D)は大上、遺物関係の在地の土器(E)は河野、搬入品(F)は依田が分担して集成しており、次回以降の論述に関しても同様の分担とする予定である。

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院B	年代	月
		1889	
		(明22)	
		1897	9
		(明30)	12
	永井健之輔「相模國分僧寺」	1903	
		(明36)	
大槻如雷『釋路通』上		1911	9
	中山每吉「相模國分寺研究」	(明44)	
		1913	8
		(大2)	
喜田貞吉『神奈川県教育』		1917	8
喜田貞吉『武相郷土史論』		(大6)	12
沼田頼輔「相模國分寺考附國府駅路考」	沼田頼輔「相模國分寺考附國府駅路考」	1918	3
	住田正一「相模國曹源寺の古瓦に就て」	(大7)	7
矢後駒吉ほか「相模國分寺研究1」	矢後駒吉ほか「相模國分寺研究1」	1921	8
矢後駒吉ほか「相模國分寺研究2」	矢後駒吉ほか「相模國分寺研究2」	(大10)	9
	三輪善之助「影向寺寺域発見瓦」	1922	10
	三輪善之助「影向寺の瓦」	(大11)	
吉田東伍「奈良平安時代の武藏相模」		1923	8
石野瑛『武相の古代文化』		(大12)	10
	谷川磐雄「影向寺発見の古瓦に就いて」1～3		
中山每吉ほか「相模國分寺志」	中山每吉ほか「相模國分寺志」	1924	11
		(大13)	12
石野瑛『武相考古』		1926	3
		(昭1)	4
片岡永左衛門「相模師長國府考」			6
	谷川磐雄「影向寺について」		7
	沼田頼輔「相模國分寺に就いての一考察」	1927	5
	赤星直忠「宗源寺の古瓦」	(昭2)	5
沼田頼輔「相模國府遺址に就いての一考察」		6	
		11	
		12	
坂本太郎『上代駅制の研究』		1928	5
		(昭3)	10
		1929	2
		(昭4)	3
			3
		1930	9
		(昭5)	5
中山每吉「相模國駅路考」	足立康「相模國分寺堂塔年代論」	1931	4
		(昭6)	5
	田辺泰「相模國分寺建築論」		7
		1932	4
		(昭7)	6
			11
			12
沼田頼輔「相模國府の位置」	赤星直忠「勝福寺の古瓦を尋ねて」	1933	12
		(昭8)	
石野瑛「相模國府址の推定とその調査」		1934	1
		(昭9)	9
			10
		1935	1
		(昭10)	2
			7
			7
中山每吉「神奈川県に於ける関所の遺蹟と其の史実」	赤星直忠「相模宗源寺址」		
石野瑛「相模(大住・余綾)國府址研究」		1936	1
		(昭11)	2
			3
石野瑛「中郡國府村の遺跡を訪う」			6
			8
			9
			12
赤星直忠「相模國分寺」	赤星直忠「相模國分寺」	1938	8
		(昭13)	10
			10
			11
磯野喜悦「相模國分僧寺瓦及び宇瓦」	磯野喜悦「相模國分僧寺瓦及び宇瓦」		
石野瑛「武相に於ける古刹と出土古瓦に就いて」		1939	1
		(昭14)	4
			7
石野瑛「武藏相模に於ける古刹と出土古瓦」	石野瑛「武藏相模に於ける古刹と出土古瓦」		11
			12
		1940	3
		(昭15)	5
			7
	加藤誠夫「千代觀音勝福寺古瓦発見概報」		
		1941	2

特記事項	集落址（構造C・立地D）土器（在地E・搬入F）	土器（在地E・搬入F）
		鳥居邦太郎『日本考古提要』E
		三宅米吉「上古の焼物の名称」E 三宅米吉「上古の焼物の名称」E
		高橋健自『考古学』E
		小松真一「金滓を出だす堅穴遺構」E
		鳥居龍蔵『先史及原始時代の上伊那』E
		森本六爾「武藏国荏原郡馬込村の一横穴」E
		後藤守一『日本考古学』E 森本六爾「西日本の弥生式土器の本体について」E
		八幡一郎『南佐久郡の考古学的調査』E 八幡一郎『武藏川口村発見の一甕』E 大山柏「弥生式及び其系統—はしがきー」E 大山柏「我國石器時代研究の現況」E 浜田耕作「日本の古代土器」E 樋口清之「静岡県小笠郡曾我村弥生式土器出土遺跡研究」E 浜田耕作「日本の古代土器」E
公郷瓦窯址B		杉原莊介「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」(上) E 杉原莊介「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」(下) E 山内清男「日本遠古之文化」五 E 山内清男「日本遠古之文化」六 E
		八幡一郎「下総国須和田の弥生式土器」E 森本六爾「下総国須和田の土器について」E 小林行雄「小型丸底土器小考」E 山内清男「新著」E 杉原莊介「会報」E 杉原莊介「上総宮ノ台遺跡調査概報」E 奥田直栄「中野区川嶋発見の原史時代堅穴」(予報) E
		杉原莊介「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義について」 E 奥田直栄「空掘らしき溝を持つ堅穴住居遺跡」 E
		奥田直栄「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」(一) E 奥田直栄「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」(二) E 奥田直栄「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」(三) E
		赤星直忠「三浦半島出土の須恵器並土師器集成」F 小林行雄ほか「大和に於ける土師器住居址の新例」E 杉原莊介「下総鬼高遺跡調査概報」E
		杉原莊介「南関東を中心とする土師部祝部土器の諸問題」E 和島誠一「原史時代部会の須和田遺跡見学」 E
		山内清男「日本遠古之文化」補註付・新版 E S. J. 「「人類学・先史学の用語に関する座談会」に出席して」 E 杉原莊介ほか「武藏和泉遺跡調査概報」E 杉原莊介「武藏弥生町出土の弥生式土器に就いて」 E
		杉原莊介「弥生式文化研究上の二三の問題」E

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院B	年代	月
佐藤善次郎「上代の神奈川」		1941 (昭16)	3 4
簗田伊人「相武古駅路考」			7 11
中山每吉「武相に於ける古道の探求2」		1942 (昭17)	1 3
長谷川晴康「師長國造址考」			4
赤星直忠「千代塚を尋ねて」			7
加藤誠夫「千代の台から飯泉へ」			7
川口清「第二次相模国府の遺跡」			7
永井參治「相模旧国府と五靈社」			7
永井參治「相模旧国府と正序附御牧国倉」			9
川口清「大住国府址及び大住余綾町軍団址とその沿道調査」			9
佐藤善次郎「相模国国府祭解説」			10
永井參治「国府祭の古事と三宮の旧儀」		1943 (昭18)	3 12
山田一男「千代の古瓦と忘られぬ事ども」	山田一男「千代の古瓦と忘られぬ事ども」	1946 (昭21)	12
		1950 (昭25)	6
	岡部長章「相模尼寺跡で表面採集した文字瓦について」		
大場磐雄「相模国府の位置について」		1951 (昭26)	3 4
	大場磐雄「相模国分寺の性格」		6
児島鶴造「相模国分寺」	児島鶴造「相模国分寺」	1952 (昭27)	12
	鶴田榮太郎「七堂伽藍」		
	石野瑛「上府中村古刹址（千代觀音）の考察」	1953 (昭28)	4 9
			12
内藤政通「川崎市菅寺尾台瓦塚廃堂址調査報告」		1954 (昭29)	3 4
赤星直忠「横須賀市平作瓦窯址」			
			12
石野瑛「相模の国府と国分寺」	石野瑛「相模の国府と国分寺」		
石野瑛「相模国府址」	石野瑛「足柄下郡千代庵寺」	1955 (昭30)	2 3 7
			12
	赤星直忠「横須賀市子安寺址」		
		1956 (昭31)	6 7
石野瑛「高座の古往今來はか」			10
石野瑛「神奈川県大観4」			10
	石野瑛「神奈川県大観4」		
	加藤誠夫「飯泉勝福寺の研究」		
	石野瑛「古酒匁文化と千代觀音弓削寺」		
	石野瑛「茅ヶ崎市下寺尾庵寺址」	1957 (昭32)	3 12
	赤星直忠「宗元寺時代」		
	鶴田榮太郎「長編七堂伽藍」1・2		
	石野瑛「神奈川県大観3」	1958 (昭33)	4 6
			6
	坂詰秀一「瓦塔についての一考察」		8
立木望隆はか「小田原市立病院出土の遺物」			9
			10
山田弘道「地名からみた国府」		1959 (昭34)	1 2
立木望隆「小田原市民病院土師遺跡調査記」			7
			10
		1960 (昭35)	2 3
大場磐雄「国府集落」			4
浅香幸雄「国府の位置と相模国府の三遷」			
		1961 (昭36)	3 4
石野瑛「国府津は旧小総駅ほか」	石野瑛「千代遺跡調査の継続」		
石野瑛「神奈川県大観5」	石野瑛「神奈川県大観5」		
	加藤誠夫「飯泉勝福寺について」		4
山田弘道「続地名からみた国府」			6
山田弘道「続地名からみた国府」			7
			12
	赤星直忠「小田原市千代庵寺跡」	1962 (昭37)	5 6
丸茂武重「国府郡家の建物」	大川清「瓦窯における技術導入の一例 - 相模国分寺瓦窯 - 」		9
		1963 (昭38)	1 4
樋口清之「さかさ川の謎」	石野瑛「小田原市旧上府中千代古刹址」		10
	樋口清之「さかさ川の謎」		12
		1964 (昭39)	3 4

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
		杉原莊介「日本古代文化に於ける播布性に就いて」E
		藤森栄一「『天手抉』の発展経過に就いて」E
		杉原莊介「考古学的方法に於ける型式に就いて」E
		杉原莊介「上総宮ノ台遺跡調査概報」E
		杉原莊介「原史学序論」(初版)E 杉原莊介「原史学序論」(再版)E
		小出義治ほか「山梨県日下部中学校々庭聚落遺跡概報」EF
菅寺尾台瓦塚廐堂B		萩原弘道「銚子市松岸遺跡原史時代遺跡に就いて」E
		萩原弘道「杉並区松ノ木中学校々庭の土師式堅穴遺構」E
		萩原弘道「杉並区堀之内済美台土師式住居址調査報告」E
		萩原弘道「土師式文化前期に對する考察」E 中山淳子「中野富士見台遺跡の小さな結果」E
		小出義治ほか「土師式遺物」「平出」E 玉口時雄「落合遺跡出土の土師器に就いて」EF 杉原莊介ほか「土師器」E
		小出義治ほか『伊東市史』E 萩原弘道「銚子市松岸遺跡の土師器」E 後藤守一「須恵器と土師器」E
瓦尾根瓦塚B		釣田正哉「平城宮跡出土・土師器並びに須恵器(上)」F
		萩原弘道「末期弥生式土器と古式土師器の関係」E 高橋護「土師器研究に関する疑問」E 釣田正哉「平城宮跡出土・土師器並びに須恵器(下)」F
千代庵寺B	三友国五郎「古代村落の研究」C	中山淳子「土師器小考」E 若月直「山梨市下神内川出土の土器について」F
		小出義治「土師器考」E
		高本康生「土師器研究略史(一)」E 植崎彰一「後期古墳時代の諸段階」F 高本康生「土師器研究略史(二)」E
		岩崎卓也「土師器研究上の諸問題(I)」E
		植崎彰一「土器の発達—須恵器と土師器—」F
宮原武夫「不動倉の成立について」C		岩崎卓也「古式土師器考」E 岩崎卓也「土師器研究上の諸問題(II)」E
		岩崎卓也「土師器の編年」E 岩崎卓也「東日本における土師器の研究」E

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院B	年代	月
赤星真忠「神奈川県小田原市下曾我低地遺跡」 内田武雄「相模・千代台の寺院跡とその周辺」	内田武雄「相模・千代台の寺院跡とその周辺」	1964 (昭39)	9 9
		1965 (昭40)	1 3
		1966 (昭41)	2 11 12
日野一郎「平塚市下ノ郷廃寺跡」 横口清之ほか「神奈川県小田原市下曾我遺跡」	日野一郎「平塚市下ノ郷廃寺跡」	1967 (昭42)	3 3
太岡実「史跡相模國分寺跡の発掘」 岡田茂弘「相模國分寺を掘る」	太岡実「史跡相模國分寺跡の発掘」 岡田茂弘「相模國分寺を掘る」		4 5 7
	坂詰秀一「神奈川県岡上廃堂跡の調査」	1968 (昭43)	1 3 10
藤岡謙二郎「甲斐と相模及び武藏國府」	内藤政通ほか『菅寺尾台瓦塚廃堂跡第三次発掘調査概報』	1969 (昭44)	7 12
	大川清『瓦尾根瓦窯』	1970 (昭45)	2 3 4 5 6 10 12
鳥養直樹「律令國家成立期における国造小論」 坂本太郎「国府と駅家」	岡本勇「横須賀市博物館建設地内の古瓦発見地点の調査」	1971 (昭46)	1 3 5 6 7 9 11 12
	赤星直忠「上足柄郡松田町瓦窯址調査日誌」		
丸茂武重「相模國府」	小出義治「子安地区の伝仏堂址発掘調査報告」	1972 (昭47)	3 3 9
中村兵吉「相模の国府と国分寺の変遷」	赤星直忠「松田町からさわ第三号瓦窯調査概報」	1973 (昭48)	6 7 8
	富田千春「千代台の古瓦」		9 9
小出義治「海老名町本郷（1次・2次）」 木下良「相模國府の所在について」 千田稔「国津と国府津」		1974 (昭49)	3 3 5 9
権守桂城「相模の国府と総社」		1975 (昭50)	3 3 3 6
内田武雄「相模國初期の国府と国分寺の所在はどこか」	内田武雄「相模國初期の国府と国分寺の所在はどこか」 富田千春「千代台の廃寺跡」		7 7 8 9
木下良「災害による国府の移転」	大三輪龍彦「影向寺遺跡発掘調査概報」	1976 (昭51)	2 3 4 5 6 9 11 11 12
秋山元秀「相模國」		1977 (昭52)	2 3 5
木下良「国府と国分寺」 木下良「古代東海道の（相模川）渡河点」			7 7

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
		岩崎卓也「土師器研究上の諸問題(III)」E 田中琢「須恵器製作技術の再検討」EF 倉田芳郎「南関東における住居址出土の土師器」E
	直木孝次郎「古代国家と村落」CD	
相模国分寺B		鴨國男ほか「八王子市大目町甲の原平安時代堅穴住居址調査報告」E 玉口時雄ほか「土師器」E
中田遺跡CD	和島誠一ほか「集落と共同体」CD	橋崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」F 岩崎卓也「真間式土器小考」E
		田中琢「畿内と東国」F 山村宏「遠江の須恵器生産」F 岡田淳子ほか「第3章 土師器の編年に関する試論」E 阿部義平「東国の土師器と須恵器」EF
からさわ瓦窯B		
薦尾遺跡CD		小出義治「鶴川遺跡K・P地点発掘調査報告」E 高橋正勝「弥生式土器における壺・台付甕の成形・調整工程についての試論」E 阿部義平ほか「水びき成形技法における「ヘラ切り」と「糸切り」」E 玉口時雄「土師器」E
本郷遺跡CD		伊藤博幸「鍛錆技術に関する二・三の問題」EF 伊藤博幸「ロクロ成形技法と底部糸切離し手法の考察」EF 神沢勇一「土師式土器」F
		高島忠平「平城京東三坊東側溝出土の施釉陶器」F 阿部義平「ロクロ技術の復原」EF 杉原莊介「古墳文化－土師時代－」E 坂詰秀一「武藏新久窯跡」F 杉原莊介「前期の土師式土器」E
上浜田遺跡CD		神澤勇一ほか「神奈川県下の須恵器」F 服部敬史ほか「総括－土器について」『船田』E 杉原莊介「中期の土師式土器」E
尾尻八幡山遺跡CD		橋崎彰一「陶磁大系第5巻...三彩・緑釉・灰釉」F 西野元「国分式土器について」E 杉原莊介「後期の土師式土器」E
	柳原松司ほか「港北区森戸原遺跡調査概要」C	田中琢「鉛釉陶の生産と官営工房」F
	佐々木達夫「古代村落の変遷過程」D	杉原莊介「晩期Iの土師式土器、晩期IIの土師式土器」E
草山遺跡CD	河野喜映ほか『薦尾遺跡』C	河野喜映ほか『薦尾遺跡』E 橋崎彰一「薦尾遺跡出土の灰釉陶器および緑釉陶器について」F 山崎二雄「厚木市薦尾遺跡出土陶片の化学分析」F 服部敬史「下守田・要石遺跡」F
影向寺B		高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」EF
		寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」F 小笠原好彦ほか「第V章2 平城宮 I～VIIの大別」F 末木健「中部地方の平安時代土師式土器編年の諸問題」F
		河野喜映「薦尾遺跡出土の土器編年試論」E
		近藤義郎「原始史料論」E 橋崎彰一「日本陶磁全集6 白瓷」F 橋崎彰一「老洞古窯跡発掘調査概報」F
	中山吉秀「離れ国分考」C	
		星野達雄「いわゆる国分式土器について」E 大川清「千葉県市原市永田・不入須恵窯跡」F
向原遺跡C	松村恵司ほか『山田水呑遺跡』CD	

官衛（国府・郡衛・駅家等）A	寺院B	年代	月
志田淳一「古代国家と東國」		1997	9
前川明久「東国の國造」		(昭52)	10
			10
			11
	町田章ほか「国史跡相模国分寺跡」	1978	3
		(昭53)	3
			3
			4
			5
			6
			7
			7
			8
	岡本勇「七堂伽藍を掘る」	1980	10
			11
			11
			11
			12
		1979	3
		(昭54)	3
			3
			3
			3
			3
			5
	神奈川県県史編集室『神奈川県史 考古資料編』	1980	6
			8
			9
			9
			10
			11
井上清「相模の国府と官道」		1980	1
平塚市遺跡調査会『四の宮下ノ郷』		(昭55)	3
鳥養直樹「律令国家形成期における在地首長の動き」			3
			3
			4
大川清ほか「横浜市富士塚地区遺跡群長者原遺跡の調査」		1981	1
平塚市博物館『堀り起こされた平塚』		(昭56)	3
前場幸治『古瓦を追って』	前場幸治『古瓦を追って』	1981	3
			3
			3
			3
			3
			3
			5
			5
			6
			7
			9
			10
			11
			12
			12
大川清ほか「長者原遺跡の調査」		1982	1
小島弘義「神奈川県四之宮下郷・上郷遺跡」		(昭57)	2
			3
			3
			4
			5
	伊藤秀吉ほか『影向寺文化財総合調査報告書』	1983	6
			7
			7
中村二郎「雑談 国府祭」		1983	11
		(昭58)	11
			11
			1
			1

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
		横崎彰一『日本陶磁全集5 三彩・緑釉』F
	黒崎直「歴史考古学における集落跡と都城研究」C 村松恵司「古代籍帳と古代集落についての覚書」C 小島弘義ほか「平塚市発掘調査の回顧と展望」C	坂詰秀一『武藏・虫草山窯』F 大川清ほか『多摩丘陵窯跡調査報告』F 田中琢「土師器と古墳時代」E 大坪宣雄「歴史時代土師器环の一製作技法」E 神奈川考古同人会「神奈川県内における古墳時代後期
シンポ 1		から平安時代土器編年試案』E
戸根不動原遺跡CD	服部敬史「関東地方における古墳時代後期の集落構成」C	
相原二本松遺跡CD		
下寺尾廃寺B		
中原上宿遺跡A	小島弘義「相模川下流域の沖積低地における遺跡の展開」D	
四之宮下郷遺跡CD		田中琢「型式学の問題」E 大塚初重「土師器・須恵器の編年とその時代」E 星野達雄「律令制と商品生産の展開」E 福田健司「南武藏における奈良時代の土器編年とその史的背景」EF 小出義治ほか「歴史時代土器の研究Ⅰ」EF
宮ヶ瀬遺跡群CD	平塚市教育委員会「平塚市博物館資料2」D 國平健三ほか「上浜田遺跡」C	梅沢太久夫ほか「埼玉における古代窯業の発達(1)」F 向坂鋼二「静岡県における須恵器編年と現状と課題」F 川江秀孝「静岡県下の須恵器について」F 柴田稔「静岡県下の灰釉陶器について」F 國平健三「I～VI期の土器群について」「上浜田遺跡」E 静岡県考古学会「須恵器－古代陶質土器－の編年」F 西弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」EF 服部敬史ほか「南多摩窯址群の須恵器とその編年」F
長者原遺跡A	寺田兼方「古代の藤沢」C 高橋一夫「計画村落について」CD 原島礼二「東国の大集落について」C 鬼頭清明「律令国家と農民」CD	小川貴司「回転糸切り技法の展開」EF 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討(1)」F
四之宮下郷遺跡A・C		
六ノ域遺跡A		
	平塚市遺跡調査会「四の宮下郷」C 中田英「神奈川県における古代集落研究の現状」C	梅沢太久夫ほか「埼玉における古代窯業の発達(2)」F 浅野晴樹「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」F 瀬川裕市郎「藤井原の大鉢」F 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」F
	吉田晶「日本古代村落史研究序説」C	
上ノ町遺跡D		服部敬史「八王子市南部地区的遺跡」EF 杉山博久「秦野盆地周辺の火山堆植物と遺跡」E
シンポ 2		
	池上悟「南武藏に於ける奈良・平安時代集落出土須恵器の様相」F 東洋大学未来考古学研究会ほか『シンボルが盤状坏』F 坂本美夫「甲斐型の土器について」F	
	瀬川裕市郎「静岡県東部地域における奈良時代の土器様相」F 梅沢太久夫ほか「埼玉における古代窯業の発達(3)」F 横崎彰一「老洞古窯跡群発掘調査報告書」F 服部敬史「南多摩窯址群・御殿山地区G62号窯跡発掘調査報告書」F 明石新「中原上宿遺跡出土土器の変遷」E 國平健三「奈良時代土器の様相」E 國平健三「相模国の奈良・平安時代集落構造(上)」E 服部敬史ほか「南多摩窯址群における須恵器編年再考」EF	
台山遺跡D		田辺昭三「須恵器大成」F 斎藤孝正「尾北窯における灰釉陶器の変遷」F 愛知県陶磁資料館「猿投窯」F
シンポ 3		
	酒井清治「房総における須恵器生産の予察(1)」F 佐々木和博「下総古代土器編年試論(1)」F 坂詰秀一「武藏・天沼窯跡」F 石井則孝「古代の集落」C	
大源太遺跡D		志村博「土器の分類」『東平』F
	梅沢太久夫ほか「埼玉における古代窯業の発達(4)」F 金子真士「北武藏の須恵器」F 斎藤孝正「緑釉陶器・灰釉陶器について」F 服部敬史「南武藏における古代末期の土器様相」F 西弘海「土器様式の成立とその背景」E 國平健三「相模国の奈良・平安時代集落構造(中)」E	
シンポ 4	國平健三「相模国の奈良・平安時代の集落構造(中)」C	立正大学「関東地方における9世紀代の須恵器と瓦」F 上田薰「神奈川県における盤状の坏」EF 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」F 井上喜久男「白釉緑彩陶について」F 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」F 神奈川考古同人会「奈良・平安時代の諸問題」F 國平健三「相模地域」E 河野喜映「奈良・平安時代の鶴見川流域」E 坂本美夫ほか「甲斐地域」F 志村博ほか「東駿河地域」F 高橋一夫ほか「北武藏の窯址」F
シンポ 5		

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
		服部敬史「南武藏の窯址」F 福田健司「奈良時代の多摩川流域」F 福田健司ほか「平安時代の多摩川流域」F 石岡憲雄ほか「埼玉における古代窯業の発達（5）」F 市川正史「出土土器について」「向原遺跡」E 岡本範之「古墳時代後期から平安時代にかけての土器」F 後藤建一「8世紀代湖西古窯跡出土の須恵器編年モデル」F 橋崎彰一ほか「猿投窯編年の再検討について」F 橋崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告書』III F 長谷川厚「横須賀市小矢部窯址出土土器の再検討」E 長谷川厚「相模型の土師器杯について」E 植野浩三「須恵器蓋環の制作技術」F 斎藤孝正『正家1号窯発掘調査報告書』F 羽鳥靖子「静岡県東部地域における古墳時代後期の變形土器について」F 服部敬史「ロクロ土師器出現の背景」E 服部敬史「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」F 小竹実佳子「湘南地方の砂丘上に於ける真間期・国分期の集落の一考察」D 國平健三はか「シンボジウム収録」E 長谷川厚はか「ロクロ使用の酸化焰焼成の土器について」E 百瀬正恒「灰釉陶器の編年について」F 鈴木徳雄「古代北武藏における土師器製作手法の画期」EF シンド 6 小笠原好彦「東日本における掘立柱建物址の展開」C 佐久間豊「斜格子状暗文坏を有する土師器環について」F 能登健ほか「赤城山南麓における遺跡群研究」D 服部敬史「奈良・平安時代の土器生産について」F 高橋一夫「集落分析の一視点」C 史館同人・市立市川考古館『房総における奈良・平安時代の土器』F 佐久間豊はか「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」F 宮内勝巳「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」F 福田健司「ロクロ土師器の問題点について」E 石戸啓夫「大源太遺跡出土の畿内系土器について」F 金子真土「埼玉における古代窯業の発達（6）」F 小島弘義「出土土器について」「四之宮下郷」 E 斎藤孝正「第4節 灰釉・綠釉陶器」「四之宮下郷」 F 瀬川裕市郎「静岡県（東部）」F 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の様相」F 山口辰一「武藏國府関連遺跡における土器編年試論」E 渡辺博人「美濃須恵古窯跡群資料調査報告」F 坂詰秀一「武藏八坂前窯跡」F 鶴間正昭「赤色塗彩土師器環の消滅について」EF 斎藤孝正『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』F シンド 7 國平健三「相模国の奈良・平安時代の集落構造（下）」C 今小路西遺跡AD 森田稔「猿投窯灰釉陶器編年再考」F 西山太郎「台地斜面に立地する住居跡群の意味と三つのパターン」D 能登健「集落変遷からみた農地拡大のプロセス」D 鈴木徳雄「いわゆる北武藏系土師器環の動態」F 宇野隆夫「後半期の須恵器」F 南鍛冶山遺跡 石上英一ほか「宮久保木簡の意味するもの」C 國平健三「宮久保遺跡」C 西山克己「東国出土の暗文を有する土器（上）」F 國平健三「宮久保木簡の発見」C 鈴木靖民「宮久保木簡と相模古代史」C 橋口定志「平安期における小規模遺跡出現の意義」C 伊丹徹「奈良・平安時代相模国の掘立柱建物」C 能登健ほか「山櫻み集落の出現とその背景」D 谷井彪ほか「赤沼地区第14支群の発掘」F 鶴間正昭「古代末期土師器環・小型甕にみられる台状底部の出現とその背景」EF 今井宏「埼玉における古代窯業の発達（7）」F 明石新「SD 4.5 出土遺物について」「農田本郷」 E 小島弘義「土師質土器の実態とその年代」「四之宮高林寺II」 E 山口辰一「武藏國府と奈良時代の土器様相」EF 服部敬史「関東地方における九・十世紀の須恵器生産」F 坂井秀弥「頸城平野古代中世開発史の一考察」D 大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について」C 市原壽文「考古学的立地論」D 横山浩一「型式論」E 神奈川県立埋蔵文化財センター「古代の交易」F 長谷川厚「古代東国における土器生産」E 巽淳一郎「日本の美術12 No235陶磁（原始・古代）」F 宇野隆夫「古代の食器の変化と特質」EF 西山克己「東国出土の暗文を有する土器（下）」EF シンド 8 甲元真之「農耕集落」D 神奈川考古同人会「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」EF 寺内博之ほか「下総・上総国における古代末期の土器様相」F 國平健三はか「南武藏南部・相模国における古代末期の土器様相」E 福田健司「南武藏における平安時代後期の土器群」EF 酒井清治「北武藏における7・8世紀の須恵器の系譜について」F 宮添遺跡B 鶴間正昭「古代末期の丘陵地域開発について」D

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院B	年代	月
国立歴史民俗博物館『古代国府の研究』		1986	3
横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『古代のよこはま』		(昭61)	3
関口功一「長田郡と足柄郡」			3
木下良「国府と国分寺の関係について」			4
			4
			4
			4
			9
			10
			12
			12
松村鉄心「相模と武藏の国府」	清水信行「神奈川県からさわ古窯址群出土の瓦をめぐる若干の問題」		
		1987	1
		(昭62)	1
	望月一樹「南武藏における古代寺院の造営－川崎・影向寺を事例として」		2
			3
			3
			3
			3
			3
			4
	亀ヶ谷利男「影向寺史」		4
			6
			7
			9
松尾光「鎌倉出土の木簡と古代の輸」			12
			12
			12
		1988	1
		(昭63)	1
松尾光「宮久保木簡をめぐる2・3の問題」	竹石健二ほか「影向寺史」		2
			3
			3
			4
	國平健三ほか「奈良時代寺院成立の一端について（I）」		4
森田佛「駅路の改訂」			5
木下良「国府」			6
			9
			10
			11
			12
		1989	1
		(平1)	2
富永富士雄「居村遺跡と出土木簡」			3
中山農「小田原市千代廃寺出土の軒瓦」	中山農「小田原市千代廃寺出土の軒瓦」		3
国立歴史民俗博物館『古代国府の研究（続）』	影向寺『影向寺薬師堂保存修理報告書』		3
			3
			3
			3
			3
岡本勇ほか「横浜の、ずっと大昔」			4
高島央之「付札状木製品」について			5
富永富士雄「茅ヶ崎居村（B）低湿地遺跡の調査」			5
荒井秀規「高座郡内の郷名と官衙遺跡」			5
鈴木靖民「神奈川県内の出土木簡について」			5
野尻靖「古代における放生の意義」			5
坂本太郎「古代の駅と道」			5
			6
			8
太平聰「居村「放生木簡」と古代の放生」	清水信行ほか「唐沢・河南沢」		10
富永富士雄「居村B遺跡」			11
太平聰「相模国「国分尼寺」遺跡の破壊」	太平聰「相模国「国分尼寺」遺跡の破壊」		12
			12
今小路西遺跡発掘調査団『今小路西遺跡発掘調査報告書』		1990	1
		(平2)	2
木下良「上野・下野両国と武藏国における古代東山道駅伝路の再検討」	滝澤亮ほか「相模国分寺関連遺跡」1・2		3
國平健三「初期相模國府の所在地について（上）」	滝澤亮ほか「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」		3
坂詰秀一「歴史考古学史上の川崎」	滝澤亮ほか『海老名市国分尼寺の調査』		3

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
高林寺遺跡A		今井宏「埼玉における古代窯業の発達（8）」F 斎藤孝正「灰釉陶器の研究」F 石戸啓夫「東国における暗文を有する土師器について」EF
	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『古代のよこはま』C	
	萩原三雄「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」D 伊丹徹「奈良・平安時代相模国の集落遺跡における大型住居址と掘立柱建物」C	山下孝司「奈良時代における甲斐の土器編年」F 國平健三「相模型杯の成立過程をめぐる土器様相」E 河野喜映「8世紀土器の実年代」E 林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」F
シンポ9	中田英「古代東国の一集落における一軒の住居址の性格について」C	
	能登健「里棲み集落の研究」D	水谷寿克はか「築窯跡群について」F 百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」F
シンポ10		斎藤孝正「施釉陶器年代論争」F 房総歴史考古学研究『房総における歴史時代土器の研究』F
蓮乘院北遺跡A		竹花宏之「多摩ニュータウン遺跡No.513遺跡」F 橋口尚武「伊豆諸島から見た律令体制の地域的展開」F 酒井清治「武藏国における須恵器年代の再検討」F 大谷徹「熊ヶ谷東遺跡須恵器窯跡について」F 小林信一「ロクロ手法土師器の出現」F 齊藤孝正「猿投窯IV期における須恵器生産の様相」F 後藤建一「西笠子第64号窯跡発掘調査報告書」F 井上晃夫「环形須恵器の編年試案」F 福田健司「土器編年と灰釉陶器」F
	大上周三「秦野市草山遺跡における古代集落の展開（予察）」C 岡本孝之「神奈川県古代開発史（予察）」D	服部敬史「東国における奈良時代前半の須恵器生産とその意義」F 林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」F 前川要「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」F 佐野五十三「浅間林遺跡・永原追分遺跡の土器検討」F 長谷川厚はか「三浦半島の古代遺跡における小矢部窯址産土器の同定(1)」E 斎藤孝正「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相」F
シンポ11	土井義夫ほか「平安時代の居住形態」C 長谷川厚「遺跡の分布からみた古代の藤沢」D	服部敬史「東京の奈良・平安時代の土器研究と課題」F 坂井秀弥「律令期の須恵器系譜」EF 波江芳治「東国平安時代集落遺跡の考古学的検討」C 宮崎伸一「律令体制下における多摩ニュータウン地域内の集落形成過程」D 大上周三「秦野地域における古代集落の様相」C
		北川惠一「駿東型の甕」の初現と終末について」F 大塚初重「土師器・須恵器の編年とその時代」E 國平健三はか「奈良時代寺院成立の一端について(1)」E 服部実喜「関東地方における平安時代後半期の土器様相」E
		渡辺博人「美濃須恵窯の須恵器生産」F
神明久保遺跡A		勅使河原彰『日本考古学史』B
シンポ12	川崎市民ミュージアム『川崎の考古』C	日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」F
国分尼寺B	大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について3」C	渡辺一「鳴山窯跡群」F 埼玉県立歴史資料館『埼玉の古代窯業調査報告書』F
池子遺跡群D	宮瀧交二「古代東国村落史研究の一観点」C 能登健「農耕集落研究の現段階」D	
天神前遺跡A		飯塚武司「律令制成立期の土器様式の地域性をめぐって」E 國平健三「在地産土師器との共伴でみた前内出窯期の比較」E 河野喜映「須恵器の実年代について」E 渡辺一「小谷B窯跡II期と前内出窯跡の年代」F 山本恵一「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」F 埼玉考古学会「奈良時代前半の須恵器編年とその背景」記録集」F 静岡県教育委員会「静岡県の窯業遺跡」F 後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」F 斎藤孝正「灰釉陶器の研究II」F
稲荷前A遺跡A		雪田隆子はか「多摩ニュータウンNo.446遺跡」F 雪田隆子はか「多摩ニュータウン地区における古代の須恵器生産について」F
	坂本美夫「甲斐型杯（1）」F	
	山下孝司「奈良時代における甲斐国土器推移と史的背景」F	
	前川要「平安時代における緑釉陶器の編年研究」F	
	大屋道則「相模型杯の成立過程」E	
	若林勝司「土師器の口径変化について」E	
	前川要「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上）」F	
	前川要「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（下）」F	
	大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について4」C 岡本孝之「弥生・古墳時代の小出川流域史」D	坂本美夫「甲斐地域の奈良時代土器」F 保坂康夫「古代の甲斐型甕をめぐって」F
		三重県埋蔵文化財センター・齋宮歴史博物館『緑釉陶器の流れ』F 瀬川裕市郎はか「煮堅魚と堀形土器」覚え書」F
シンポ13	坂口一「群馬・赤城山麓の遺跡群」D	長谷川厚「住居址出土土器の様相の整理」「宮久保遺跡III」E
シンポ14	大屋道則「中田以前の土師器研究」E	若林勝司「V 十七ノ域遺跡第4地区 3 成果と課題」E

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院B	年代	月
國平健三「木簡と井戸との関連性について」		1990	3
平川南「墨書き土器について」	(平2)	3	
平川南「宮久保遺跡出土の木簡について」		3	
神奈川県教育委員会「神奈川の遺跡」		3	
阿部武彦「大住国府の変遷」		3	
		4	
	河野一也「奈良時代寺院成立の一端について（II）」	5	
		5	
		7	
		8	
		8	
	小竹実佳子「七堂伽藍出土の長頸瓶について」	9	
	海老名市図書館「国分寺関係資料目録」	9	
鈴木靖民「神奈川県出土の木簡」		10	
荒井秀規「神奈川県古代史研究文献リスト」		10	
大平聰「古代の地方行政制度」		10	
大平聰「宮久保木簡と御成木簡」		10	
鬼頭清明「今小路西遺跡の木簡について」		10	
松尾光「御成木簡の解釈」		10	
山中敏史「今小路西遺跡と役所」		10	
水野順敏「都筑郡衙跡」		11	
		12	
	須田誠「相模国分尼寺の発掘調査概要」		
		1991	2
國平健三「初期相模国府の所在地について（下）」	滝澤亮ほか「相模国分尼寺跡の第9次調査の概要」	(平3)	3
荒井秀規「南銀治山遺跡の周辺官衙遺跡と郡郷の問題」		3	
井上尚明「集落遺跡としての南銀治山遺跡」		3	
加藤信夫「南銀治山遺跡と下ノ根遺跡の概要について」		3	
河野喜映「土器からみた南銀治山遺跡の年代」		3	
関和彦「南銀治山遺跡の史的性格」		3	
鳥養直樹「南銀治山遺跡シンボジウム雑感」		3	
丸山理「南銀治山遺跡シンボジウム所感」		3	
山口英男「墨書き土器と官衙遺跡」		3	
		3	
松尾光「茅ヶ崎出土の木簡と古代の放生」		4	
	河野一也ほか「奈良時代寺院成立の一端について（III）」	5	
		5	
		5	
		5	
森田悌「東国駅道の再検討」		6	
望月一樹「神奈川の古代木簡」		6	
田尾誠敏「古代の余綾1」		6	
	村田文夫「影向寺の創建と史的展開に関する素描」	7	
田尾誠敏「古代の余綾2」		9	
	森田悌「在地における仏教信仰の展開」	9	
鈴木靖民「下曾我遺跡と出土木簡」		11	
	大岡実「相模国分寺」	11	
荒井秀規「神奈川県古代史研究文献リスト2（正誤・補遺）」	神奈川県立埋蔵文化財センター「発掘された寺院」	11	
田尾誠敏「古代の余綾3」		12	
		12	
鳥養直樹「古代の神奈川」		1992	2
木下良「相模国の国府について」	荒井秀規「豆相の定額寺」	(平4)	3
木下良「「国府と駅家」再考」	滝澤亮ほか「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書II」	3	
田尾誠敏「古代の余綾4」	北川吉明ほか「相模国分寺」	3	
		3	
	河合英夫「岡上廃堂址の年代観について」	4	
清水信行「からさわ古窯群出土瓦・補遺」	清水信行「からさわ古窯群出土瓦・補遺」	5	
		5	
		6	
田尾誠敏「古代の余綾5」		7	
		8	
		8	
		9	
田熊清彦「東国の国府と郡家」		10	
田尾誠敏「古代の余綾6」		10	
		11	
		11	
		11	
鳥養直樹「神奈川の古代地域史研究の潮流」		11	
	滝澤亮ほか「海老名市相模国分僧寺・相模国分尼寺跡の調査」	12	
荒井秀規「相模国足柄評の上下分割をめぐって」		1993	2
大磯町郷土資料館「湘南の考古資料展」	長谷川厚「相模国府と国分寺の所在について」	(平5)	3
小林泰文「古代の木簡」	大塚真弘「石井遺跡」	3	
長谷川厚「相模国府と国分寺の所在について」		3	
平川南「「厨」墨書き土器論」		3	
鈴木靖民「相模の木簡」		4	
村田文夫「古代の南武藏」	河野一也「奈良時代寺院成立の一端についてIV」	5	
鳥養直樹「戦後神奈川の古代史「通史・資料編」の動向」		5	
		8	

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
	國平健三「木簡と井戸の関連性について」C 岡本範之「平安期における甲斐国巨麻郡の動向」D	小島弘義「II 諏訪前A遺跡第3地区 4 調査成果」E 渡辺一『鳩山窯跡群II』F
		渡辺一「南北企窯跡群の須恵器の年代」F 長谷川厚はか「三浦半島の古代遺跡における 小矢部窯址産土器の同定(2)」E 鶴間正昭「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」E
厚木道遺跡A	田村憲美「村落と開発」D 藤井一二「開拓と村落」D	田尾誠敏「相模の羽釜」E
シンポ15 シンポ16		
シンポ17	笛生衛「千葉県の古代末期集落遺跡」D 大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について5」C 浅野充「律令制下の地方行政について」C 井上尚明「集落遺跡としての南鍛冶山遺跡」C 加藤信夫「南鍛冶山遺跡と下ノ根遺跡の概要について」C 関和彦「南鍛冶山遺跡の史的性質」C 鳥養直樹「南鍛冶山遺跡シンポジウム雑感」C 丸山理「南鍛冶山遺跡シンポジウム所感」C 宮瀬交二「墨書き器と集落遺跡」C 坂口滋皓「遺跡出土の皇朝鏡について」C 飯塚武司「多摩丘陵の遺跡群」D 鶴間正昭「古代の丘陵開発」D	長谷川厚「土器について」『草山遺跡III』F 八木勝行「志太地域における律令期須恵器について」F 瀬川裕市郎「煮堅魚と堀形土器、覚え書2」F 比田井克仁「一地方窯成立の史的契機」F 森隆「近江産縁袖陶器の編年と器形的系譜に関する若干の問題」F 河野喜映「土器からみた南鍛冶山遺跡の年代」E 諸橋千鶴子「三浦半島の類製塙土器について」E
御屋敷添遺跡C	大上周三「古代集落の建物群類型について」C	直井雅尚「古代土器の編年研究に対する疑問と視点」F 渡辺一「関東・東北地方の須恵器供體形態に見る地域性」F 長谷川厚「東国における「律令的土器様式」の成立と展開」E 平野吾郎「遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開」F 後藤建一「須恵器の編年 5 東海」F
シンポ18		高橋一夫「埼玉における古代窯業の展開」F 田尾誠敏「甲斐型环の初相」F 田尾誠敏「第18号住居址出土の甲斐型环について」F
馬場遺跡B	大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について6」C 宇野隆夫「集落」CD	宇野隆夫「律令社会の考古学的研究」F
	國平健三「奈良平安時代の集落」C 滝澤亮「大谷向原遺跡」C	坂詰秀一「南多摩窯跡群（山野美容芸術短期大学校内）」F 林部均「律令国家と畿内産土師器」F 綿貫邦男ほか「群馬県における灰釉陶器の様相について（1）」F 國平健三「「相模型杯」出現期の意義」E
原口遺跡C 山王A遺跡A	大上周三「律令期集落解体と土地利用転換」CD 服部みはる「神奈川県藤野町周辺の平安時代遺跡」C	田尾誠敏「相模地方の甲斐型土器覚書」F 佐野五十三「駿河国における甲斐型环・駿東型环の成立」F 坂詰秀一「南多摩窯跡群（東京造形大学宇津貞校地内）」F 服部敬史「関東地方の奈良・平安時代の須恵器生産」F 渡辺一「南北企群における須恵器生産の実態」F
シンポ19 シンポ20	山口英男「農耕生活と馬の飼育」D 宮瀬交二「日本古代の村落と開発」D	小林信一「関東の土器」F 高橋照彦「施釉陶器の模倣対象－磁器か金属器か」F
シンポ21		山梨県考古学協会『甲斐型土器』F 平野修「甲斐型土器の定義」F 山下差司「甲斐型土器の編年」F 田尾誠敏「関東地方出土の甲斐型土器」F 瀬田正明「甲斐型土器の年代」F 田尾敏誠「相模における駿東型土器の分布について」F
	小林泰文「古代の木簡」C 関和彦「古代建物考」C 大上周三「奈良・平安時代集落研究の到達点とその展望」CD 笛生衛「古代の村」D	酒井清治「生産地の様相と編年」F 瀬川裕市郎「煮堅魚と堀形土器、覚え書3」F 田尾誠敏「田島弁天山横穴11号墓出土の畿内産土器環について」F 鶴間正昭「多摩ニュータウンNo.342遺跡」F
	大上周三「本郷遺跡の堅穴住居」C	

官衙（国府・郡衙・駅家等）A	寺院 B	年代
前場幸治『古瓦考』	須田誠「海老名市相模国分寺塔跡」 前場幸治『古瓦考』	1993 (平5)
		9 9
		10
		11
		12
宮瀬文二「相模国高座郡と天武系皇族」		1994 (平6)
高島英之「大磯町馬場台遺跡出土の銅印についての覚書」	滝澤亮ほか『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書IV』	1 2
荒井秀規「茅ヶ崎市居村「放生木簡」をめぐって」		3
河野喜映ほか「神奈川県」「古代官衙の終末をめぐる諸問題」		3
田中広明「南関東地方の古代官衙の終末」		3
中村太一「古代東國の水上交通」		3
松尾昌彦「「厨」銘墨書き土器考」	富永樹之「村落内寺院の展開 上」	3
		5
	海老名市温古館『天平の光と華』	5
平塚市博物館『掘り起された平塚II』		6
	菱沼一憲「相模国分寺雜考」	7
		8
		9
		9
		9
		10
河野一也「相模国分寺」	岡本孝之「下寺尾寺院跡の保存にむけて」 河野一也「相模国分寺」	11 11
		12
		12
	河野一也「相模国分寺の屋瓦と造営」	1995 (平7)
明石新「相模国府域の集落」	大坪宣雄ほか『黒川地区遺跡群調査報告書VI』	2 2
荒井秀規「政と国府」	岡本勇ほか「中山毎吉 その人と業績」	3
荒井秀規「神奈川県古代史研究文献リスト3(新補)」		3
加藤信夫「南鎌治山遺跡」		3
國平健三「綾瀬市宮久保遺跡」		3
明石新「相模国府域の様相」		3
斎藤忠「国庁と国分僧寺・尼寺との交通路について」		3
岡本孝之「下寺尾寺院跡研究のテーマ」	富永樹之「村落内寺院の展開 中」	4
明石新「発掘から見た相模国府」	川島実佳子「下寺尾寺院跡関連遺物におけるこれまでの私の作業」	4
荒井秀規「相模国府の所在をめぐる研究動向と今後の課題」		5
國平健三「相模国府の論点」		5
中村太一「東国国府の立地と交通路」		5
	岡本孝之「下寺尾寺院跡調査の成果」	6
	寺井朗雄「下寺尾寺院跡の礎石追跡調査報告」	7
	海老名市遺跡調査会「相模国分二寺に使われた石材の産地について」	8
	河野喜映「下寺尾寺院跡研究の一視点」	8
平川南「国府跡および国府推定地出土墨書・刻書土器集成(稿)」	大村浩司「下寺尾七堂伽藍跡の調査」	10
丸山理「今小路西遺跡新聞記事集成」		11
中村順昭「郡家の所在と編成」		12
		12
明石新「相模國「国厨家」について」		1996 (平8)
明石新「幻の相模国府をもとめて」		2 2
木下良「東海道」	岡本孝之「鶴田榮太郎と七堂伽藍」	3 3
河野喜映「多摩丘陵南側の武藏と相模の国界について」	赤星直忠「下寺尾寺院跡」	4
	富永樹之「村落内寺院の展開 下」	5
	富永樹之「宮ヶ瀬遺跡群VII」	5
	岡本孝之ほか「礎石の調査」	6
	横山太郎「横浜市蘇原不動原遺跡」	6
		7
		7
		8
岡本東三「東国の古代寺院と瓦」	岡本孝之「下寺尾寺院跡関連地名考」	9
		10
		10
		10
		10
明石新「相模国」		11
		11
		11
		11
		12
藤沢市教育委員会『神奈川の古代道』	岡本孝之「七堂伽藍は法起寺式か」	1997 (平9)
	河野一也「相模の初期寺院」	1 1
		2

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
シンポ22	高杉博章「大谷真鯨遺跡」C 鶴間正昭「古代末期の居住形態に関する覚書」C 大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について」C	瀬田正明「甲斐型壺の成立年代について」F 渡辺一「武藏とその周辺の須恵器」F 斎藤孝正「神奈川県出土の灰釉陶器・緑釉陶器」F
シンポ23	岩崎卓也「原始」C 鬼頭清明「古代」C	高橋照彦「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」F 城ヶ谷和広「尾張猿投窓と尾北窓」F 服部敬史「八王子市船田遺跡の平安時代集落」E 田尾誠敏「越境する相模型土器」E 諸橋千鶴子「神奈川」E
シンポ24	大上周三「集落・墳墓分布にみる秦野の古代社会」C 大上周三「古代本郷遺跡の一特質」C	森原明廣「山梨県地域における古代末期の土器様相」F
シンポ25	愛名宮地遺跡B 前田清彦「堅穴住居・竈・掘立柱建物」C	古代の土器研究会『古代の土器研究3 施釉陶器』F 冀淳一郎「施釉陶器研究の現状と課題」F 高橋照彦「東国の施釉陶器」F 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」F
シンポ26	仲山英樹「墨書き器と集落遺跡」C 田中慎昭「古代村落史研究の方法的課題」C 宮滝交二「丘陵地域の古代村落」D 河西健二「富山県の堅穴遺構と建物空間（その1）」C 大上周三「秦野市草山遺跡」C 大坪宣雄「海老名市本郷遺跡」C 加藤信夫「南銀治山遺跡」C 國平健三「綾瀬市宮久保遺跡」C 鈴木重信「多摩丘陵東端部の古代集落」C 滝澤亮「相模原市田名塩田原地区遺跡群」C 中田英「平塚市向原遺跡」C 明石新「相模国府城の様相」CD 渡辺一「丘陵開発論の現状と課題」D	渡辺一「武藏国の須恵器生産の各段階」F 田尾誠敏「相模地方の甲斐型土器覚書II」F 高橋照彦「平安期緑釉陶器の展開と終焉」F 長谷川厚「東国における律令制成立以前の土師器の特徴について」E 長谷川厚「東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向」E
戸根不動原遺跡B		
シンポ27	服部敬史「窯業生産からみた多摩丘陵の開発」D 大塚真弘「古代相模国における堅穴住居の変遷について」8C 茅ヶ崎市教育委員会「湘南の低地遺跡」C 坂井秀弥「律令以後の古代集落」D	高橋照彦「緑釉陶器」F 山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」F 服部敬史「八王子市船田遺跡の平安時代集落（5）」F 田尾誠敏「相模地方における律令制成立期の土器様相」EF
シンポ28	河野喜映「多摩丘陵南側の武藏と相模の国界について」C 坂塚武司「奈良時代の多摩ニュータウン地域」C 岡本孝之ほか「茅ヶ崎市における奈良平安時代の遺跡の概観」C 坂井秀弥「遺跡が語る開発と村の歴史」C 帝京大学山梨文化財研究所『特集「古代の土地開発」』D 高橋学「古代の地形環境と土地開発・土地利用」D 北野博司「初期莊園と土地開発」D 原明芳「信濃における奈良・平安時代の集落展開」D 猪股喜彦「金川扇状地の土地開発」D 坂井秀弥「遺跡が語る開発と村の歴史」D 鈴木徳雄「古代化武藏の開発と集落」D 鶴間正昭「多摩丘陵の古代開発」D	長谷川厚「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」E 城ヶ谷和広「律令体制の形成と須恵器生産～」F 中三川昇「三浦半島東岸地域における律令制成立期前後の 土器様相について」E 水谷寿克ほか「篠窯跡群について」F
千年伊勢山台北遺跡A	宮沢公雄「古代における山崎地域開発の一様相」D 河合英夫ほか「神奈川県の状況」C 木下良ほか「神奈川の古代道」C	
シンポ30		

官衙（国府・郡衙・駅等）A	寺院 B	年代	月
國平健三「相模國府研究の現状」	鈴木助清「七堂伽藍関係伝説集成」	1997	3
藤沢市教育委員会「藤沢・神奈川の古代文字」		(平9)	3
			3
			3
			3
			3
			3
菊川英政「古代鎌倉の様相」			4
杉山幾一「相模の国府」			4
			5
			5
	岡本孝之「千代廢寺について」1		6
			6
			6
	岡本孝之「千代廢寺について」2		7
木下正史「国衙・郡衙・郷衙遺跡の配置計画」	岡本孝之「千代廢寺について」3		8
中島広顯「関東官衙遺跡の配置計画」	岡本孝之「千代寺院跡関係文献目録」		8
	清水行信「神奈川県の古代寺院」		8
河合英夫「川崎市橋樹郡衙関連遺跡の調査」	須田誠「史跡相模國分寺跡僧坊跡」		9
			10
	池田正一郎「鎌倉期における相模國分寺」		11
	海老名市教育委員会「史跡相模國分寺跡出土の水煙について」		11
	茅ヶ崎市教育委員会「下寺尾寺院跡の研究」		11
			12
			12
明石新「太住郡域の集落の様相(上)」		1998	2
岡本孝之「茅ヶ崎古代東海道考」		(平10)	3
			3
永井肇「古代交通と相模國府」			3
			3
			3
荒井秀規「神奈川県古代史素描」			4
河野一也「相模國分寺」	河野一也「相模國分寺」		5
	関東古瓦研究会「聖武天皇と国分寺」		5
	岡本孝之「千代廢寺跡の研究的復元」		5
明石新「相模國府の所在について」	河合英夫「国分寺と郡寺」		7
明石新「文字の世界」			7
荒井健治「武藏から見た相模國府」			7
荒井秀規「相模國府研究史」			7
大上周三「郡衙と郷」			7
河合英夫「国分寺と郡寺」			7
田尾誠敏「土器から見た相模國府」			7
山中敏史「中央から見た相模國府」			7
平塚市博物館「相模國府とその世界」			8
木下良「道と駅」			8
かながわ考古学財団「公開セミナー 古代の大型建物跡」			9
滝澤亮「相模國高座郡衙の所在について」	飯田孝「国分寺薬師堂跡およびその付近の遺跡旧觀と出土遺物」		10
	岡本孝之「海老名の遺跡と岡本先生の考古学」		10
			11
			12
			12
		1999	2
		(平11)	2
	岡本孝之「千代寺院跡の再検討」		3
	池田敏宏「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較検討」		3
	境雅仁「愛名宮地遺跡」		3
	岡本孝之「千代寺院跡の再検討」		3

【関連する主なシンポジウム】

- シンボ1 1978.4 神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試案（第1版） 神奈川考古同人会土器研究グループ
 シンボ2 1980.11 シンポジウム盤状环－奈良時代土器の様相－ 武相古代研究会・東洋大学未来考古学研究会
 シンボ3 1981.11 平安時代の土器・陶器－各地域の諸様相と今後の課題－ 愛知県陶磁資料館
 シンボ4 1982.7 関東地方における9世紀の須恵器と瓦 立正大学
 シンボ5 1983.1 奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－(第2版) 神奈川考古同人会
 シンボ6 1983.10 房総における奈良・平安時代の土器 史館同人・市立市川考古博物館
 シンボ7 1984.4 久保木簡の語る古代の相模 神奈川地域史研究会
 シンボ8 1986.2 古代末期～中世における在地系土器の諸問題 神奈川考古同人会
 シンボ9 1986.12 灰釉陶器の時代とその流通 静岡県考古学会
 シンボ10 1987.12 奈良時代前半の須恵器編年とその背景－前内出窯跡とその後－ 埼玉考古学会
 シンボ11 1987.1 房総における歴史時代土器の研究 房総歴史考古学研究会
 シンボ12 1988.10 居村B低湿地遺跡が語る古代の相模 神奈川地域史研究会
 シンボ13 1990.2 細釉陶器の生産と消費 斎宮歴史博物館
 シンボ14 1990.3 「御成遺跡にみる『古代の鎌倉』」御成小学校移転改築を考える会・神奈川地域史研究会
 シンボ15 1990.10 「南銀治山遺跡を考えるシンポジウム」 藤沢市文書館・神奈川地域史研究会
 シンボ16 1990.10 「木簡学会公開研究会フォーラム 古代東国と木簡」 川崎市民ミュージアム
 シンボ17 1990.11 関東官衙遺跡の検討
 シンボ18 1991.11 国分寺史蹟指定70周年、海老名市制20周年を考える市民シンポジウム「相模古文化：歴史と海老名」海老名市役所

特記事項	集落址（構造C・立地D）	土器（在地E・搬入F）
シンポ31		古代生産史研究会『東国須恵器』F 鶴間正昭ほか「武藏国の窯跡出土の須恵器」F 鶴間正昭「律令制成立期の須恵器の系譜」F 江口桂「律令制変質期の須恵器の系譜」F 田尾誠敏「相模湾沿岸部出土の甲斐型土器素描」F 田尾誠敏「相模地方出土の外面縦暗文を有する土師器環の系譜」（上）F 高橋照彦「中世食文化の様相」F 高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」F 菊川英政「古代鎌倉の様相」C
		渡辺一「関東地方の土器生産」F 城ヶ谷和広「東海地方における古代の土器生産と流通（予察）」F 赤井博之「新治窯跡群東城寺森木窯跡採集須恵器の新資料」F 古代研究部会『三浦半島における歴史時代土器の研究（1）』EF 坂詰秀一ほか『南多摩窯跡群（八王子みなみ野シティ内）』I, II, F 三河考古刊行会『須恵器から灰釉陶器へ』F
シンポ32		
	鈴木徳雄「古代北武藏の土地利用と集落」D	赤井博之「新治窯跡群の基礎的研究」F 國下多美樹「長岡京前後の土器様式」F 山中章「桓武朝の新流通構造」F 貴元洋「古代遠江の食膳具」F 渡辺博人「美濃須恵窯における奈良・平安時代の様相」F
シンポ33	明石新「太住郡域の集落の様相（上）」C 西川修一ほか「御屋敷添遺跡・他」（第二分冊）C 望月芳「南銀治山遺跡発掘調査報告書」第5巻C 上本進二ほか「藤沢低地の地形発達と遺跡形成」D	城ヶ谷和広「猿投窯における須恵器生産の展開」F 田尾誠敏「相模地方出土の外面縦暗文を有する土師器環の系譜（下）」F 尾野善裕「灰釉陶器生産技術の系譜」F 斎藤孝正「猿投黒窯地区における緑釉陶器生産の展開」F 桜岡正信ほか「金属器と金属器指向」F 田尾誠敏「南西田遺跡出土の異系統土師器環について」F 依田亮一「神奈川県出土緑釉陶器の諸様相」EF 赤井博之「古代常陸新治窯跡群の基礎的研究」F
シンポ34		田尾誠敏「土器から見た相模國府」F
シンポ35		五島美術館・愛知県陶磁資料館『日本の三彩・緑釉』F
シンポ36	かながわ考古学財団『公開セミナー 古代の大型建物跡』C 滝澤亮一「相模国高座郡衙の所在について」C 海老名市史原始古代班『えびなのは歴史10』C 上本進二ほか「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」D	田尾誠敏ほか「5号住居址出土の土器について」E 佐野五十三「須恵器花瓶の成立」F 貴元洋「西湖窯編年の再検討」F 伊丹徹『交流の文化史』F 中三川昇『地域研究の成果－古代－土器様相の特色とその背景』EF 山下幸司ほか「奈良・平安時代の編年」F 田尾誠敏「土器・陶器の変遷と王子ノ台集落」E 田尾誠敏「土器からみた「相模」の成立課程」E 田尾誠敏「土器からみた古代の茅ヶ崎」F

- シンポ19 1992.8 大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題 大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
- シンポ20 1992.9 古代の土器研究会第1回シンポジウム－律令的土器様式の西・東1 土師器－ 古代の土器研究会
- シンポ21 1992.11 甲斐型土器－その編年と年代－ 山梨県考古学協会
- シンポ22 1993.10 古代の土器研究会第2回シンポジウム－律令的土器様式の西・東2 須恵器－ 古代の土器研究会
- シンポ23 1994.3 古代官衙の終末をめぐる諸問題 東日本埋蔵文化財研究会
- シンポ24 1994.9 古代の土器研究会第3回シンポジウム－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－ 古代の土器研究会
- シンポ25 1994.10 古代東国府と景観
- シンポ26 1995.3 かながわの古代集落 神奈川県考古学会
- シンポ27 1996.3 湘南低地遺跡について 茅ヶ崎市教育委員会
- シンポ28 1996.9 古代の土器研究会第4回シンポジウム－律令的土器様式の西・東4 煮炊具－ 古代の土器研究会
- シンポ29 1997.1 遺物からみた律令国家と蝦夷 東日本埋蔵文化財研究会
- シンポ30 1997.2 関東の初期寺院 関東古瓦研究会
- シンポ31 1997.3 東国須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－ 古代生産史研究会
- シンポ32 1997.8 古代寺院の出現とその背景 埋蔵文化財研究会
- シンポ33 1998.3 武藏国シンポジウム 国府・国分寺・武藏路 武藏国シンポジウム実行委員会
- シンポ34 1998.7 東国の国府inWAYO 学校法人和洋学園・和洋女子大学
- シンポ35 1998.8 相模國府とその世界 平塚市博物館
- シンポ36 1998.9 公開セミナー 古代の大型建物跡－役所か邸宅か－ (財)かながわ考古学財団

神奈川県内の「かわらけ」集成（4）

中世研究プロジェクトチーム

過去3年間にわたって「かわらけ」の集成を行い、中世の都市域(鎌倉・小田原)を除く範囲の集成作業はひとまず終了した。しかし、県内における報告書の刊行状況は我々の集成作業のベースをはるかに上回っており、一度集成した地域でも軽視できない調査事例が報告され続けている。これらの重要な出土事例を看過して考察を進めることはできないため、今年度は引き続き集成の追加を掲載することとした。

追加分は来年度以降も逐次掲載していく予定であるが、地域ごとの集成は昨年度の掲載分で一段落ついている。ここでは、昨年度に掲載した地域(綾瀬市、大和市、海老名市、相模原市、平塚市、厚木市、伊勢原市、秦野市、松田町、清川村)を対象として、「かわらけ」の出土傾向をまとめてみたい。

以上にあげた市町村域で調査された遺跡は、松田町(松田城)と清川村(長福寺址)を除いて、相模川や境川の流域に形成された沖積地とそれを取り巻く段丘、丘陵地帯に所在している。多くの遺跡で調査範囲が限定されていることもあり、「かわらけ」が1点から数点といった出土事例が多い。また、遺構群の全体像がつかめる遺跡も少ない。こうしたなかで、綾瀬市宮久保遺跡、海老名市上浜田遺跡、相模原市新戸遺跡、平塚市豊田本郷遺跡・御所ヶ谷遺跡・阿弥陀畠遺跡、伊勢原市成瀬第二地区遺跡群、松田町松田城址などは、遺構・遺物が比較的豊富で、遺跡の性格がある程度明らかになっている。これらの遺跡における「かわらけ」の出土様相を検討することで、「かわらけ」の特質をある程度導き出すことができよう。

宮久保遺跡は目久尻川の右岸に形成された舌状台地上に位置する。大溝と柵列で囲まれた敷地内に掘立柱建物址や竪穴状遺構、井戸址などの遺構群が5箇所以上に分かれて展開するが、その中心は柵列による長方形の区画内に総柱の大型掘立柱建物を配した敷地南東部の屋敷地にあり、居住者は在地領主層クラスの武士が想定されている。また、この屋敷地の周囲に点在する小型の建物址は、家人や下人など従者の住居とみられる。調査範囲全体で61点の「かわらけ」が出土しているが、中心的な区画内の出土点数が35点あり、このうちの4点は大型の掘立柱建物址(SB23)を囲む溝(SD03)から出土した「非ロクロ成形(京都系)」のものである。この区画内からは中国製陶磁器や国内諸窯の陶器がまとまって出土しており、中世前期における在地領主層の居館の様相を良好に示す遺跡と言える。遺跡一帯は中世の渋谷荘に含まれており、これらの遺構群は渋谷荘の支配者であった渋谷氏一族の居館跡と理解されている。遺跡の存続年代は12世紀中葉から14世紀とされているが、「かわらけ」は13世紀前半代のものにまとまりがある。

上浜田遺跡も目久尻川の流域に所在する遺跡で、宮久保遺跡と距離的に近く、同じく中世の渋谷荘内にある。谷戸の西側斜面を造成した上下二段の削平面上に、総柱の掘立柱建物址を中心とする遺構群が配置されている。その西側の丘陵上には、馬の放牧場と想定される断面箱築研状の溝による6箇所ほどの区画が認められ、農事にも関わる武士の居館跡と推定されている。「かわらけ」の出土点数は29点で、このうちの28点は建物群が所在する削平面上の出土である。また、この削平面上からは高麗青磁と青白磁の梅瓶を含む舶載陶磁器や国産陶器がまとまって出土しており、居住者の階層を示唆している。遺跡の存続年代は13世紀中葉～15世紀前半代とされているが、これらの「かわらけ」も年代的には14世紀代にまとまりがある。

新戸遺跡は相模川東岸の河岸段丘上に所在する遺跡で、年代的には13世紀後葉から14世紀中葉と推定される。調査範囲の西側で掘立柱建物址を中心とする遺構群が密集して発見され、復元された掘立柱建物址は159棟を数える。ただし、建物址の大部分は桁行2～3間×梁間1間、面積20m²以下の小規模なもので占められており、梁間2間以上の総柱建物は15棟に過ぎない。これらの建物址は8箇所ほどに集中しており、その集中箇所は掘立柱建物址数棟と竪穴状遺構を単位とする一軒の屋敷地と理解されているが、敷地には明確な区画施設が認められない。中世遺構群に伴う「かわらけ」はわずかに8点で、陶磁器の出土量もきわめて少ない。こうした遺構・遺物のあり方は上記の2遺跡と明らかな格差がみられ、この遺跡の中世遺構群は一般的な村落跡の一部と考えられる。

豊田本郷遺跡は相模川西岸の沖積地（自然堤防・後背湿地）に所在する遺跡である。道路幅の調査であり、発見された遺構の様相から遺跡の性格を特定することは難しいが、直角に折れ曲がる中世後期の大規模な溝が確認されている。調査範囲内における溝の規模は、幅4m・深さ1mである。この溝による区画内に明確な掘立柱建物址は発見されていないが、多数のピットが検出されており、中世後期の大溝（堀）に囲まれた居館跡と推定される。個々の遺構に伴う「かわらけ」は1点から数点程度であるが、遺跡全体では117点の「かわらけ」が出土しており、中世後期に城館跡で「かわらけ」の出土量が大幅に増加する傾向とよく符号するものと言える。

御所ヶ谷遺跡は伊勢原台地の南端部に所在する遺跡である。溝で区画された敷地内から総柱の大型掘立柱建物址と小型の掘立柱建物址が各1棟発見されており、居住者の階層は明確でないが、上層農民以上の屋敷地と推定される。遺跡全体で77点の「かわらけ」が出土しているが、このうちの60点は屋敷地の北東側に隣接する「御所塚」からの出土である。この塚は墳丘をほとんど失った古墳とみられ、中世後期に塚の周囲で何らかの祭祀、または葬送儀礼などが行われた可能性が想定される。

阿弥陀畠遺跡は大磯丘陵の東側裾部に所在する中世墓地である。谷戸の東側斜面を造成した削平面上から五輪塔群2ヶ所、積石塚墓3基、土壙墓19基、配石墓18基が発見されており、年代的には板碑の紀年銘や五輪塔の形態から14世紀初頭から15世紀代と推定されている。「かわらけ」は積石塚墓の墳丘を中心に13点出土しているが、ほぼ半数に油煙の付着が観察されており、それらの多くは墓前祭祀等で灯明皿として使用されたものと考えられる。

成瀬第二地区遺跡群は伊勢原台地上に所在し、中世の丸山城跡の範囲を含む広大な遺跡群である。丸山城跡では以前から土壙などが地表面上で確認されていたが、近年の発掘調査で大規模な堀や土壙、土橋状施設が発見され、戦国期を中心とする城跡であることが判明した。試掘調査では65点の「かわらけ」が出土しており、城跡全体では相当な量になることが予測される。

松田城跡も15世紀後半代を中心とする山城である。12,000m²におよぶ調査面積に比べて、「かわらけ」の出土点数は33点であり、決して多くはない。しかし、調査範囲は城域南端の階段状に造成された帶曲輪部分であり、城郭内の主たる居住空間ではない。主郭などの中心部では、これ以上の「かわらけ」が出土するものと想定される。

以上にあげた7遺跡のうち、宮久保遺跡と上浜田遺跡は在地領主層クラスの武士の屋敷地として大過ないと思われる。両者は遺跡の存続時期に若干の差があるが、重なる部分も多い。また、「かわらけ」の出土点数も大差なく、在地領主層の「かわらけ」の消費形態を示唆するものと言えよう。しかし、「かわらけ」が出土すると言っても、両遺跡ともにおよそ200年間と想定される居館の存続年代に比べて、「かわらけ」が示

す使用年代の中心はそのうちの半世紀程度に限られており、継続的に使用されていたとは考えづらい。おそらく、日常的にはほとんど使われず、何らかの機会に「かわらけ」が一過性に使用されたものとみられる。このようなあり方を、「かわらけ」が恒常に大量消費される都市域とも、また後述する中世後期の城跡のあり方とも異なる、中世前期における在地領主居館の様態として抽出できるのではないだろうか。

一方、松田城跡と丸山城跡（成瀬第二地区遺跡群）は中世後期の城跡であり、この他に厚木市七沢神出遺跡も七沢城跡の一部として同様の性格をもつと推定される。また、不明な点が少なくないが、豊田本郷遺跡も外周に堀をめぐらせた中世後期の方形居館として、これに準ずる性格を与えてよいと思われる。中世後期における武家儀礼の普及・定着と「かわらけ」の大量使用が密接に関わることはたびたび指摘されており、県内でも中世後期の城跡で出土事例や出土量が多いことは昨年度にも触れた。上記のように「かわらけ」が何らかの機会に一時的に使用される中世前期の在地領主居館のあり方と、武家儀礼に従ってさまざまな儀式や年中行事などで消費される中世後期の城館跡では、「かわらけ」の出土様相にも何らかの差が生じているものと予測される。現状では、そこまでの追求はできないが、今後こうした視点での分析・検討が必要とされよう。なお、御所ヶ谷遺跡も中世後期を中心とする屋敷地であるが、「かわらけ」の大部分は塚からの出土であり、葬送儀礼や何らかの祭祀に関わって使用されたとみる方が妥当であろう。

この他、平塚市四之宮下郷遺跡やその周辺の沖積微高地上に展開する遺跡（高林寺遺跡、林B遺跡など）でも、「かわらけ」が出土している。調査地一箇所ごとの出土点数は少ないが、範囲を広くとってまとめてみれば相当な点数になるものと推測される。陶磁器類も少なからず出土しており、中世村落の存在が想定されるが、これまでの調査では掘立柱建物址や井戸址など明確な居住関連施設は検出されていない。昨年度に触れた相模川対岸の茅ヶ崎市域南部では、沖積微高地上に立地する中世の村落遺跡が数多く発見されている。平塚市四之宮周辺は古代の相模国府や大住郡家の所在が想定され、早くから開発が及んだ地域であり、中世においても茅ヶ崎市域と同様な様相をもつものと予測されるが、不明確な部分が多く、はっきりしたことは言えないのが現状である。

以上のように、昨年度集成した地域において比較的まとまって「かわらけ」が出土した遺跡に関しては、①在地領主層の居館跡、②城館跡、③葬送儀礼ないしは祭祀等の宗教色の強い場、とそれぞれの性格を想定することが可能である。出土点数が少ない他の遺跡についても、このような性格をもつ遺跡の一部を調査した結果が多いのではないかと推測される。

しかし、①～③における「かわらけ」の使用は中世全般を通じて認められるわけではなく、時間的な消長を伴うことが一般的である。すなわち、中世前期においては「かわらけ」が都市域で大量に消費される一方で、在地領主層の居館（①）では恒常的な使用がなされず、一過性に一定量が使用される。しかし、中世後期になると、都市部で前代と同様に大量消費されるとともに、新たに出現した城館（②）でも儀式や儀礼的な酒宴で一定量以上の「かわらけ」が頻繁に使われるようになる。また、この時期には葬送儀礼や祭祀等（③）に伴う宗教容器としての使用も普及・定着する。

ところで、ある程度面的な調査が行われ、掘立柱建物址などの居住施設は確認されるが、「かわらけ」がほとんど出土しない遺跡も存在する。新戸遺跡をその典型としてとらえうるが、このような遺跡を部分的に調査すれば、中世の遺構は存在するが、「かわらけ」はほとんどないということになる。溝や土坑、並ばないピット群などで構成される中世遺跡の報告事例が多いが、そこには都市ではなく、①～③にも当てはまらない、一般村落のあり方が示されているのではないだろうか。

例 言

1. 本集成は、1997年1月以降、1999年9月まで刊行された遺跡発掘調査報告書に基づき、神奈川県内出土の「かわらけ」を集成したものである。

2. 集成表の項目は次の通り。

(1)番 号：表は遺跡ごとの集成である。遺跡番号は昨年度分から引き続いており、図版の番号に対応している。

(2)遺 跡 名：引用文献記載の遺跡名を示す。

(3)所 在 地：引用文献記載の所在地を示す。

(4)出土遺構：「かわらけ」が出土した遺構名を示す。

(5)出土点数：引用文献の図版に掲載されているもの、および文中に数量の記載があるものを合計した。

(6)伴出遺物：引用文献記載の伴出遺物を示す。収録にあたって名称を統一した。

(7)文献番号：文献一覧の番号に対応する。番号は昨年度分から引き続いている。

3. 図版については次の通り。

(1)縮尺 1/6

(2)実測図右側の数字は上から、口径・底径・器高を示す。なお、文献中図版のみで、法量記載のないものについては省略した。

(3)図版は当該文献からの引用であるが、収録にあたり再トレースを行っている。



第1図 かわらけ出土遺跡分布図

神奈川県内のかわらけ出土遺跡一覧表（補遺）

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
117	西ノ谷遺跡	横浜市都筑区南山田2丁目	床面	4	常滑窯甕, 三河系鉢	114
			9-H	3	白磁蓋, 龍泉窯系青磁劃花文碗, 渥美窯甕, 羽釜	
			9-I	2	白磁合子, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・皿, 常滑窯三筋壺	
			10-I	5	白磁碗・皿, 青磁碗, 常滑窯鉢・三筋壺・甕, 渥美窯鉢・片口鉢・甕	
118	関耕地遺跡	横浜市青葉区荏田字関耕地231他	1号堅坑	1		115
119	中ノ宮北遺跡	横浜市泉区和泉町3217	道路状遺構	4	瀬戸窯擂鉢, 常滑窯片口鉢・甕, 渥美窯甕, 東播系陶器	116
120	川名森久地区 遺跡群	藤沢市川名264	1号やぐら	2		117
			2号やぐら	19	陶器壺	
			3号集石	1		
			4号集石	3		
			5号集石	1		
121	大源太遺跡	藤沢市片瀬1-1-1	A~Cトレント	4		118
122	片瀬大源太遺跡	藤沢市片瀬1-1-1	遺構外	1		119
123	本在寺遺跡	藤沢市小塚字本在寺817-1	方形土壙1	2	瀬戸窯天目茶碗	120
			土壙1	1		
			Pit 53	2		
124	大町谷東遺跡	横須賀市津久井72	96-2A地点遺構外	2	瀬戸美濃窯擂鉢, 常滑窯甕	121
			96-2C地点遺構外	1	羽釜	
			遺構外	1	羽釜	
125	長浜ノ上遺跡	横須賀市長井4	遺構外	1		122
126	十二所神社遺跡	横須賀市芦名1-18~21先	S C	2	渥美窯甕	123
			T P I	1		
			T P L	1		
			10区	2		
127	長岡南遺跡	横須賀市長沢2-9	Bトレント	2	青磁鉢	123
128	八幡神社遺跡	横須賀市久里浜2-11-1	W地区	1	瀬戸美濃窯長石釉皿・折縁皿, 常滑窯甕	123
129	矢畠金山遺跡	茅ヶ崎市矢畠字金山46	豎穴状遺構	3	龍泉窯系青磁鉢, 瀬戸窯天目茶碗	124
			1号溝状遺構	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・鉢・碗, 瀬戸窯灰釉皿, 瀬戸美濃窯灰釉皿・擂鉢, 常滑窯片口鉢・甕か鉢	
			2号溝状遺構	1		
			遺構外	1		
130	西久保広町遺跡	茅ヶ崎市西久保846他	1号溝状遺構	2	備前窯擂鉢	125
131	臼久保遺跡	茅ヶ崎市芹沢字臼久保4222他	遺構外	3	龍泉窯系青磁蓮弁文碗, 瀬戸窯灰釉折縁皿・縁釉皿, 常滑窯片口鉢	126
132	上ノ町・広町 遺跡	茅ヶ崎市西久保1528	第2区遺構外	1		127
			第3区第14号土坑	3		
			第4区ピット99	1		
			第6区第2号溝状遺構	1	瀬戸美濃窯灰釉碗, 尾張系羽釜	
			第6区第3号土坑	1	尾張系羽釜	
			第8区第2号井戸址	2		

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土 点数	伴出遺物	文献 番号
133	早川城跡	綾瀬市早川字清水 934	堀	2		128
			1号柱穴列	1	瓦質火鉢	
134	びわみ堂遺跡	綾瀬市深谷字落合 1145	I-1 T	1		128
			II-2 T	1		
			II-3 T	3		
135	長泉寺遺跡	綾瀬市早川字祖師 谷3188	2号集石	8	瀬戸窯褐釉壺, 常滑窯三筋壺・壺, 湿美窯刻文壺	128
136	神明若宮地区内遺跡	大和市福田510外	第1号溝状遺構	16	明染付小杯, 瀬戸美濃窯天目茶碗・鉄釉碗・志野皿・志野向付・灰釉皿・鉄釉稜皿・擂鉢, 美濃窯織部皿, 唐津碗	129
			第2号溝状遺構	5		
			第1号掘立柱建物址	4		
			第2号掘立柱建物址	1		
			第4号掘立柱建物址	1		
			第1号井戸址	2	瀬戸美濃窯灰釉皿・擂鉢, 唐津皿	
			第2号井戸址	3	瀬戸美濃窯灰釉皿・擂鉢, 唐津皿	
			第3号井戸址	12	瓦質風炉	
			第2号地下式坑	1	瀬戸窯灰釉卸皿, 瀬戸美濃窯天目茶碗	
			第3号地下式坑	2		
			第1号土坑	4		
			第3号土坑	1		
			第9号土坑	1		
			第11号土坑	3		
			第12号土坑	1		
			第13号土坑	1		
			第16号土坑	1		
			第2号ピット	1		
			第5号ピット	1		
			第9号ピット	1		
			第13号ピット	1		
			P-2 グリッド	2		
			P-3・4 グリッド	6		
			P-6 グリッド	1		
			Q-3 グリッド	1		
			S-2 グリッド	1	瀬戸美濃窯鉄釉碗	
			T-2 グリッド	2		
			試掘第3トレンチ	4		
			試掘第4トレンチ	2		
			遺構外	5	唐津皿・鉢, 常滑窯甕	
137	下鶴間城山遺跡	大和市下鶴間甲四 号722-2他	第1地下式坑	1		130
			第20号ピット	1		
138	国分尼寺北方遺跡	海老名市国分寺北 3032-1	第7次遺構外	1	同安窯系青磁碗, 青白磁碗, 瀬戸窯灰釉卸皿	131
139	山王久保遺跡 第8地点	平塚市岡崎字山王 久保3673	1号竪穴住居址	3	青磁碗, 陶器甕・擂鉢	132
			10号土坑	3		
			16号土坑	1		
			24号土坑	2		
			35号土坑	1		

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
140	真田・北金目遺跡	平塚市北金目 1422・1423	1区SS003	2	龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗, 山茶碗, 山茶碗窯系片口鉢・常滑窯甕	133
			1区SX001	1	青磁碗, 山茶碗窯系片口鉢, 常滑窯甕	
			1区遺構外	4	白磁碗, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・双魚文鉢, 山茶碗窯系片口鉢, 常滑窯片口鉢・甕	
141	高林寺遺跡第12地点	平塚市四之宮字諫訪前445-8	3号溝状遺構	2	陶器甕	134
142	愛甲宿遺跡第2地点	厚木市愛甲宿1066	SX-02	1		135
			SX-07	1	瀬戸美濃窯小壺, 常滑窯片口鉢	
			SD-03	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・輪花皿	
143	中荻野成井田遺跡	厚木市荻野1633	第9号土壤	2		136
144	東富岡・北三間遺跡(No.4)	伊勢原市東富岡字北三間407	4-1区遺構外	1	白磁碗・皿・四耳壺, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・鉢, 山茶碗・山茶碗窯系片口鉢, 瀬戸窯灰釉綠釉皿・灰釉片口鉢, 瀬戸美濃窯擂鉢, 常滑窯片口鉢・甕, 渥美窯甕・壺, 備前窯擂鉢, 瓦質火鉢	137
			4-3区遺構外	1	白磁碗・皿, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗, 山茶碗窯系片口鉢, 魚住窯片口鉢, 備前窯甕, 伊勢系土鍋	
145	上柏屋・〆引北遺跡(No.11)	伊勢原市上柏屋字北〆引907他	1号堀	4	明染付皿, 瀬戸窯小壺, 常滑窯片口鉢・甕, 猿投窯片口鉢, 瓦質火鉢	138
			1号掘立柱建物址	1		
			2号堅穴状遺構	1	瀬戸窯片口鉢, 常滑窯片口鉢	
			9号堅穴状遺構	5	常滑窯片口鉢・甕, 魚住窯片口鉢, 伊勢系土鍋	
			10号堅穴状遺構	6	山茶碗・山茶碗窯系片口鉢, 伊勢系土鍋	
			11号堅穴状遺構	8	白磁口禿皿, 龍泉窯系青磁蓮弁文碗, 山茶碗窯系片口鉢, 瀬戸窯灰釉菊皿・灰釉壺, 常滑窯甕	
			13号堅穴状遺構	2	山茶碗窯系片口鉢	
			14号堅穴状遺構	6	青白磁合子蓋, 龍泉窯系青磁劃花文碗, 山茶碗窯系片口鉢	
			5号道	1	山茶碗窯系片口鉢, 瀬戸窯擂鉢, 瀬戸美濃窯鉄釉小壺, 常滑窯甕	
			2号溝	4		
			25号土坑	2		
			37号土坑	1	瀬戸美濃窯擂鉢, 常滑窯甕	
			ピット群	2		
			遺構外	7	白磁口禿皿・壺, 龍泉窯系青磁蓮弁文碗, 瀬戸窯碗・灰釉折縁小皿・擂鉢・壺, 常滑窯片口鉢・甕, 渥美窯壺・甕, 魚住窯片口鉢	
146	上柏屋・〆引西遺跡(No.12東)	伊勢原市上柏屋字西〆引803他	遺構外	2	魚住窯片口鉢	138
147	三ノ宮・下御領原遺跡(No.12西)	伊勢原市大字三ノ宮字中初川988-1他	第1号礫集中	4	龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗	139
			遺構外	1		
148	神戸・上宿遺跡(No.15)	伊勢原市神戸字両毛703-5他	C31号土坑	1		140
			C1035号ピット	1		
			C1077号ピット	1		
			1区遺構外	1	白磁口禿皿, 同安窯系青磁皿, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗, 山茶碗窯系片口鉢, 瀬戸窯灰釉卸皿・灰釉袋物, 瀬戸美濃窯擂鉢, 常滑窯片口鉢	
			2区遺構外	3	青磁碗, 瀬戸美濃窯内禿皿, 常滑窯甕	

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
149	中里遺跡 (No.31)	秦野市上大槻字芦沢509-1他	遺構外	2	白磁端反碗, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗, 濱戸窯片口鉢, 常滑窯甕, 渥美窯甕, 山茶碗窯系片口鉢, 伊勢系土鍋	141
150	小南遺跡 (No.28)	秦野市南矢名字小南上2155-1他	K 7号溝及びK 1~11号土坑	1	同安窯系青磁碗, 濱戸窯灰釉碗・折縁皿, 濱戸美濃窯灰釉碗, 常滑窯甕	142
			遺構外	3		
151	北矢名蛇久保遺跡 (No.25下)	秦野市鶴巻字新野2289-3他	C 3号堅穴状遺構	1		143
			C 4号堅穴状遺構	1	常滑窯甕, 瓦質土器	
			C 2号地下式坑	1	常滑窯甕, 瓦質火鉢	
			C 15号溝状遺構	1		
			遺構外	1	青磁碗, 濱戸窯縁釉皿・灰釉瓶	
152	鉢ノ木遺跡 (No.27)	秦野市北矢名字田中234他	遺構外	15	白磁碗・皿, 同安窯系青磁碗, 龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗, 青白磁合子身, 美濃窯山茶碗, 濱戸窯灰釉皿, 常滑窯片口鉢・甕, 渥美窯甕, 備前窯擂鉢, 滑石製石鍋, 瓦質火鉢	144
153	河村城跡第VI地点	山北町岸字土佐屋敷2708	S B 0 4	1	常滑窯甕	145
			第2トレンチ	1	白磁碗・青磁碗	
			第5トレンチ	1		
			第8トレンチ	2	青磁片	
			第9トレンチ	2		
			第12トレンチ	5		
			第16トレンチ	2	擂鉢片	
			第28~31トレンチ	8		
			第34トレンチ	2		
			不明	1		145
154	馬場遺跡 (No.6)	愛甲郡清川村宮ヶ瀬字馬場1330他	北側斜面遺物包含層	2	白磁皿, 龍泉窯系青磁蓮弁文碗・碗, 明染付, 山茶碗, 濱戸美濃窯灰釉碗・天目茶碗・端反皿・折縁深皿・片口鉢・擂鉢・壺・徳利, 志戸呂窯皿	146
155	津久井城跡	津久井郡津久井町根小屋字城坂233	遺構外	17	白磁碗, 明染付碗, 中国製陶器碗, 濱戸美濃窯皿・擂鉢, 唐津皿	147
			1号土坑群	1		148
			礫溜り	5	濱戸美濃窯皿	
			B-5区	2	濱戸美濃窯灰釉皿・擂鉢	
			D-3・4区	2	明染付, 常滑窯甕	
			3号トレンチ	1		149
			4号トレンチ	1		
			11号トレンチ	1		
			1号堀	4		150

文献一覧

- 114 財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 1997「西ノ谷遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』23
- 115 観福寺北遺跡発掘調査団 1997「横浜市観福寺北遺跡群 関耕地遺跡発掘調査報告書」
- 116 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 1999『中ノ宮遺跡発掘調査報告書』
- 117 川名森久地区遺跡発掘調査団 1996『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書』II
- 118 大源太遺跡発掘調査団 1997『藤沢市No.11(大源太)遺跡確認調査報告書』
- 119 大源太遺跡発掘調査団 1997『片瀬大源太遺跡確認調査報告書』
- 120 藤沢市教育委員会 1998『藤沢市文化財調査報告書』第33集
- 121 横須賀市教育委員会 1998「埋蔵文化財発掘調査概報集VI」『横須賀市文化財調査報告書』第32集
- 122 横須賀市教育委員会 1999「長井台地遺跡群 長浜ノ上遺跡」『横須賀市文化財調査報告書』第7集
- 123 横須賀市教育委員会 1999「埋蔵文化財発掘調査概報集VII」『横須賀市文化財調査報告書』第33集
- 124 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査委員会・鎌茅ヶ崎市文化振興財団 1997『上ノ町・広町遺跡』
- 125 茅ヶ崎市教育委員会 1998「矢畠金山遺跡VI」『茅ヶ崎市文化財調査報告』10
- 126 茅ヶ崎市教育委員会 1998「西久保広町遺跡」『茅ヶ崎市文化財調査報告』11
- 127 かながわ考古学財団 1999「臼久保遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』60
- 128 早川城址調査会 1997『早川城址調査報告書』
- 129 神明若宮地区内遺跡発掘調査団 1997『神明若宮地区内遺跡』
- 130 大和市教育委員会 1998「下鶴間城山(伝山中修理助貞信壘跡・大和市No.181遺跡)」『大和市文化財調査報告書』第66集
- 131 国分尼寺北方遺跡調査団 1996『国分尼寺北方遺跡－第7次・第8次調査－』
- 132 平塚市教育委員会 1998「山王久保遺跡他」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』31
- 133 平塚市真田・北金目遺跡調査会 1999『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』1
- 134 平塚市教育委員会 1999「高林寺遺跡他」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』33
- 135 愛甲宿遺跡第2地区発掘調査団 1998『愛甲宿遺跡第2地区』
- 136 国道412号線遺跡発掘調査団 1998『中荻野成井田遺跡』
- 137 かながわ考古学財団 1998「東富岡・杉戸遺跡(No.38), 東富岡北三間遺跡(No.4), 上粕屋・川上遺跡(No.5・6), 上粕屋・三本松遺跡(No.7), 上粕屋・川上西遺跡(No.8)」『かながわ考古学財団調査報告』34
- 138 かながわ考古学財団 1998「上粕屋・上尾崎遺跡(No.10), 上粕屋・〆引北遺跡(No.11), 上粕屋・〆引西遺跡(No.12東)」『かながわ考古学財団調査報告』56
- 139 かながわ考古学財団 1999「上粕屋・小山遺跡(No.9・39), 三ノ宮・下御領原遺跡(No.12西), 上粕屋・〆引東遺跡(No.40)上粕屋・〆引南遺跡(No.41)」『かながわ考古学財団調査報告』52
- 140 かながわ考古学財団 1999「神戸・上宿遺跡(No.15)」『かながわ考古学財団調査報告』57
- 141 かながわ考古学財団 1997「中里遺跡(No.31), 西大竹上原遺跡(No.32)」『かながわ考古学財団調査報告』30
- 142 かながわ考古学財団 1997「小南遺跡(No.28), 東北久保・鳥居松遺跡(No.29)」『かながわ考古学財団調査報告』23
- 143 かながわ考古学財団 1998「不弓引遺跡(No.21・22), 鶴巻大椿遺跡(No.32), 鶴巻上ノ窪遺跡(No.25上), 北矢名南蛇久保遺跡(No.25下), 北矢名矢際遺跡(No.26)」『かながわ考古学財団調査報告』32
- 144 かながわ考古学財団 1999「鉢ノ木遺跡(No.27)」『かながわ考古学財団調査報告』54
- 145 山北町河村城関連遺跡調査会・山北町教育委員会 1996『河村城関連遺跡(河村城関連遺跡詳細分布調査報告書)』
- 146 かながわ考古学財団 1995「宮ヶ瀬遺跡群V馬場(No.6)遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』4
- 147 津久井城遺跡調査会・津久井城遺跡調査団 1997『津久井城の調査』I
- 148 津久井城遺跡調査会・津久井城遺跡調査団 1997『津久井城の調査』II
- 149 津久井城址調査団 1998『津久井城』
- 150 近藤英夫・小柳美樹他 1999「津久井町津久井城址御屋敷址」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表趣旨』
神奈川県考古学会

117. 西ノ谷遺跡

床面

9-I



9-H

10-I



118. 関耕地遺跡

1号竪坑



119. 中ノ宮北遺跡

道路状遺構

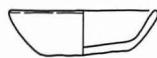
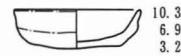
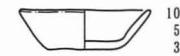
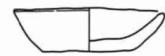


120. 川名森久地区遺跡群

1号やぐら



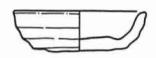
2号やぐら



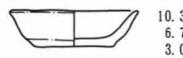
11.9
7.3
3.6



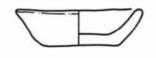
11.4
6.1
3.2



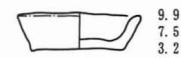
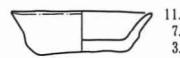
10.8
7.8
3.2



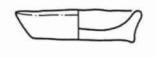
10.3
6.7
3.0



10.2
7.4
3.0



10.7
8.1
2.9



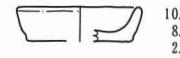
9.9
8.3
2.7



11.8
7.5
3.8



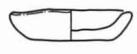
9.6
7.6
2.8



3号集石



4号集石



5号集石



8.0
5.6
2.8



9.7
6.2
2.5



8.7
5.7
2.0



121. 大源太遺跡

A～Cトレンチ



122. 片瀬大源太遺跡

遺構外



123. 本在寺遺跡

方形土壙1



土壙1



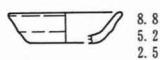
0 10cm

125. 長浜ノ上遺跡

遺構外



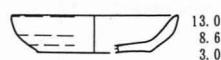
T P I



T P L



10区



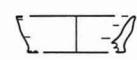
127. 長岡南遺跡

Bトレンチ



129. 矢畠金山遺跡

竪穴状遺構



2号溝状遺構



130. 西久保広町遺跡

1号溝状遺構



128. 八幡神社遺跡



1号溝状遺構



遺構外



131. 白久保遺跡

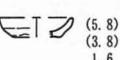
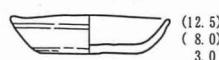
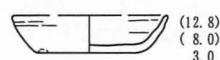
遺構外



132. 上ノ町・広町遺跡

第2区遺構外

第3区第14号土坑



第4区ピット99



第6区第2号溝状遺構



第6区第3号土坑



第8区第2号井戸址



133. 早川城跡

堀



134. びわみ堂遺跡

I-1T



II-2T



1号柱穴列

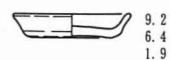
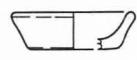
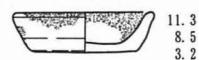


II-3T



135. 長泉寺遺跡

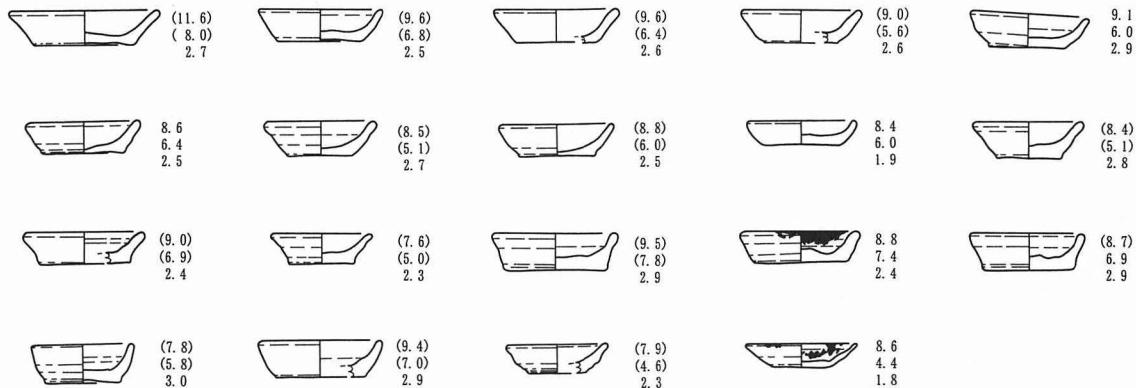
2号集石



0 10cm

136. 神明若宮地区内遺跡

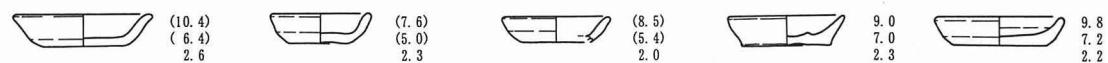
第1号溝状遺構



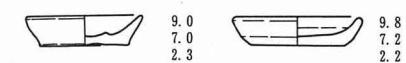
第2号溝状遺構



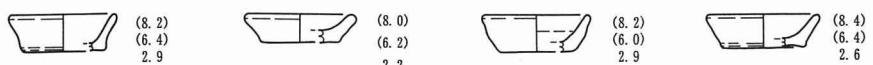
第1号掘立柱建物址



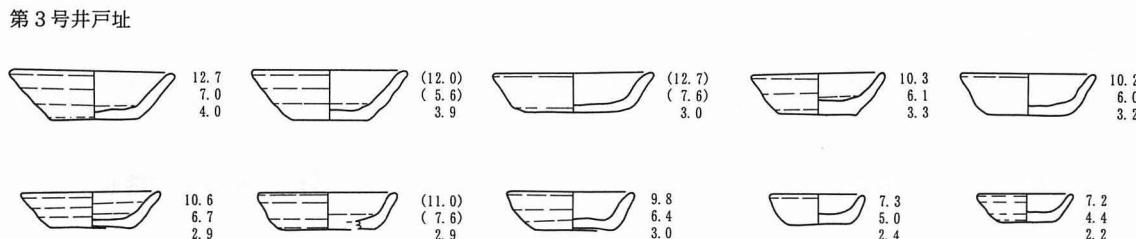
第2号掘立柱建物址



第1号井戸址



第2号井戸址



第1号土坑



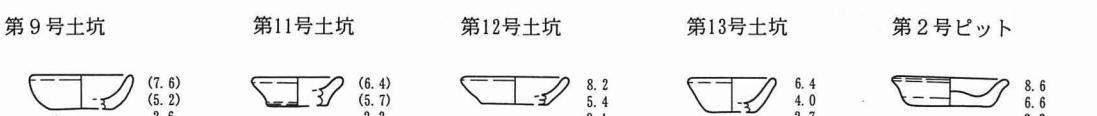
第2号地下式坑



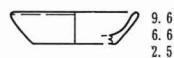
第3号地下式坑



第3号土坑



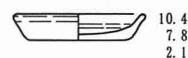
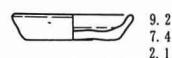
第5号ピット



第9号ピット



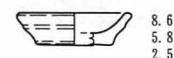
第13号ピット



P-3・4グリッド



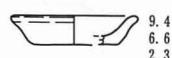
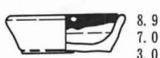
Q-3グリッド



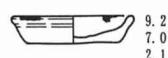
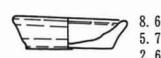
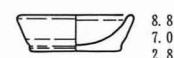
S-2グリッド



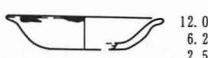
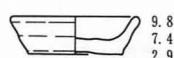
T-2グリッド



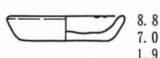
試掘第3トレンチ



試掘第4トレンチ

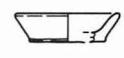


遺構外

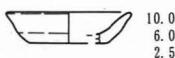


137. 下鶴間城山遺跡

第1地下式坑



第20号ピット



138. 国分尼寺北方遺跡

第7次遺構外

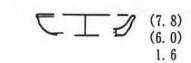


139. 山王久保遺跡第8地点

1号竪穴住居址



第20号ピット



24号土坑

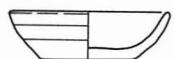


35号土坑

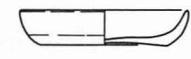


140. 真田・北金目遺跡

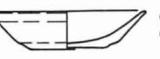
1区SX001



1区遺構外



24号土坑



141. 高林寺遺跡第12地点

3号溝状遺構

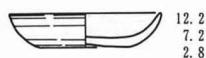


142. 愛甲宿遺跡第2地点

SX-02



SX-07

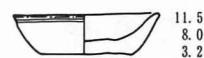


SD-03



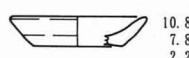
143. 中荻野成井田遺跡

第9号土壙



144. 東富岡・北三間遺跡(No.4)

4-1区遺構外

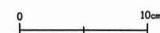


145. 上粕屋・沢引北遺跡(No.11)

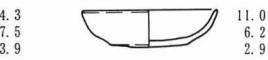
1号堀



1号掘立柱建物址



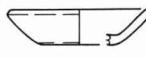
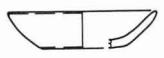
9号竪穴状遺構



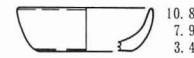
10号竪穴状遺構



11号竪穴状遺構



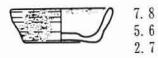
13号竪穴状遺構



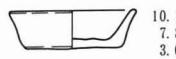
14号竪穴状遺構



5号道



2号溝



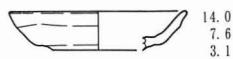
37号土坑



ピット群

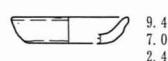


遺構外



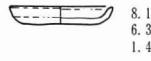
146. 上粕屋・〆引西遺跡 (No.12東)

遺構外

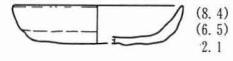


147. 三ノ宮・下御領原遺跡 (No.12西)

第1号礫集中



遺構外



148. 神戸・上宿遺跡 (No.15)

C31号土坑



C1035号ピット



C1077号ピット



2区遺構外



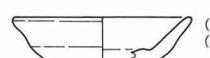
149. 中里遺跡 (No.31)

遺構外

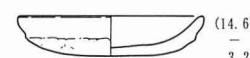


150. 小南遺跡 (No.28)

K7号溝及びK1~11号土坑



遺構外



151. 北矢名蛇久保遺跡 (No.25下)

C3号竪穴状遺構



C4号竪穴状遺構



C2号地下式坑



C15号溝状遺構

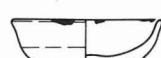


遺構外

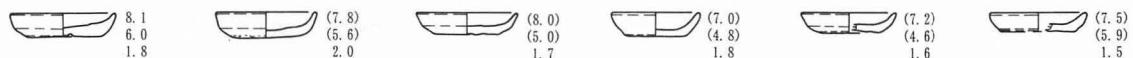


152. 鉢ノ木遺跡 (No.27)

遺構外



0 10cm



153. 河村城跡第VI地点

S B 0 4

第2トレンチ

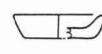
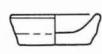
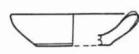
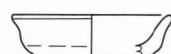
第5トレンチ

第8トレンチ



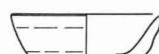
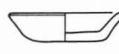
第9トレンチ

第12トレンチ

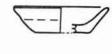
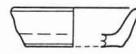
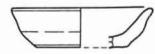
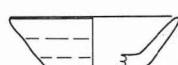


第16トレンチ

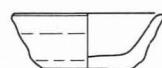
第28~31トレンチ



第34トレンチ

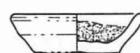


不明



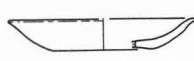
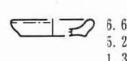
154. 馬場遺跡(No. 6)

北側斜面遺物包含層



155. 津久井城跡

遺構外



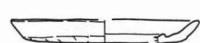
1号土坑群



B - 5 区



1号堀



0 10cm

神奈川県下における近世井戸址の研究（3）

近世研究プロジェクトチーム

1. はじめに

近世井戸址119基を集成・形態分類（1997年度）・年代観（1998年度）について分析検討してきた。その結果、形態分類では、円筒状を呈するI群が主体で、深さが2mを超え（1類）上部に変形部分のない（ア属）素掘り（A種）のI群1類ア属A種が最も多い。I群に次いでIIIa群、IV群、IIIc群のロート状や逆截頭円錐状が多く、形態分類した116基中この4群で101基87%を占めていて、円筒形状の素掘りの井戸が主体であったことが判明した。また、深さ2m以上の72基中38基がI群で50%を超えていた。

年代は、集成した119基中51基の43%で過半数に及ばず、傾向を言及するにとどまったが、17世紀代はロート状や逆截頭円錐状のIIIa群、IIIc群、IV群が主体で、18世紀代は17世紀代に少なかったI群が数を増していくのに対し、17世紀に主体であったIIIa群、IIIc群、IV群は減少してくる。19世紀代はI群が圧倒的になりIII群は見られなくなる。18世紀（江戸時代後期）にロート状を呈するIII群からほぼ垂直に深堀するI群に変わっていく流れが見られる。今回は立地や平面的分布による変化を見て、その課題を明らかにしていくことを試みた。



第1図 近世井戸址の分布

2. 形態別分布の検討

119基の分布を形態別に示したのが第1図である。約6割が水位が高く、比較的井戸の掘り易いと思われる逗子市・平塚市・鎌倉市等の沖積地や砂丘に、約4割が横浜市・綾瀬市・相模原市等の台地や丘陵に分布しており、今のところ山間に立地する遺跡からの検出例は認められない。ここでは井戸址の形態と立地にどのような関係があるのかを検討してみたい。

【I群】 52基が10市19遺跡（群）に分布する。県内の近世井戸址の代表的な形態といえ、綾瀬市・平塚市・横浜市・川崎市・相模原市の丘陵や台地に立地する遺跡から逗子市・鎌倉市・小田原市・藤沢市・平塚市の沖積地や砂丘に立地する遺跡まで広い範囲で認められる。

【II群】 2市2遺跡に2基が分布するのみの希少形態である。藤沢市・湘南藤沢キャンパス内遺跡（184）と平塚市・豊田本郷遺跡（212）で見られる。立地は前者が丘陵、後者が沖積平野である。

【IIIa群】 19基が8市9遺跡（群）に分布する。I群に次いで数の多い形態である。市別にみると、逗子市に5基、平塚市に4基、相模原市に3基、川崎市および綾瀬市に2基があるほか、横浜市・鎌倉市・小田原市に各1基が分布する。内陸部・低地の別なく県内のほぼ全域で認められるが、井戸側を有するもの（6基）は、横浜市・奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡（5）第2号井戸址を除いて砂丘・沖積地に立地する。

【IIIb群】 7基が2市2遺跡（群）に分布する。逗子市・池子遺跡群に6基（No.7地点3基、No.1-B地点・No.1-C地点・No.5地点各1基）、藤沢市・折戸遺跡（182）に1基あり、立地はいずれも沖積地である。本群は85%が池子遺跡群に集中しており、地域限定的な形態といえそうである。

【IIIc群】 14基あるが、分布は2市2遺跡（群）に限られる。池子遺跡群で10基（No.7地点5基、No.5地点3基、No.1-C地点2基）、豊田本郷遺跡で4基が検出されている。本群はIIIb群と同様に地域性がみられる形態といえ、立地も沖積地に限られる可能性が高い。

【IV群】 16基が4市5遺跡（群）に分布する。池子遺跡群の6地点で9基、豊田本郷遺跡で4基みられるほか、鎌倉市・材木座町屋遺跡（398）、折戸遺跡、原口遺跡から各1基が検出されている。立地は丘陵斜面の平塚市・原口遺跡以外はすべて沖積地である。

【V群】 4基が2市2遺跡（群）に分布する。池子遺跡群No.7地点に3基、鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群No.242（397）に1基ある。本群は今のところ、逗子市・鎌倉市の沖積地といったきわめて狭い地域でしか確認されていない。IIIb群・IIIc群と同様に地域限定的な形態といえるようである。

【VI群】 2基が2市2遺跡（群）に分布する。II群と同じく希少形態である。奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡と平塚市・新町遺跡（218）に認められる。立地は前者が丘陵、後者が沖積平野である。

【VII群】 3基が2市2遺跡に分布する。横浜市・西ノ谷遺跡（34）に2基、原口遺跡に1基ある。いずれも台地または丘陵に立地する屋敷周辺の段切り部分に構築されている。

3. 年代別分布の検討

51基の使用年代（集成No.10・23・31・70・118以外は推定使用年代）は、16世紀後半8基、17世紀前半12基、17世紀後半6基、18世紀前半5基、18世紀後半14基、19世紀前半6基である（第2～5図）。ここでは、それらを16世紀後半・17世紀代・18世紀代・19世紀前半の4期に分け、各時期の傾向をみることにする。

【16世紀後半】 8基の立面形態は、IIIa群3基、I群・IIIb群・IIIc群・IV群・VI群各1基で、III群が62.5%を占める。深さは5基が2m以上、3基が2m未満で、深さの知れる7基の平均は2.8mを測る。上部の

近世井戸址年代別集成一覧

16世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
81	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE02	16世紀後半	I群1類イ属A種a	3.38	丘陵斜面
31	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-13号井戸址	16世紀後半	IIIa群2類ア属A種b	1.7	低地
67	155	鎌倉市・政所跡	北区1面井戸1	16世紀後半	IIIa群1類ア属B-①種		沖積低地
92	257	小田原市・中宿第II地点	第1号井戸	16世紀後半	IIIa群1類イ属B-③種	7.01	扇状地
43	122	逗子市・池子遺跡群No.5地点	K-21号井戸址	16世紀後半	IIIb群2類ア属A種b	1.9	低地
51	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第22号井戸址	16世紀後半	IIIc群1類ア属A種b	2.3	低地
25	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-6号井戸址	16世紀後半	IV群1類ア属A種b	2.3	低地
97	218	平塚市・新町遺跡	1号井戸址	16世紀後半	VI群2類イ属A種b	0.96	沖積平野

17世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
33	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D地点	第5号井戸址	17世紀前半	I群1類ア属A種b	3.3	低地
28	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-10号井戸址	17世紀前半	IIIa群2類ア属A種b	1.5	低地
35	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D地点	第8号井戸址	17世紀前半	IIIa群1類ア属A種b	4.2	低地
60	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第38号井戸址	17世紀前半	IIIa群1類ア属A種b		低地
95	202	平塚市・中原御殿D遺跡	SE01	17世紀前半	IIIa群1類ア属B-②種	3.92	砂丘斜面
23	116	逗子市・池子遺跡群No.1-B地点	第1号井戸址	17世紀前半	IIIb群2類ア属A種b	1.6	低地
30	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-12号井戸址	17世紀前半	IIIc群1類ア属A種b	2.1	低地
41	122	逗子市・池子遺跡群No.5地点	K-11号井戸址	17世紀前半	IIIc群1類ア属A種b	3	低地
50	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第21号井戸址	17世紀前半	IIIc群1類イ属A種b	2.7	低地
54	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第31号井戸址	17世紀前半	IIIc群1類ア属A種b	2.3	低地
32	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D地点	第2号井戸址	17世紀前半	IV群1類ア属B-③種a	4.1	低地
70	397	鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群(No.242)	井戸11	17世紀前半	V群1類ア属B-①種	2.2	砂丘
12	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸5	17世紀後半	I群1類ア属A種a	4	台地
16	395	横浜市・市ノ沢団地遺跡	第1号井戸	17世紀後半	I群1類イ属A種b	5.5	台地
118	222	平塚市・原口遺跡	K-9号井戸	17世紀後半	I群1類ア属A種b	4.9	丘陵
26	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-7号井戸址	17世紀後半	IIIb群2類ア属A種b	1.5	低地
29	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-11号井戸址	17世紀後半	IIIc群1類ア属A種b	3.6	低地
106	212	平塚市・豊田本郷遺跡	SE77	17世紀後半	IIIc群2類ア属A種b	1.92	沖積平野

18世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
3	4	横浜市・奈良地区遺跡群熊ヶ谷遺跡	第3号井戸	18世紀前半	I群1類イ属A種a	4.67	丘陵
68	155	鎌倉市・政所跡	北区1面井戸2	18世紀前半	I群2類ア属A種b	1.9	沖積低地
91	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE21	18世紀前半	I群1類イ属A種b	3.42	丘陵斜面
63	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第44号井戸址	18世紀前半	IIIc群1類イ属A種b	4.2	低地
101	212	平塚市・豊田本郷遺跡	SE43	18世紀前半	IIIc群1類ア属B-②種	1.9	沖積平野
6	11	横浜市・長光廃寺址	井戸(I-1)	18世紀後半	I群1類イ属A種b	5.8	台地
7	34	横浜市・西ノ谷遺跡	西ノ谷地区井戸1	18世紀後半	I群1類ア属A種a	5	台地
9	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸2	18世紀後半	I群1類ア属A種a	7.5	台地
10	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸3	18世紀後半	I群1類イ属A種a	7	台地
17	395	横浜市・市ノ沢団地遺跡	第2号井戸	18世紀後半	I群1類ア属A種b	5.7	台地
59	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第37号井戸址	18世紀後半	I群1類ア属A種b	3.5	低地
69	162	鎌倉市・円覚寺境内西やぐら群	第1号やぐら内近世井戸	18世紀後半	I群1類イ属A種a		谷戸開口部
89	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE19	18世紀後半	I群1類ア属A種b		丘陵斜面
113	222	平塚市・原口遺跡	K-4号井戸	18世紀後半	I群1類ア属A種b	1.8	丘陵
18	56	川崎市・宮添遺跡	1号井戸址	18世紀後半	IIIa群1類ア属A種a	7.23	丘陵
27	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C地点	K-8号井戸址	18世紀後半	IIIa群2類ア属A種b	1.05	低地
46	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第5号井戸址	18世紀後半	IIIb群1類イ属B-④種b	3.8	低地
61	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第41号井戸址	18世紀後半	IIIb群1類ア属A種b	3.1	低地
56	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第34号井戸址	18世紀後半	V群2類ア属A種b	1.4	低地

19世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
2	4	横浜市・奈良地区遺跡群熊ヶ谷遺跡	第2号井戸	19世紀前半	I群1類ア属A種a	4	丘陵
8	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸1	19世紀前半	I群1類イ属A種b	6.3	台地
47	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第7号井戸址	19世紀前半	I群2類イ属A種b	0.7	低地
94	400	小田原市・三の丸御長屋跡第I地点	1号井戸	19世紀前半	I群1類イ属A種b		低地
4	5	横浜市・奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡	第1号井戸址	19世紀前半	VI群1類ア属A種a	3.5	丘陵
15	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区横井戸2	19世紀前半	VII群		台地

註

- 図・表中の集成No.は、かながわの考古学 研究紀要3(1998)と同じ。
- 図・表中の遺跡No.は、かながわの考古学第5集(1995)と同じ。なお、同第5集掲載以後に刊行された報告書の遺跡番号は次の通り。
395 横浜市・市ノ沢団地遺跡 396 川崎市・黒川地区遺跡群No.10遺跡 397 鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群(No.242)
398 鎌倉市・材木座町屋遺跡 399 小田原市・瀧之前遺跡 400 小田原市・三の丸御長屋跡第I地点
- 使用年代・形態分類・深さの詳細については、かながわの考古学 研究紀要3(1998)・4(1999)を参照。
- 立地については、各報告書の記載に準じた。



第2図 推定使用年代が16世紀後半の井戸址の分布



第3図 推定使用年代が17世紀代の井戸址の分布



第4図 推定使用年代が18世紀代の井戸址の分布



第5図 推定使用年代が19世紀前半の井戸址の分布

変形部分の有無は、掘込みをもたないものが5基あり、そのうちの4基は池子遺跡群に存在する。井戸側の有無については、Ⅲa群のNo.67とNo.92の2基が有している。足掛かりは丘陵に立地するNo.81のみに認められる。立地場所は7基が沖積地、1基が丘陵であり、沖積地の分布が目立つ。

【17世紀代】 18基の立面形態は、前半がⅢa群・Ⅲc群各4基、I群・Ⅲb群・IV群・V群各1基、後半がI群3基、Ⅲc群2基、Ⅲb群1基である。前半はⅢ群の占める割合が7割を超えており、後半になると円筒状のI群がやや増えてⅢ群と同数となる。深さは14基が2m以上で、平均は約3mを測る。上部の変形部分の有無は掘込みをもたないものが主体で、もつものはわずか2基しかない。井戸側は前半代のNo.32・70・95の3基が有している。足掛けはNo.12とNo.32の2基に認められるのみである。立地場所は16世紀後半と同様沖積地が主体で、特にⅢ群はいずれも沖積地に立地する遺跡から検出されている。後半になるとそれまであまり認められなかったI群が丘陵や台地で見られるようになる。

【18世紀代】 19基の立面形態は、I群12基、Ⅲa群・Ⅲb群・Ⅲc群各2基、V群1基である。17世紀後半から増加し始めたI群がⅢ群にかわって主流となる。深さは16基が2m以上で、平均は約4mを測る。上部の変形部分の有無をみると、掘込みをもたないものが12基、もつものが7基で、後者のうちの5基はI群である。掘込みの形状は不整形なものが多いが、No.6のように井戸枠を設置したと思われる方形を呈するものもある。井戸側はⅢ群のNo.101およびNo.46の2基のみが有している。足掛けはNo.3・7・9・10・69・18の6基に認められる。そのうちの5基はI群で、深さの平均は約6mを測る。立地場所は丘陵地・低地を問わないが、後半になると台地や丘陵地での検出例が多くなっている。

【19世紀代前半】 6基の立面形態は、I群が4基、VI群・VII群が各1基である。I群が主流でⅢ群は見られなくなる。深さの知るのは4基で、このうちの3基は3.5mを超えており、上部の変形部は3基で認められる。構造物の有無についてみてみると、井戸側を伴うものではなく、足掛けはNo.2・No.4で認められる。立地場所は丘陵地・低地を問わないが、18世紀代後半と同様に台地・丘陵が主体となっている。

4.まとめ

以上の状況から県内の近世井戸は、16世紀後半から17世紀前半は井戸上部の膨らむロート状を呈するⅢ群が主で、掘削深度は大半が2m～3mで一部地域に7mに及ぶものが見られ、大半が低地に立地し丘陵部のものも斜面や中腹に立地していて、前時代の伝統を引き継いでいる時期といえる。17世紀後半から18世紀前半は、前時期に主体であったⅢ群と前時期に極一部に見られたI群とが半々となり、掘削深度も平均で3.5m前後と深くなっている、I群は丘陵地、Ⅲ群は低地に立地し、前時期に加え新たな技術が一般にも導入されてきた時期と思われる。18世紀後半から19世紀前半は、前時期に数を増してきたI群が主体となって丘陵地にも多く造られるようになり、掘削深度も更に深くなる。前時期に一般に導入された技術が定着してきた時期と言え、19世紀に入るとⅢ群は見られなくなる。

3回の分析により県内近世井戸の変遷が僅かに見えてきた状況で、限られた資料であり傾向があるとしておきたい。今後資料の増加を待って再検討する必要を感じて結としたい。

研究紀要 5

かながわの考古学

発 行 日 平成12年（2000）5月1日

発 行 かながわ考古資料刊行会

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

財団法人 かながわ考古学財団内

tel (045)252-8661 fax (045)261-8162

印 刷 中川印刷株式会社

本書は、平成12年（2000）3月31日に財団法人かながわ考古学財団が編集・発行したものを、かながわ考古資料刊行会が同財団の許可を得て増刷したものである。